
学園世界！

新殿 翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園世界！

【Nコード】

N6479K

【作者名】

新殿 翔

【あらすじ】

この物語はっ、ぴっちぴちの女子高生、私こと緋色ちゃんの日常をつらつらと綴った平和な学園モノである！ というウソ！

実際には一般生徒が対大陸魔術を連発するような学園に通うすーぱーでらつくす（笑）百合ふあんたじー物語であるっ！ ででん！
とりあえず高望みはしちゃいけないと思いつつも回りの可愛い女の子に目移りしてしまいますぜ？ 美少女のためなら誰であろうとぶっ飛ばす！

私の名前はっ！

目の前に、トラックが迫っていた。

人気のない、暗い夜。

ガラス越しの運転手の顔は真っ赤で、しかもぐったりとしている。
酒気帯び、ついでに居眠り運転だ。

……うわー。

部活で最後まで自主練するというこの努力家な私への報酬が不幸
とは、なかなかまたやるじゃねえか運命とかそこのやつのやつ。

まあ自主練っても文芸部ですが。単に小説の執筆に夢中になって
いただけですが。なにか？

ちなみに文芸部って聞けば通りはいいけど、実際にはたんなるラ
ノベ愛好家の集いです。私部長だったり。つまりあれですね、オタ
ク代表。いやいやラノベ呼んでるからオタクとは限らないか。

むしろ今オタクって聞いて根暗想像したやつ前に出る。文武両道
なわたくしが鉄拳による愛の鞭——いや間違えた拳だった——をお
見舞いしてやる。

大丈夫、痣とかは残らないように秘密のレッスン風味でお送りす
るから。

ちなみに今年の新入生に配られた部活案内の冊子で、文芸部の勧誘文句は『ビタミンY。この単語にぴんときたら入部！』だったり。ビタミンYわかる？

いや、いいよね美少女同士の絡みって。

もちろん『美』がつくことが最低条件なのは言うまでもないね。

おっと話が逸れた。

ははは。暴走トラックを目の前にしてこうも平然としていられる私を褒めてくれてもいいんだぜ、神様。

あ、なんなら転生とかいう選択肢もオッケー。もち、チートじゃないと、嫌ですけど。

そんなこんなでこう、私がトラックとキスするのまであと数秒ってかまあ多分一秒未満。

ふむあと何か考えることはあっただろうか。

そうだ、走馬燈を見よう。

——生まれた。育った。オタクった。高校二年生とある夏の夜、私にトラックが猛烈な求愛行動。

やべえどうしようもう終わっちゃったんですけど。

そのくらい平凡な人生だったってことですな。ええ。平凡万歳！嘘やっぱり非日常もいい。ファンタジー最高！

ってもこんなトラックと勢いよくフュージョンあ悪いミスったテヘツ、みたいなノリでこつつんこしちゃう非日常は特に求めているけど、あれもしかしてこれって好き嫌い。そうだよね好き嫌いはいらないよね。

よっしゃかかってこいトラック。

だが逃げるなら今のうちだぜ。私の総重量は四十五キログラムとスリムさだけにはちよいと自信があるので貴様なぞ逆に轢いてやるわ。嘘だけど。やべえラノベのキャラの口癖パクるとか私超イタいぞ。

だがあえてこれからラノベのキャラの口癖をパクっていく所存である。まあこれからという先があるかどうかはマジ不明。

ちなみにスリムをイコールで美形と結びつけるのはどうかと私は思う所存でございますオホホホホ。

さてはて……あ、間違えた。

はてさて、ところでトラックさんやい。そろそろその熱いキッスで私をとらえてはくれないのかい？

さっきから私は緊張の余り目をつぶっちゃってるんだが。目、開けていいですか？

でも目を開けて目の前に目があったらビックリするじゃん。

んー、でも流石にそろそろザ・ワールドという言い訳も出来なく

なってきたね。何秒時間をとめている私。そもそもいつスタンドに目ざめた。

よし、じゃ、目を開けるよし？

いち、にー、さんっ。

ふおっ。

やべえ今、私は世界の中心にいる！

冗談。

いやあながち冗談でもないかも？

うーん、まあそれは置いておくとして、とりあえず冗談——いやだから冗談さん（年齢不詳）、そこらに転がっていてくださいよ。私今大切なことを考えてるので。

さて……現状を整理しよう。

トラックに「お前を、愛してる」と言われた。まあ多少の脚色には目を瞑ってよ。

そこで私はこう答えたわけさ。「貴方のタイヤの跡を私につけてっ！」いや私マゾじゃねえよ。ってかそれ跡付ける前にミンチだわ。もしくは安いホテルの朝のバイキングで出る水気たっぷりなスクランブルエッグ。

それで、まあよくよく目を凝らしてみたら、おやどうしたことか。

私、真っ白空間に立ってます。

ここどこー？

私こんな歳で迷子とかマジ恥ずいんですけど。ひゃっほうい！

『大丈夫よ、私がいるから迷子ではないわ』

おんや？

後ろを向く。

おやおやおや。

そこに、まあなんていうか、いましたよ。

銀の髪を長く伸ばし、ポニーテールに纏めた女性だ。瞳は見たこともないくらい綺麗な蒼で、その身にまとう黒いドレスはウェディングという単語を前につけていい感じのもの。んで、背中からは白い翼が六枚生えてる。

翼が生えていることにはとりあえず沈黙を通すことを決めて、総評。

絶世の美女。もしくは傾国の美女。後者は若干悪役寄りになります。

『なら、絶世の美女でいいかしら？』

鈴の鳴るような声で、その人が笑んだ。

「おおぅ……」

なんだ思考が読まれてるのか。

『ええ』

テンプレだな！

なら私はこう返さざるを得ない。

この頭の中の不法侵入者！

『口に出して喋ってくれるなら、もう思考は覗かないわ』
「なら喋ろう」

これ以上頭の中身を覗かれたら私の過去が赤裸々にバレてしまう。

『あら、ならもう少し覗いていようかしら』
「もう覗かないといったその口をホッチキスでとめてしまえ」
『冗談よ。本当にもう止めたわ』

バーカバーカ。

『……』

「……よし」

『まあ何を考えていたかは予測できるのだけれど』

「なっ、これでも近所では寡黙で無表情で氷のような美しさを持つむしろさっさと石になってしまえこの野郎いや私は野郎じゃねえし、というこの私の思考を予測するだって!？」

『楽しい子ね』

そんな評価のされ方は久しぶりです。

「それで神様ー」

『私は神様ではないわよ?』

「え、そなの?」

てっきり神様かと……。

「じゃ、天使?」

『いいえ、一応、人間ね。知り合いはもう誰も私を人間という扱い

で見てはくれないけれど、悲しいことにね』

背中から翼生えてる人がいたらおそらく私もその人のことは人類のカテゴリから外すよ。

「まあ、じゃあ神様」

『そう呼びたいのなら構わないけれどね』

「チート能力付けて異世界転生よろぴく！」

よろぴくってすげえ昔の言葉じゃね？

『貴方は本当に面白い子ね。こういう場面でそんなリアクションをしたのは貴方が初めてよ』

「アンチ・マジョリティな人間なので」

カラスが白と言われると黒くしたくなる。実は世界のカラスが黒なのは私が全て黒く染め上げたからなのだ。

まあでもぶっちゃけカラスが何色だろうが気にしないけど。うん、なんだこの思考。不毛だ。

『まあ、混乱していないなら話がしやすくて助かるわ』
「めっちゃ混乱してます」

ほれ、私の心臓止まっちゃってますよ？ もちろん嘘だけど。

でも少なくとも今すぐにでも「不幸だー！」と叫べるくらいには混乱してますね、ええ。

『貴方には、二つの選択肢があるわ』

「素敵に無視する貴方が好きです！」

『あら、本当？ ありがとう』

無視しろよ。

そんな笑顔向けてきやがって、ちよいとドキツとしちゃったじゃない。

『一つは、このまま元の場所に戻って、あのトラックに轢かれて万
事問題なく死亡するか』

問題ありまくりですね。

『一つは、何年かを異世界で過ごすか。その後は、上手くやれば元
の世界に戻ることも出来るわ』

「せんせー質問」

『はいどうぞ』

おい今その教鞭どこから取り出した。

「チート性能はつけてくれますか？」

『はっきり言って付ける必要がないわ』

「へ？」

なんですと？

つまり異世界でスライムに殺されろと？

あるいはあれですか？ エッチなイベントを起こせと？ くそう
スライムが初体験なんて流石に御免こうむる。

『勘違いしないでね、なにも見捨てようと言うのではないのよ？』

「だったらどういう腹積もりだ」

『貴方、もう魔術の才能とかがそのままでも凄いのよ。だから、普通
に勉強したら、すぐにチートになれるわ。そういう人間だからこそ、
こうして私がすくい上げようとしているわけだし』

「ナ、ナンダッテー！」

生まれてこのかた十何年。自分にそんな才能があったなんて！

でも中学の頃にSLB（とある魔王の大砲撃）を撃てないか超真
剣に試そうとして使えなかった覚えがありますよ！

あれか、デバイスがなかったのが駄目だったんか。

『そして、貴方が行くことのできる異世界は、学園世界。様々な世界から、才能がある子達が集まる世界よ』

「そんな世界があるんだー」

『ええ』

学園都市ならぬ世界とは、スケールでさえ。

『それで、どうする？ このまま平凡を愛して終わるか、非日常に飛び込むのをよしとするか』

「一つ訊きたいんだけどさー、その学校ってどういう目的で存在してるの？」

『表向きは、有能な子を見つけて、天界の仕事に就かせたり、違法な行為をする悪魔を取り締まる組織に入れたり、まあいろいろね。普通にそういう仕事に就かずに日常に戻る子もいるわ。あと、稀にだけ他と比肩しない程の能力の持ち主は神様に新しく世界を作ってもらって、その世界の管理人にしてもらう子もいるようね』

世界の管理人とかなにそれ超楽しそうじゃん。それ以上に面倒くさそうだけど。

「へー。で、裏は？」

『私の趣味で作ったのよ。ちょっと私の愛する女の子達に制服を着せたくて、それをデザインしたついでに学園を作ったの』

この人、百合な人でしたか。ヤツタネ。

っていうか制服のついでで学園とか普通逆でしょう。そういう正当なツツコミは今はずべき時ではない気がするので自重。

「ちなみに私はどのくらいのレベルに到達できます？」

『世界の管理人くらいなら余裕ね』

「マジか……」

やべえ野望が今から広がる。

「よっしゃじゃあもう決定ですね異世界レッツゴー」

『本当にいいの？』

「ここまで行って私が行かないという選択肢を取ってるんですかユー？」

『まあ、そうでしょうね』

まったく人が悪いぜ。トラックと一夜限りで燃え尽きるような抱擁を交わすか、世界の管理人も進路に含まれる学園ですよ？

悪い、トラックさん。私ビジネスに生きる女だからアンタとのラヴもこれで終わりだわ。

『それじゃあ、早速行ってもらおうかしら』
「イク！」

なにがとは言わない。

『ふふっ……それじゃあ、頑張ってね。名前、聞いてもいいかしら？』

「知ってんじゃないの？」

『それでも、本人から聞きたいのよ』

意味が解りません。ですがまあ聞かれたのなら紳士として答えましょう。淑女だけど。

「棘ヶ峰。棘ヶ峰おとろがめね緋色」

そしてわたくしの非日常のスタートボタンが押されたわけさ。

私の名前はっ！（後書き）

一年明けてのエイプリルフールの嘘を真に変える！

去年の嘘が嘘になりました！　ということで今年のエイプリルフールは完遂ですな。

その出会いはっ！

意識がいきなり切り換わる。

……おろ？

ここは、どこだろ。

辺りを見回すと、果てが見えないくらい大きな草原にぼんやり突っ立っていた。なにこれ孤高の旅人設定とか思ったけれど、別に孤高願望はないのでそれは却下。

やっぱりお友達とキャツキャウフフするのがいいーよ。うん。

ちなみに果てが見えないと先程申しましたが実は遠くの方に街が見えてたりします。嘘ついてごめんねっ。

いやまあ街が見えるっていうのが嘘っていうのもまた嘘であり、つまり本当にあるわけだけれど。

とりあえず、あれだね。

私は無事、学園世界とやらに到着したっぽい。

「……なんだ」

ちよっと拍子抜け。

てつきりこういう時はテンプレ的に空から落下するものとばかり思っていたのに。まあ、どうやらチート能力の付加はされなかったらしいのでそんなことされたら死んじゃうけど。

「とりあえず、あの街を目指せばいいのかな？」

今のところ人がいそうなのはあそこくらいだし、行くしかないだろう。

それともまさかここで、街とは正反対の方向に行くと言う冒険ルートを歩んじゃうつもりですか？

それもいいかもしれない。でも十中八九それは難易度エクストリームなので止めておこう。

ごめんね、テンション高くって！

誰に謝ってるんだろ私。

普通に街に向かおう。

草原を歩きだす。超、緑臭い。

都会っ子に自然は最早毒だね。

歩きながら、これからのことを考える。

ここは異世界だ。自分の身の振り方くらい考えないと、これから先苦勞することは明らか。

私は人生ベリーベリーイージーがいいからね。こういうところは念入りに行くぜ。

まず第一に、自分の身分。

とりあえずこの世界はあの神様っぽい人が言うにはここは有能な人間をいろんな世界から集めたところらしい。

であれば、まあ私も外の世界からウェルカムしまった、って告白しても平気だよな。

これが神様の手違いで殺害からの転生モノの異世界ならそういうことを下手にこぼすのは危険だけど、ここじゃあそれがスタンダードなわけだし。

街についたら『新入りの棘ヶ峰DEATH☆』って言えばいいか。少なくとも即座に首ちょんぱということはないだろう。

首ちょんぱとか懐かしい言葉だなあ。

私が最初に作る必殺技は首ちょんぱにしよう、とか馬鹿なことを考える。いやしないけどね？

さて……それで私は何を考えていたんだったかな。

いけないねえ最近物忘れがひどくって。寄る年波には勝てませんよ。まだぴちぴち十代じゃ私は！

十代のオツムが思い出す。私が考えていたのは――そう！

あの街についたら、どうするか、だ。

ででん！

よし思い出したぜ！

この世界は魔術とかの才能がある人を集めてるわけで、しかも名前が学園世界っていうくらいだから、まあ学園はあるだろうねえ。

私はそこに入ってスタディすればいいわけか。

嫌だなあ勉強。

でもまあ魔術の勉強なら構わないか。数学とか英語とかはないよね？

あつたら暴動を起こしてやる。

学習をするとして私はかなり強くなれるらしいんですが、実際のくらのことなら出来るんだろ。

そもそも他の人はどのくらいなんだろ？

まだ、平均的な数値すら知らないからなあ。

ようはこの世界についての常識を学ぶまでは何にも出来ないってことか。

早くあの街行かないとなあ。

走るか。

走って、背中に「僕達の旅はまだまだ終わらない！」とか書いておくか。うは、それなんて打ち切り。

私がいる時点で打ち切りなんて二十年はないね！ いやごめん調子乗った今のところスルーでヨロ。

「……にしても、遠いなあ」

街まで行くの面倒臭い。これ日が暮れるんじゃないだろうか。

異世界の草原で、夜一人ぼっち。

なにその展開すげえロマン感じるようで感じない。

モンスターとかいて、襲われたら……ぐふふ濡れてきちまうぜ。
おっと下品発言は自重。

そもそもモンスターに襲われて誰が濡れるんだ馬鹿野郎！

私の初めてはそう簡単にはくれてやらねえぜ？

……くだらないこと考えてるなあ、私。

こういう時間が好き！

あ、どうでもいいですか。そうですか。

いじけちゃうぞ！ 謝れ！

謝罪はない。ただの一人ぼっちのようだ。

そうだよ私は寂しい人間だよ！

その場で蹲る、のコマンドを選択。私はこのターンずっと蹲っているぜ。

「……どしたの？」

「話しかけねえでくれ。私はこうして蹲らなくちゃいけねえんだ！」

「……そっか。てっきり新入りさんかと思ったけど、違うのかな？」

新入り？

「オイラは生粋の江戸っ子だぜい！」

もち嘘。

「へえ……」

……あれ？

私あ、一体誰と喋ってるんだ？

顔を上げる。

そして……見た。

黒くて長い髪をサイドポニーにまとめた、もう信じられんくらい可愛い美少女を。

「お嬢さんお名前を聞いても？」

おっと思わず私の紳士タイム。

「え？ ナユタだけど」

「ナユタさん。ああ、素敵なお名前ですね。よかったら結婚を前提にお付き合いをしましょう」

「この世界、同性婚アリだから、それ冗談じゃ済まなくなるよ？」

「……おおう、マジですか」

同性婚ありとは、なかなかやるじゃねえか。

「本当に結婚、する？」

にこり、と。彼女が私に笑いかけてくる。

効果は抜群だ！

「いいんすか？」

「だが断る」

はうあああああああああああああああ！

大ダメージ、私は倒れた！

そんな笑顔でなんてエグいことしやがる。

ちくしょう。

騙されちまったぜ。

だが、そこに痺れる憧れるう！

「で、実際あなたは新入りさんじゃないの？ 私、街であなただけと見た覚えがないんだけれど」

「新入りです」

「やっぱりね」

彼女が苦笑する。

「ええと、ちなみに、ナユタ……さん？」
「ナユタでいいよ」

それでは改めて。

「ナユタ。街って、あれのことだよね？」
「うん。この世界でただ一つある街」

へー、そうなんだ。

「で、その人口はいかほどなんですか？」
「五十六万人くらいかな」

五十六万とな！？

「街で私のこと見た覚えがないって、それ当然じゃないの？」

それくらいいたら、そりゃ知らない人くらいいるでしょ。

「いやあ、私は学園世界にいる大体の人の顔、知ってるよ？」
「なんとかな!？」

あなたはどんな記憶力をお持ちになっているんですか。

「まあいいでしょ、そんなことは。それより、街まで案内しようか?」

「お願いしてもいいの?」

「うん……あ、でもその前に」

ナユタが私の背後を指さした。

うん?

「あれ、始末しなくちゃいけないんだよねえ」

あれって、なに?

振り返る。

……?

「なんもないけど?」

「いや、あれ、あれ」

そんなこと言われても……。

とか思っている——。

バキン！

空が割れた。

「……へ？」

窓硝子割れる感じ。

でもそれよりも派手で、意味不明。

だって空が割れるとか、ないでしょ。

割れた空が崩れて、その向こうから何か、黒い空間が覗く。

見るだけでちょっと吐き気がする。

「なに、あれ」

流石の私も状況についていけない。

「んー、なんていうか、空間の歪みとでも言えはいいかなあ。とりあえず、気をつけてね」

ナユタがそう言った、次の瞬間。

鼓膜が痛くなるくらいに甲高くて大きな音が鳴り響いた。

「っ……！」

「うるさいなあ」

ナユタは、言葉の割りには随分と涼しげな顔をしていた。

黒い空間から、何かが地面に落ちてきた。

割れた空が徐々に閉じて行く。

地面に落ちたのは……なにあれ。

巨大、だった。

基本的な形でいえば……人間。

けれどその脚は関節が逆になっていて、胴は異様に長く、背中からは無数の腕のような器官が生えていた。さらに頭には数え切れない眼球がついていて、口には鋭い牙がぞろりと並んでいる。前進は鉛色の殻のようなもので覆われている。

化物。

まさにそう表現すべきもの。

プレッシャーに、思わず膝が折れた。

……ちよつと待った。

不愉快になる。

なに私、膝を折っちゃってるんですか？

ないわあ。

プレッシャーで膝を折る？

この私が？

プライドに傷が入る。

いつでも飄々と人生適当に生きる。

それがこの緋色ちゃんだよ？

なのにな……これは違うでしょ。

気圧されるのはさあ、飄々としてないよ。

こりゃあ私じゃないって。

折れた膝を、立たせる。

「お？」

ナユタが驚いたように私を見た。

「すごいね、あれを前に普通に立ってられるなんて」
「余裕ですとも」

腕まで組んで、余裕アピール。

ふふん、どうだ。

マジもう指一本も動かさないんだぜ。

「なんていうか、見どころあるねえ」

「見どころだらけの棘ヶ峰緋色と有名ですよ」

「へえ、そうなんだ」

笑い、ナユタが私の前に立つ。

化物の眼球が、一斉にナユタを捉えた。

「ちょっと、これ逃げた方がいいんじゃない？」

「ノンノンノン！ これ倒すのが私への依頼だからね。アイリスとか臣護さんとかと争って勝ちとった貴重なSランクの依頼を逃す手はないね。そうでしょ、ソウ？」

「ええ」

不意に、背後から声。

私の横を通り過ぎて、誰かがナユタの隣に立った。

黒い髪をなびかせた、チャイナドレスっぽい服装の少女。

ナユタが今呼んだソウとは、彼女のことだろう。

いつの間にいたんだろう。

っていうか、あの……この人なんか背中に変な形した金色の輪っかが浮かんでるんですけど。

ちょっと翼っぽい形。

なかなか素敵なアクセサリー。私も是非一つ欲しいところだ。

「私のことは構わないので、ナユタ。お一人でどうぞ」
「そう？　じゃ、そうさせてもらおうよ」

轟、と風が舞い上がった。

それと共に、見えない、何か、そう……違和感のようなものが吹き荒れる。

「じゃあ緋色。ちょっと待っててね」
「え……あ、おっけ」

思わず答える。

ナユタが地面を蹴った。

空高くまで……それこそ飛んでいると表現できるだけの高さまで、ナユタは跳びあがった。

ちよっ、マジっすか。

「それじゃあ、異世界の破壊神さん。来ていきなりでちよっと悪いんだけど……退場願うよ」

ナユタの声が、異様によく響く。

「まずはその気味の悪い腕から、かな？」

刹那。

——化物の背中から生えた腕が全て千切れ飛んだ。

化物の悲鳴。

「な……っ」

今、なにが……。

「少しくらいは抵抗して見せたら？」

空が赤く染まった。

は……？

見上げれば、青かった空は炎で覆われていた。

その炎が蠢き、一ヶ所に——ナユタの頭上に収束していく。

出来たのは、太陽を思わせる炎の塊。

その熱は、離れている私の肌でも感じ取れた。

「さて、と……これで終わるか、終わらないか」

ナユタが呟いて、腕を振るった。

動きに合わせて、炎塊が化物目がけて落下する。

空気が蒸発していく。

常軌を逸したその灼熱を前に、化物が口を大きく開く。それこそ、裂けるほどに。

口の中に、紫色の光が灯った。

かとおもうと、それは爆発的に巨大化し……放たれる。

一条の光線。

それは……炎を貫き、霧散させた。

「へえ」

ナユタの感心するような声。

——そんな感心とかしてる場合じゃないと思うけど？

光線は炎を貫通して、ナユタに向かっている。

あんな出鱈目な炎を貫く威力だ。

そんなのが命中したら……。

「ナユタ！」

「んー、なに？」

けれどナユタは……平然としていた。

光線は、ナユタの掌に受け止められたのだ。

……はあ？

いやいやいや。

あんたそれ、ちょ、待っ……。

え、マジっすか？

「……どんだけー」

「世界の一つ二つ滅ぼす程度の攻撃くらい受け止められなくてどうするのさ」

ナユタが微笑する。

えー？

なにそれチート？

バグキャラっすか。

「まあ、くすぐったかったよ、破壊神。お返しにちよつとだけ本気を見せてあげる」

ナユタが私にウィンクしてくる。

「それと、緋色も見ておきなよ。自分で言うのもなんだけど、私これでも学園でもかなり上位の実力者なんだから、今後の参考までにね」

学園で、上位？

えっと……それはとんでもないこと、なんですよね？

よく分からないけれど、とりあえず凄いことだけは分かった。

ナユタが右手を前に突き出す。

するとその指先から、光の粒子が出た。

違う。

出てるんじゃない。

ナユタの右手が、先から光の粒子に変わってるんだ……！

そのまま肩口までが光の粒子になって溶ける——かと思うと。

粒子が集まり、ナユタの右腕が再びその姿を取り戻す。

……でも、再構築前と違うところが、一つ。

ナユタの右腕が、ゆったりとした黒い袖に覆われていた。

まるで、着物の腕の部分だけつけた感じ。

ひらりと、袖が舞う。

それに合わせるように、ナユタの背後の空間が歪んだ。

歪みの中から、何かが突き出す。

それは……槍。

黒い槍だ。

でも普通ではない。

そのサイズが。

優に百メートルは越えているであろう。

恐ろしい大きさの、黒い槍。

なんぞこれ。

驚く私を傍目に、ナユタが腕を振り上げる。

槍が穂先を化物に向けた。

化物の身体が震える。

怯えているのだ。

あんな異形の怪物が。

あんな一人の少女に。

化物が、再度光線を放つ。

けれどナユタに届く前に、光線は霧散してしまう。

「じゃあね」

言葉はそれだけ。

ナユタが腕を振り下ろす。

槍が加速した。

目で追い切れない。

音がした。

生々しい轟音。

見れば、化物の身体を黒い槍が突き刺していた。

槍が脈動する。

そして……化物の身体が弾け飛ぶ。

紫色の血液と肉片が雨のように降り注いだ。

それは、私がいるところだけ避けて地面を濡らしていく。

なんとなく、ソウって人が何かをしているのだと直感した。

「よし」

空では、ナユタが可憐な笑顔を浮かべる。

「それじゃ、帰ろうか。ソウ。それに、緋色」

なんというか、ねえ。

紫の雨が降り注ぐ中笑う彼女を、私は……。

なんだか、綺麗だな、って思っちゃったんですよ。

その出会いはっ！（後書き）

というわけで連載開始です！

このジジイはっ！

おら、びっくりしちまったぜ。

ナユタが帰ろうって言った後、いきなり地面に虹色に輝く魔方陣が浮かび上がったんだ。まほーじんですよ、まほーじん！

ロマンのかほり！

私がわきわきしていると、ナユタが私をその魔方陣の上に移動するように促して……気付くと、私は街の目の前に立っていた。

目の前には街を囲う、十メートルはありそうな城壁。視界の端から端まで続いているとかどんだけ。

キュートな間抜け顔で私が城壁を見上げていると、後ろの空間が歪んでナユタとソウが現れた。

これ、きつとあれだよね。

転位とか、テレポートとか、そんな感じの。

なんという貴重な経験。

「あざーす！」

「え、なにいきなり」

私の唐突のお礼に、ナユタが首を傾げた。

「なんでもない。それより、これってどうやって入るの？」

見たところ、城壁に門とかはついてない。

「こうやって」

ナユタが腕を振るうと、城壁に青い光がはしった。かと思うと、次の瞬間細い溝が入り、スライドするように城壁の一部が地面に沈んだ。

開いた城壁の向こうに広がっていたのは、イメージ的には中世ヨーロッパパって感じと街並み。

「おおお……」

入口から続く大通りには、多くの人が行きかっていた。中には角や耳が生えてたり、空を飛んでたり、異様に大きな剣を持っていたりと、様々な様子の人々がいる。

「おおおおお！」

やばいテンション上がってまいりました！

なんていうか、異世界っぽい。

しかも中世ヨーロッパな街並みの向こうには近代的なビルディングが立っていたりするそのアンバランスさもまたイイ！

「ほら、緋色。中入ろ」

「あ、うん」

ナユタとソウが私の横を抜けて街に入っていくのを、慌てて追う。

「それで、緋色は新入りだし、校長と理事長に顔を見せに行かないとね」

「校長と理事長？」

「まあ、この世界の偉い人って認識でいいよ」

「ふうん」

偉い人と聞いてひげを蓄えた老人を想像した私は間違っちゃいないはずだ。

「私は先にギルドに依頼達成の報告をしてくるから、緋色は先に校長に会いに行行ってよ」

「いやいやいや。会いに行けと軽く言われましてもね、どうすれば

会えるんですか？」

「あ、そっか。じゃあちよっと待ってね」

ナユタが空中に指を滑らせる。すると、ナユタの目の前にいきなり薄緑色の透明な板が現れた。

「お、おおう？」

「仮想モニター。ま、持ち歩き簡単なパソコンとでも思えばいいよ」

説明しながら、ナユタが仮想モニターとやらを指で何度か叩く。

モニターに通信中という文字が表示される。

『む。なんじゃ、ナユタ』

どこからともなく、老人の声が聞こえてきた。

「おお……電話にもなるわけですか」
「そうそう」

『誰かと一緒におるのか？』

「うん。さっき見つけた新入りさんとね」

『ほう？ 新入りとな』

「で、私はちよっと用事が在るから、少し面倒見てもらっていい？」
『もちろん構わんよ。それじゃあ、こっちに引っ張るぞ』

「お願い」

あれやこれやと、なにやら話がまとまったらしい。

不意に、私の足元にまた魔方陣が浮かんだ。

「それじゃ緋色、また後でね」

「お、おおう？」

どういうこっちゃ、と尋ねるよりはやく、私の視界がブレた。

思わず目を瞑る。

くっ、これはまさか、あの忌まわしき力が俺の眼を……！

とかふざける間もなかった。

不意に目を開けると、視界に飛び込んできたのは今の今まであった街の風景ではなかった。

豪華な内装の、広い部屋だ。

うちのリビングより広い。妬ましいぞ。

「よく来たのう」

部屋に置かれた黒い大きな机。そこで書類に羽根ペンを走らせている老人がいた。

仮想モニターから聞こえた声と同じ声だ。

ということは、つまり……この人が、校長って人なのかな？

……うわあ。

「え、なにその顔。おかしい、初対面の人間にそんなつまらなそう
な、かつ期待を裏切られたと言わんばかりの顔をされる覚ええない
じゃけど」

「だって普通のおじいちゃんなんだもん。着てる服は結構すごい感
じだけど」

藍色に金の刺繍が施されたローブを着た老人。

うん、なんていうか……いかにも、って感じ。

ここですげえ美系のお兄さんとか出てきたらよかったのに。まあ
それで声だけ老人ってのも気持ち悪いものがあるけどさ。

「……失礼なやつじゃな」

「そんな馬鹿な。常に最高品質の礼儀を持つ私になんて言い草です
かこのクソジジイ」

「礼義の欠片も見えない!？」

むしろそっちこそ失礼ではなからうか。

思わず鼻をならしちゃうぜ。

「はん！」

もとい、鼻で笑っちゃうぜ。

「わしの精神にこんな短時間でよくもまあこれだけダメージを叩きこめるもんじゃなあ！」

「褒めてくれてうれちー！」

きやはっカッコはーとカッコとじ。

「こやつ殴りたい！」

出たよ暴力。

切れやすい世代ってやつですかあ？

いやでもどっちかっていうと耄碌して切れやすくなっちゃった感じですよー。

「今、ひどく不当な評価を受けた気がするんじゃないが！」

「気のせいじゃないでしょう」

「じゃないんだ!？」

こらこら御老体、そんな机を叩いて立ち上がったって……急な運動で倒れちゃいますよ？

「何故こんなにも酷い扱いされなきゃならんのじゃ？」

「なんか、そういうキャラの雰囲気がぶんぶんするもので、つい」

てへっ。

「つい、じゃないわい!」

疲れたように校長が椅子に座りなおす。

「なんだかこの小娘からあやつらと同系統の感じがする! やじゃ
! いやじゃあ!」

机につっぷして校長が嘆く。

おやおや、なにか辛いことでもあったんですか？

「よかったらこの緋色ちゃんが相談に乗りますよ？ 一時間十万で」

「暴利！」

がばっ、と身体を起こして校長が叫ぶ。

「元気ですねえ」

「うっさい、もうお主とは余計な話をしていたくない！」

涙目になりながら――老人の涙目って――校長が一枚の書類を投げる。

書類はそのまま、ひらひらと不思議な動きで私のところまで飛んできた。

ひらひら。

ひらひら。

ひらひら。

書類が私の周りをひらひら回る。

ひらひら。

「さっさと受け取れい！」

あ、これ取るの？

「やだなあ、言ってくれなきゃ分からないよ」

「流れ！ 今の間違いなく受け取る流れじゃったろ！？」

「大河の流れすらこの私は断ちきってみせませう」

「ストレスが溜まるうっ！」

校長が頭を抱えて身体をくねらせる。

気持ち悪い——げふんげふん。奇妙奇天烈摩訶不思議な動きだ。

とりあえず書類を掴もうとして、ふと私は伸ばした手を引いた。

そのまま書類に背中を向けて走り出す。

書類が私のあとを追うようにひらひら飛んでくる・

おお……。

部屋の中を駆けまわる。

「うふふー、つかまえてごらんない」

ひらひら書類が私を追っかける。

なんという意味不明のシチュ。

「どりゃあああああああああ！」

校長がどこから取り出した杖を私の足元に投げつける。

「ぷぎゅう」

私は杖に足をとられて勢いよく地面に倒れてしまった。

書類がその私の頭の上に落ちる。

「外道校長……！」

「お主だけには絶対に言われとうないわ！」

まあ、そろそろおふぎけはなしにしよう。

にしてもなにこの絨毯めっちゃ気持ちいい。ぐへへ。

とりあえず寝っ転がりながら書類を手取る。

「リラックスしすぎじゃろ……」

テンション上げて張り切りすぎたのか、校長は肩で息をしていた。

まったくもう、この私と出会えて嬉しいのは分かるけどはしゃぎすぎると心臓止まっちゃいますよ。

「ええっと……あれ？」

首を傾げる。

私が手にした書類には、何も書かれてはいなかった。

つまり白紙。

「すみません校長。御目が御腐りになってはいやがりませんでしょうか？」

「……よう見い」

頬を引き攣らせながら校長が言う。

よく見ろって、そんなこと言われてもね……。

なんて思っていると、白紙に黒い文字が浮かび上がった。

「な、なんじゃこりゃあああああああああ！」

「大袈裟じゃなあ！」

「あ、そう？」

じゃあもうちょっと下げて――。

「なにコレー。めっちゃうけるんですケドー！」

きゃぴきゃぴ。

「……」

「その視線止めてー」

今自分でも痛いと思ったから。

異世界に来てちょっとあれなんだよう。嬉しいんだよう。

「それで、なにに……おお」

なんていうか、それは履歴書だった。

ところどころ分からない欄があるが、これまでの私の簡単な経歴が小綺麗な文字で紙に書かれていた。

「それにわしがサインすれば入学って形になるんじゃないよ。ほれ、返せ」

「ほーら」

渡された時を真似て私は書類を校長に投げた。

ひらひらと書類が校長の手元に落ちる。

「……ふむ。問題ないのう」

軽く書類に目を通してから、校長が羽根ペンを手にとって、書類に走らせる。

「これで入学じゃ。それと……ほれ」

私の目の前にいきなり青いカードが浮かんだ。

「なにこれ？」

「学生証じゃ。この世界では、そのカードが身分証明書で財布代わりとかにもなったりするからなの。なくすんじゃないぞ」

「へえ」

とりあえず懐にしまう。

「まったく……ここまで疲れた新入生は久しぶりじゃわい。神様であるわしをここまで疲労させるなぞ……やれやれ」

ほ？

おや、今この人なんて言いましたか？

「あのー、つかぬことをうかがいますが、あなたは校長ですよね？」

「そうじゃ」

「それで……他にも何か肩書とかをお持ちで？」

「ふむ？ なんじゃいきなり。まあ挙げるとすれば、神じやろうな」

神……だと……！？

「マジっすか」

「マジじゃ」

……あー。

私、神様をクソジジイって呼んじゃった。てへっ。

っべー。

っべーよ。

「……まいっか！」

「なにがいいのか分からんがとりあえずお前が失礼なこと考えてるのは予想がついた」

「読心術……あの神様——じゃないらしい女の人と同じことをしやがりましたか！」

「読心術など使わなくてもわかるわい……ところで、その女の人って誰じゃ？」

「そりゃ私をここに連れてきてくれた人に決まってるでしょ？」

「なにを言っておるんじゃ？ この世界は、各世界で死にかけている才能ある人間を自動で意思確認して連れてくる仕組みになっておるんじゃぞ？ そんな女の人が増えてくるシステムじゃ……あ」

途端、神様の顔が青くなる。

っていうか、それならあの女の人って何者？

「まさか、あやつか……！」

神様が冷や汗すら流しながら呟く。

「あやつって、誰？」

「む、小娘……お前、まさかあやつの手先……あやつが自ら拾いに行くなど、どれほどの厄介の種なんじゃ！」

びしっ、と神様が私を指さす。

いやいや。それはいったいぜんたいどういうことですか？

私が厄介の種だなんて、この純真無垢の塊のような緋色ちゃん相手になにを言いますか。

「要警戒じゃな！」

神様に警戒されるとは私もなかなかやりますね。

なにをやったんだろう？

「でさ、どういうことなの？」

「うっさいわい！ もうわし、お主には関わらん！ 他に丸投げすることに決めた！」

あれ、今私神様の職務放棄発言を聞いたような気が……。

そもそも私に詳しい話を聞かせてはくれないのでしょうかね？

……もう老人の戯言と思っておけばいいか。

「お久しぶり、校長。緋色を迎えに来たよ」

ふと、部屋にひょっこりとナユタが入ってきた。その後ろにはソウもいる。

「はやくこの小娘を連れて行け！」

涙目になりながら神様が叫ぶ。

「なにかしたの？」

不思議そうにナユタが尋ねてくる。

「さあ？」

私にも一体全体何が何やら。

「はやく出て行かんか！」

「……とりあえず、じゃあ次は理事長にでも顔出しに行く？」
「理事長……」

校長が神様なんだよね？

それじゃあ次はなんだ。

理事長は魔王とか？

あはは、まさかねー！

というか魔王なんて神様の敵みたいなものだし、いるわけないか
ー。

とか思いつつも一応確認。

「理事長ってもしかして魔王とかだったりー？」
「まさか」

ですよー。

「理事長は魔王じゃないよ。まあ、教師の中には何人か魔王が混ざ
ってるけどね」

「あ、そうなんだ」

「それじゃあナユタ、案内よろしく！」

「急にやる気出し始めたね？」

「そりゃね！」

考えても見てよ。

「こんなじじ——校長——やっぱじじいと綺麗な女の人なら、私は後者と会うほうが楽しみで楽しみでしかたないよ！」

「さっさと行かんかああああああああああ！」

校長に追い出されるように部屋を出て、綺麗な赤い絨毯がひかれた廊下に出る。なんか置いてある調度品とか見るからに高そう。

「それじゃあ、案内ついでに歩いていこうか？」

「オッケー。よろしくね、ナユタ」

「うん」

理事長はっ！

「ここは学園世界の中心にある建物で、通称は校舎」

「そのままの名前ですな」

「まあ分かりやすいのが一番だからね」

ただ、校舎と言ってもその内装は私の考える校舎とはかけ離れていた。

いかにも高級そうな石材で組まれた建物。地面には赤い絨毯が敷かれ、あちこちに高そうな花瓶だとか鎧だとか絵だとかが飾られている。

「ちなみに今いるのが職員区画。教師の人達の私室とかがあるところ。他にも学生が勉強する教室区画とか、部活区画、運動区画、研究区画……いろんな区画があるんだ」

「へー」

ナユタの説明を聞きながら歩いていると、行く先に大きな扉を見つける。

なお、ソウは私達の後ろを音もなくついてきている。なんか黙する女って感じでかっこいい。

求婚しちゃおうかなあ。

「ソウはあげないよ」

「私の主は決まっていますので」

二人に同時に言われた。

……また心を読まれたんだ。

「ここにプライベートはないのか」

「欲しいなら心を読まれないスキルを身につけないとね」

「……了解しました」

っていつでもどうすればそのスキルは手に入るのだろう。

あれか。滝に打たれてみたりすればいいんか。

「そういう手段もあるけど――」

「あるんだ！」

でも私そんなの絶対やだよ！

あれ冷たそうだし痛そうだし！

ああでも女の子が白い装束来て滝に打たれて濡れた布が透けてウフアハハみたいな展開はいいなあ。

「思考が飛躍しすぎじゃない？」
「自分でもそう思う」

冷静になれ私。

とりあえず液体窒素ぶっかけられたってくらいクールになれ。

ぶっかけて、エロくない？

どうでもいいか。

「まあエロいよね」
「まさかの反応!？」

そして同意された。

きゃーっ、同志！

「抱きっ」

抱きついてみる。

「えい」

むしろ逆に抱きしめられた。

「おおう!？」

思いもしなかった反応にとびずさる。

「あれ、そっちから抱きついてきたのに。なんかズルくない？」
「ズルいつてなにが？」

「そうやって思わせぶりな態度とってると、食べちゃうぞー？」

にこりとナユタが笑う。

どきん！

って感じで心臓が高鳴る。

ズルいつてナユタの方が百倍ズルいと思うんだよ。

だってそんな笑顔向けられたら、ねえ？

「じゃあ食べられちゃうかな？」

「え、いいの？」

きよとんとした顔をした次の瞬間、ナユタが目を細める。

「じゃあ、あとで私の部屋に来る？」

うぐ。

流し目……だと……？

反則。

チートですかあなたは！

きっと魅力EXとかいうステータスを持っているに違いない。うん。この胸のどきどきはそのせいだ。

「……そろそろギブです」

なんかこのままじゃ冗談じゃなくヤバい雰囲気を持ちこまれそうなので話題をカットしておく。

チキンな私を許して皆！

皆って誰だ？

いけないな。最近変な電波を拾う回数が増えてきた気がする。

「で、なんの話だっけ……あ、心を読まれないようにするには、って話か」

思い出して、ナユタが仮想モニターを出す。

「そういえばそれ、どうやったら使えるの？」

「緋色ももう使えると思うよ？ この世界に来了時に自動的に配られるから」

「え？」

まじで？

「現れろ、みたいなことを念じてみて？」

「おおう？」

現れろ……次元の扉！

扉サイズの仮想モニターが現れた。

思わず硬直する。

「えっと、なにやってるの緋色？」

「悪ふざけがすぎました」

小さくなれ、と念じるとモニターが手のりサイズになる。

これこれいくらなんでも小さくなりすぎでしょう。携帯電話ですか。

もうちょい大きく……で、ようやくノートパソコンサイズくらいになる。

ううむ。

「便利だ！」

「でしょ？ どうせならそっちで検索してみようか」

「検索？」

「うん。検索エンジン起動してみて？ ここのボタン」

ナユタが横から指で差してくれたボタンを押すと、モニターの中に細長い枠が現れる。その左端にはバーが点滅している。

「検索方法は思考直結にしておいたほうがいいよ？」

「思考直結？」

「うん。考えただけで検索してくれる機能。時々間違った検索とかするけど、便利は便利だよ」

再びナユタの指示通り操作して、思考直結機能とやらをオンにする。

すると、モニターにびっしりと検索結果が表示された。

ヒット数十万越えですか……どこまで調べてるんだろ。

とりあえず結果の中から一番それっぽい『心を読まれないスキルを習得する』のページを開いてみようかな、と考えただけでページが開いた。

すげえこれ。どんだけ便利？

表示されたページには、でかでかとした文字が。

『試練ナンバー三〇二九をクリアしやがれ、この豚野郎！』

……。

「え、なにこれ。いじめ？」

泣いちゃうよ。私泣いちゃうよ？

「違うよ。乱暴な言い方だけど、正確な情報」

ナユタが苦笑する。

「この学園世界には試練システムってのがあってね。ゲートって呼ばれる機器を使って特殊な空間に入ることが出来るんだ。その空間が全八千万種類で、それぞれクリアするとスキルや技能が手に入るようになってるんだ」

「八千万って……つまりそれだけスキルとか技能とかがあつてこと？」

「だね」

「……コンプは諦めた方がよさそうだ」

「諦めちゃうの？ 案外簡単だったけど」

「へ？」

あれ、今の物言いつて……。

「ま、まさかとは思いますが、ナユタさん？」

「うん。なに？」

「コンプ済みですか？」

「さあ？」

ナユタが微笑む。

その意味深な微笑みに、背筋がちょっとだけ冷えた。

八千万種類コンプって……出来るものなのだろうか。

「まあ試練システムで覚えられるスキルなんて大したものじゃないけどね。せいぜい大陸一つ消し飛ばしたり出来るようになるだけだよ」

「すみません大したことあるんですけど」

さらっととんでもないこと言わんで下さい。

「ようは数より質だよ。うん……で、着いたよ」

気付けば、さっき見つけた大きい扉の前に辿りついていた。

近くで見るとさらにでかく感じる。

「ここが理事長室？」

「ううん、この扉はね、校舎のいろんなところに移動できるんだ。行き先を想像しながら開けるとね、そこに繋がる仕組み」

もうなんなんだこの校舎って。便利すぎて素敵。

「ま、普通に歩いて行ったら到着は夕方だし、当然の仕組みだよ」

いいながらナユタが扉に手を駆ける。

扉はその大きさを感じさせない軽い動きで開いた。

その向こうにあったのは……廊下。

「え、また廊下？」

「ここからすぐだよ」

ナユタが歩き出したので、その後に続く。

すぐに、ナユタが一つのドアの前で足を止めた。

「ここが理事長室」

確かにすぐだった。

ナユタがドアをノックする——直前。

「入っていいよ」

声が、聞こえた。

なんだろう。

例えが見つからないくらいに綺麗で、透き通った声だった。

「……お見通しか。流石」

ナユタが肩を竦めて、ドアを開ける。

その先に合ったのは、それほど大きくはない部屋だった。大きくはないって言っても十分な広さはあるんだけどさ。

でも、神様兼校長なくそじじ——御老体の部屋と比べるとこじんまりとしている。

その女の人は、部屋の私から見て奥にある窓を開け放ち、その向こうに広がる学園世界を眺めていた。

どうやらここは校舎の中でも特に高い所にあるらしい。

その人のポニーテールにした黒い髪が風になびいた。

……ポニーテール？

見れば、その後ろ姿にはなんとなく見覚えがある気がした。

「こんにちは、棘ヶ峰緋色さん？」

「え、なんで私の名前——」

「彼女に先に教えてもらっていたから。楽しみにしていたのよ？」

その人が振り返る。

刹那、確かに時間が止まった。

あの人と……私をこの世界に連れてきた人と同じ顔をした人だった。

違うのは、瞳の色が赤いことと、髪が黒いことくらい。

驚いた。

驚いたのは、顔が同じだからではない。

同じなのに、なんだか違う。

なんだろう、この気持ち。

「驚いてる？」

どこか無邪気な声で、その人が首を少しだけ傾けた。

動作一つに、なんだかどきりとした。

「私はツクハ。ここの理事長をしてるの。よろしくね」

「あ……よろしく、おねがいます」

ぺこりと頭を下げる。

おおう、この私にあるまじき礼儀正しい態度だぜ。

「あの……あなたは、どうしてあの人と同じ顔を……」

「彼女の姉だもの。顔が似ているのは当然でしょ」

いや、似てるってレベルじゃねえですぜ。

双子かなにかなのだろうか？

「彼女からは将来有望な子、って聞いてるよ。特別クラスへ入れるようにも言われてる」

「特別クラス？」

聞き憶えのない単語が出た。

「この学園にはいくつかクラスがあるの。その中でも能力が突出し

た人を集めたのが特別クラス。今はたった五人しかないの。六人目になれること、誇っていいんじゃないかな」

「へえ……って、いやいや私がそんなところは行っちゃっていいんですか!？」

「いいんだよ。彼女が言うんだからね」

どうやらあの人は法らしい。

とんでもねえ。

「でも、編入試験をするように言われてる」

「試験？」

「そんなのするの？」

横から不思議そうにナユタが尋ねる。

「今までそんなことした人、いなかったでしょ？」

「特例だね。まあ、それだけ気に入られたじゃないかな。もしくは、それ相応のスペックを持っているか」

「……緋色って凄いいんだねえ」

「えっと……そう、なの？」

私としてはその編入試験とやらの内容が気になるのですが。

「試験はこのあとすぐに行うから」

「すぐ、ですか」

「ええ。試験システムを使ってね。とある試験をクリアしてもらうよ」

笑顔でツクハさんが言う。

「いきなり試験システムって、結構鬼畜じゃない？」

心配そうにナユタが言う。

ナユタがそうまで言うってことは、やばいんじゃないの？

「ええと、命の危険とかは？」

「あるけど？」

即答された！

しかも、それが、みたいな顔で。

「いやいやいや！？」

「大丈夫大丈夫」

「なにが！？」

なにをもって大丈夫だと!?

私って今のところ純粋な女子高生なんですけど!

「なんとかなるよ、案外。多分ね」

ツクハさん!?

今、多分って言いましたよね!?

言いましたよねえ!?

「それじゃあ、試練システム起動」

ツクハさんが言うのと、私の目の前にいきなり虹色に輝く巨大な楕円の物体が現れた。

「ふぁ!?! いきなり!?!」

「ツクハさん、流石にまずいいんじゃない?」

私の肩をナユタが掴む。

「これ、私は反対だよ。いくらなんでも——」
「大丈夫」

気付けば。

私とナユタの間に割り込むように、ツクハさんがいた。

いつの間に移動したのか、まるで分からなかった。

「私と彼女が大丈夫と言うのだから、大丈夫なのよ。分からない、ナユタ？」

少し違う声色で、ツクハさんがナユタを見る。

その目の奥に、恐ろしい光がある気がした。

「……信じていいの？」

「ええ」

「嘘だったら、流石に怒るよ。ここ、ぶっ潰すから」

空気が軋んだ。

ナユタとツクハさんの間に、目には見えない歪みのようなものを
感じる。

「出来るならね」

鼻歌でも唄うかのように、あっさりと返す。

「さ、じゃあ緋色。行ってみようか？」

私に顔を向けるなり、元の声色と笑顔でツクハさんが言う。

ツクハさんは私の肩からナユタの腕を外し、そのまま――、

「ちよっ、あの……私まだいろいろついていけないんですけど！
」？

「なんとかなるから！」

そんなサムズアップされても！

「じゃ、がんばってねー」

ツクハさんの手が、私の身体を押す。

そのせいで私は――、

「って、これって禁止された試練じゃないの!？」

「あ、気付いた？」

「やっぱり駄目! 緋い――!」

そこで。

私の身体が虹色に飲み込まれる。

虹色の向こうは……一片の光もない暗闇だった。

理事長はっ！（後書き）

成長したツクハさん登場！。

試練はっ！

暗闇の中を漂うように私は浮かんでいた。

突然、情報が頭に叩き込まれる。

文字通り、叩き込まれたのだ。

試練ナンバー〇。

現れる幻影を倒し続けること。

幻影にやられた場合、精神が摩耗することになる。

精神が摩耗し続けた場合、それは死に繋がる。

……ちよつとお！？

なにそれ内容グロいんじゃないですかあ！？

——試練開始。

そんな文字が脳裏に浮かぶ。

次の瞬間、暗闇に光が差した。

眩い光に、思わず目を瞑る。

すると、足の裏に地面の感触を覚えた。

「え……?」

驚いて目を開けると、そこはもう暗闇でもなければ、眩い光もなかった。

ビルのような高い物体が辺り一帯に聳えた空間だ。足元は黒いタイルで覆われ、空は雲ひとつない青空。

そしてビルのような物体は……全て本棚だった。

億などではとても足りない。兆ですらも。

眩暈がするほど大量の本が、あった。

「なに、ここ」

信じられないくらいに巨大な図書館、とでも言うのか。

空があるじてんで館ではないけれど。

「どうしてこんなところ——あ?」

最後変な声になってしまったのは、なにも私の頭がアレなせいではない。

変な声が出たのは、変なものを見つけたからだ。

人だ。

人が向こうから歩いてくる。

笑顔で。

それ自体は、別におかしいことじゃないのかもしれない。

でもその人は、私のよく見知った顔だった。

そりゃあそうだ。

毎朝、顔を洗う時に熱い視線のやりとりをする相手なんだから。

つまりは、私がいた。

私は笑顔で私のところまで歩いてくる。

え、なにこれ。

ぶっちゃけ自分が近づいてくるとかホラーなんですけど。

思わず一歩あとずさる。

近づいてくる私が笑顔で大きく手を振ってきた。

頬を引き攣らせながらも、私も手を小さく振り返す。

次の瞬間。

胸が、熱くなった。

比喩表現じゃないよ。

出会った瞬間に私は恋に落ちた、とかじゃ決してないよ。

見下ろす。

私の胸に、なにかが突き立っていた。

それがなんなのか、分かっているのに、判断できなかった。

あまりにも馴染みがなかったせいだ。

剣。

一本の剣が根元まで深々と私の胸に、心臓に突き刺さっていた。

熱いが、痛いに変わった。

違う。

熱くて痛い。

ううん。

気付いたら同じ場所に立っていた。

違う。

戻ったのだ、と頭に叩き込まれた知識が教えてくれた。

「リトライ、か」

おいおい冗談じゃないって。

つうことは、なんですか？

——再び向こうから現れた人影に、笑うことすら出来なかった。

「もう一度、っすか」

剣が目で追えないくらいの速度で跳んでくる。

「っ………！」

どうにか私はそれを回避した。

私の背後にあった本棚にその剣は突き刺さる。

「……うっわ」

刀身の半分くらいまで突き刺さってる。

そりゃ私の胸とか顔とか簡単に突き刺せますよね、この威力なら。

私の姿してる癖にスペックはダンチですな。

さらに剣が飛んでくる。

「ど、どっちから取り出してるのか私は知りたいですぜ!？」

幻影は、どこからともなく剣を取り出してくる。

「このままじゃ……!」

やられる。

そう思った私は、反射的に本棚に突き刺さった剣に手を伸ばしていた。

とにかく武器。

それで、応戦しなくちゃ。

こんなふざけた空間から脱出するには、あの幻影とやらを倒さなくちゃいけないらしい。

やってやろーじゃねーの！

剣を引き抜——けない。

「へ？」

へえ、剣ってここまで刺さつてるとそう簡単には引き抜けないものなんだねえ。

なんて感心する暇もなく。

私の側頭部に幻影の投げた剣が突き刺さった。

+

「りとらああああああああああああああい！」

どうしろっていうんじゃあああああああああああ！

死ぬのもうやだ！

普通に痛いんですけど！？

っていうか頭刺される感触とかなにあれキモい！

このままじゃ私、発狂するよ！？

わりかし真面目にピンチだ。

とか思っている間に向こうから幻影さん登場わーぱちぱち！

じゃねえ！

とりあえず逃げよう！

そう判断して、私は飛んでくる剣を回避しながら本棚の陰に跳び込む。

そのまま、幻影からとにかく遠ざかるために走る。

けれどこの空間の果てはどこにも見えなかった。

どんだけ広いんだ、ここ！

しばらく走ったところで、本棚にもたれかかる。

荒れた息を落ちつける。

「はあ……まったく、激しいヤツだぜ。こんな調子で毎晩相手してくださいってかい？　おいおいアチシがミイラになっちまうぜ」

とかほざいてみる。

「にしても、ほんとに凄い量の本」

改めて本棚ビル群かつこ私命名かつことじを見上げる。

「一体どんな本を置いてるのさ」

興味が沸いて、本棚に並んでいる本のタイトルを見てみる。

——今日から始める魔術入門。

——簡単お手軽暗殺術。

——毒殺を極めたいアナタにこの一冊。

——超古代技術研究書・初級編。

「……おおう」

なんじゃこれは。

こんな物騒な本ばかり……もしかして全部こんな感じなの？

こりゃあ……全部読んだらとんでもない人間になれそうですね。

「あっはっはぐべっ!？」

首に灼熱が走る。

赤い液体が飛び散った……私の首から。

手でおさえるが、おさえられない。

血が、溢れだしていた。

振り返ると、剣を突き出した幻影さん。

あー……。

ばたり。

+

「りとるああああああああああああああああい！」

いい度胸だこん畜生!

私あ趣旨を把握したぞ!

つまりあれか。

ここにこれだけ物騒な本があるってことは、つまりだ！

この本で勉強してあの幻影ぶつ倒せってことですね!?

「どおだ正解だろうがこの野郎、ざまあ見やがれ、首洗って待ってろよ！　げはははははははははは！」

とか笑つてたら首が落ちた。

もとい落とされた。

次い
つて
みま
しよ
ー！

†

「り☆と☆ら☆い」

というわけで百とんで一回目のリトライでございます。

聞いてくださいよ奥さん。

あの幻影ったらわたくしが真面目にガリ勉してるのに横から剣で刺してきたりして邪魔してくるんですよ？

困った子ですわねえ。

だがかし！

そんな横暴も今日までだ！

もう体感時間とかぐちゃぐちゃで痛覚とか「え、腕？ どーぞどーぞ」くらいおかしくなってるし、血を見てもうわー私また死んじやうテへくらいにしか思わなくなっちゃったけど、それでも私は！

私は！

私は！

わ・た・し・は！

横から剣が飛んでくる。

私はそれを、指二本で挟むように受け止めた。

身体強化！

このスキルを手に入れたぜ私！

さすが私頑張った！

百一の命を犠牲によく覚えた！

これでかつる！

幻影が次々に剣を投げってくる。

「きかぬわぁ！」

それらを全て、素手で殴り飛ばす。

「ふはははは！ うぬの力はその程度か！」

いいながら、私は剣を弾きつつ一瞬で幻影との距離を詰める。

そして、幻影の手から剣を奪い取る。

「これでお終い！」

剣を、幻影の胸に突き立てた。

生々しい感触。

「……あ」

漏れた声は……私のもだった。

なにこの感触。

この感触は……知らない。

それはそうだ。

これまでは、私が刺される側だったから。

でも、今刺しているのは私。

私の剣が幻影を突き刺していた。

幻影の身体が崩れ落ちる。

その際に剣が抜けた。

赤い血が幻影の胸の傷から溢れだした。

幻影の眼から光がなくなる。

「……やべ」

剣を取り落とし、私は地面に尻もちをついた。

「殺しちゃった」

命を奪ったという感触。

これが幻影だとは分かっている。

でも、リアルすぎる。

こんなの……キツいって。

「っ……!!」

口元を押さえる。

吐かないぞ。

吐くとか惨め過ぎる。

もっと、飄々とさあ……。

ねえ？

不意に、視界が翳った。

なにかと思つて顔をあげると……そこに私が立っていた

あー。

そういえば。

幻影を、倒し続けろ、だっけ。

倒し続けろってことは、一体じゃないってことで。

つまり……。

+

「りとらい、かあ」

最初の場所に立つ。

向こうから私が近づいてきた。

「……また、やらなくちゃならないの？」

正直嫌でたまらない。

でもやらなくちゃ、出れないし。

それに、これは幻影なんだから……。

「……」

目を瞑る。

風の切る音が聞こえて、私はそれだけで飛んできた剣を上弾いた。

目を開く。

「よし、割り切った！」

くるくる回りながら落ちてくる剣の柄を掴む。

「よっしゃいくぜい！」

剣を振りかぶり……投げた。

凄い勢いで剣が幻影に向かう。

直接切りかからなかったのは、また肉を貫く感触がいやだったから。

ちよつとした逃げだけど、これくらいは許されるだろう。

幻影に剣が突き刺さる未来を予見する。

だが……その予見は外れた。

幻影が素手で剣を弾いたのだ。

「へ？」

気付けば、幻影が私の目の前にいた。

この動きって、まさか……。

「そりゃ、そか」

同じ強さの幻影を何体も出してきて、なんの意味があるっていうのか。

試練システム。

試練なのだ。

だったら……これは当然のこと。

「レベル二ですか……！？」

幻影の拳が私の顔面に叩き込まれて、私の首から上が消し飛んだ。

初めての死に方だった。

死亡回数 はっ！

あー、てすてす。

てすてすてすてすてす……いやむしろデス？

さて。今は何回目のリトライだったかな。

案外死に続けても精神って摩耗しないなあ。

ああ私の精神が強靱すぎるだけかな？

万……はやった。

億はいつてないかな？

多分リトライそのくらい。

結構やべー。

多分、体感時間で何十年も経ってる。これ外どうなってるんだろ。

とか想いつつ、今日も——ここ日数ないけど——元気にやっただぜ！

っーわけで、なんかいろいろダイジェスト！

メタ発言？

この作風ですよあなた。今更なにを。わらわら。飲食店ではない。

+

百まで数えていい加減に嫌になって、死亡回数は数えてない。

多分二百は越えたよね。

どどどーん。

ってな感じで私の視界が赤い閃光で埋まった。

空から降り注いだ、幾千もの赤い光線は本棚を、地面を塵芥に変える。

「ほうほう」

そんな破壊の雨のなか私はスキップをしていた。

いやいやマジで。

だってこの程度ならなんとかなるっしょ。

てなわけで右手をあげる。

地面から巨大な火柱が立ち、頭上に浮かんでいる幻影に向かっていった。

避ける間もなく、幻影が炎に呑みこまれて灰も残さず燃え尽きる。

「ハバネロピラーと名付けよう。もちろん嘘だけど！」

とか思っていると、空が割れた。

「おおっ!？」

割れた空の向こうにあるのは、深紅。

深紅が向こうからこちらへと、まるでタールがこぼれるように溢れだしてきた。

なんかやばそうなので、もう一発ハバネロピラーを放つ。あ、やべ嘘じゃなかった。

ハバネロピラーはそのまま深紅を貫き――ませんでした！

深紅がハバネロピラーをあっさり弾く。

「ほわっつ？」

私の最大出力なんですが……。

深紅が蠢く。

私にむかってこぼれてくる途中で、深紅が数え切れない狼みたいたな獣に姿を変えた。

「おおぅ!？」

レーザーっぽい攻撃とかハバネロピラー連発とかしてみろけど、なんか効かねえっす。

結果。

おいしくいただけました。

+

千は逝く、どこまで逝くの、緋色さん。五・七・五・

つうわけで多分四桁台乗ってんでしょーっていう今日この頃皆さまはいかがお過ごしでしょうか。

私は空からふりそそぐ隕石群をウイंकで破壊しています。

マジマジ。

ウイंकすると隕石が消し飛ぶんだぜ。

この技いいでしょ？

君にもウィンクしてあげる！　でも死んじゃうけど！

「だーれに言っただか」

肩を竦めつつ、隕石落とす魔術を延々繰り出してきやがる幻影を
探す。

なお隕石の方はオート発動の火柱——この魔術名前なんてつけた
っけ——で破壊。

お、いたいた。

私の第六感が——まあただの探知魔術なんだけど——幻影の位置
を特定する。

私から見て三時方向に三十二キロっすか。オツケー。

ちなみにこの世界の果てが未だに見れない。どういうことだって
ばよ。

私は幻影がいる方向に両手を突き出す。

すると、両手の間に電火が散り、それがあっというまに大きくな
って、一つの巨大な雷球になった。

「イッちまいなああああああああああ、ぶるあああああ

あああああああ！」

叫びながら、雷球を放つ。

雷球は、その線上にあるなにもかもを高熱でプラズマ化させながら幻影に直進する。

あっというまに雷球は私の視界から消えた。

「さて、当たってよー？」

とか思っていると、雷球の反応が消えた。

「おろ？」

視界に影がさした。

見上げれば、そこには空を覆うほど巨大な赤い津波。

有機液体金属タイプB……つつうらしいよ？

持ち主の自由に形を変えられる液体状の金属なんっすよ。

ちなみに。

「この我にその程度の質量で抵抗するか、雑種！」

私の背後の空間が裂けて、そこから押し寄せる大津波の質量に劣らぬ質量の有機液体金属が一瞬で跳び出し、津波を押し返した。

「どや！」

どん、と。

小さな衝撃。

見ると、虹色の線が有機液体金属を貫き、そのまま伸びて私の胸に刺さっていた。

「なんじゃこりゃあああああああああふん」

+

どれほど殺し、殺されただろう。

既に感覚というものはない。

人格も、果して自分がどんな人間であったかが思い出せない。

私は今なにをしているのだろうか？

飛んできた魔弾をことごとく幻影に向かって撃ち返す。

幻影は魔弾を大鎌で切り裂きながら、私に飛びかかってきた。

「私と同じ顔でやるんなら、ルパンダイブにしておきな！」

空中から虹色の鎖が生えて、幻影の身体を拘束した。

バットを消して、私は人差し指を幻影に向けた。

魔力が指先に集まる。

その収束はとまらない。

大きさで言えば、ビー玉程度の大きさ。

だがそこには世界の理すら塗り潰すほどの魔力が込められている。

魔力が色を変える。

違う。

魔力が、あまりの密度に変質する。

全てを無に帰す概念がそこに生まれた。

「BANG!」

概念が弾ける。

指先から黒が溢れだし、私の目の前を塗り潰す。

まるで巨大な黒い柱が空を突き刺すかのような光景。

「ふふん」

黒が霧散して、後にはなに一つとして残っていない。

「よゆーっすね」

そう胸を張った瞬間、私の足元が崩れた。

「おろん？」

+

「本当にどうするの、これで緋色が死んじゃったら!」
「大丈夫大丈夫」

机に体重を預けて、ツクハさんが呑気に言う。

けれど私は気が気じゃなかった。

「さっきからそればかり……試練システムは中止できないの!？」

私も、実はあの試練をクリアしたことがある。

でもクリアするのに、体感時間で六十年以上もかかったのだ。

倒された回数は百や千では効かない。

クリアしたあとは、一ヶ月はまともに喋ることもできなかった。

そんな試練にいきなり緋色を放り込むなんて、信じられない。

「あなたも知ってるでしょ。試練システムを作ったのは彼女だよ？

私じゃ、いくらなんでも介入できない。したとしても、中にいる緋色は消し飛ばよ」

「っ……」

歯噛みする。

どうしてこんな試練を作ったのだろう。

本来試練システムは、成長を促すのに必要な、簡単なスキルを与える――つまりはチュートリアル程度のものなのだ。

試練システムでそれなりの力を手に入れてから、生徒はそれぞれ自分の得意分野をひたすら伸ばしていく。

だから、その試練の大半が危険の少ない簡単なものだ。

でも緋色が放り込まれたのは違う。

最高レベルまで無理矢理に能力を叩き込む。そういうものなのだ。

当然、危険性は跳ねあがる。

「そろそろ中では百年くらい経ったところかしら？」

試練システムの中では、現実と時間の流れが圧倒的に違う。

百年。

それだけでも、人の精神が摩耗するには十分すぎる時間だ。

それに加えて外部的衝撃で精神が摩耗していく中、緋色は無事でいられるのだろうか。

「ナユタ。落ち着いてください」

今まで黙っていたソウが、私の肩を掴む。

「落ちつけるわけ……ないよ……」

そう絞り出した時、一つの気配が部屋の中に現れた。

「っ、これは……！」

「ほらね」

ツクハさんが小さく笑う。

すると、部屋の真ん中で空間が碎けた。

「あ痛っ」

そんな声が聞こえた。

部屋の真ん中で、緋色が尻もちをついていた。

「緋色！」

すぐに私は緋色に駆け寄った。

「大丈夫、緋色！」

「あれ、ここ……んーと？」

辺りを見回して、緋色が首を傾げる。

記憶が混乱しているのだろう。

それはそうだ。

緋色にとって私達は、百年前の存在なのだから。

「えっと、記憶搜索魔術で……ああ、おっけおっけ、そういえばそうだったっけ」

ぼそぼそと呟いて、緋色が顔をあげる。

「へろーナユタ。久しぶりー……って、こっちじゃそんな時間経ってなさげ？」

「あれからまだ数分よ」

「あ、そうなん？」

ツクハさんの言葉に緋色はちょっとだけ驚いたような顔をする。

「あの……緋色？」

「うん？」

「なんとも、ないの？」

緋色は、試練に入る前とそれほど変わったように見えない。

ううん。

その実力が段違いになったことは、分かる。この学園でも屈指の実力者になっていることが。

でも、その精神に僅かなブレも見えない。

普通なら廃人の一歩手前になってていいのに。

「なんとも、ってなにが？」

けろりと緋色が聞き返して来る。

ツクハさんが小さく吹き出した。

「頭はおかしくないの？」

「え、今わたくし凄いけなされましたか!？」

あ……聞き方がまずかった。

「えっと、頭の中身は大丈夫？」

「言い直してもあまり変わってない！」

「え、ええ……？」

なんだろう。ちょっと動揺して発言がおかしくなってきた。

「……ふふん」

緋色が小さく笑う。

「分かっておりますよ。なにが聞きたいのかは」

その笑みが、にやにやとしたものになる。

「心配してくれるなんてやさしーね、ナユタは」

緋色の手が私の頬にそえられる。

「……っ」

あれ。

ちょっと待って。

今なんだか一瞬……おかしかった？

なんだろう。

胸が……苦しい？

「なんか二度くらい自分の心臓を突き刺しまくったり、ひたすら笑いながら辺りを焼け野原にして回ったりした時期もあった気がするけど、私、頭は大丈夫だよ」

「それ……大丈夫じゃなくない？」

「あ、そう？」

……なんていうか、おかしいな。

私と緋色は出会って間もないのに、思ってしまった。

緋色らしいなあ、なんて。

「ところで、あれっすわ」

緋色が私に抱きついてきた。

「え……あの、緋色？」

「大胆だね」

ツクハさんが笑いながら私たちのことを見ている。

「ちょい疲れたんで寝るわー」

「へ？」

直後、耳元から寝息が聞こえてきた。

「……ええ、と」

ツクハさんとソウを交互に見る。

「これ、どうしたらいいの？」

「甘やかしちゃえ」

「疲れているのでしょう。しばらくそのままにしてあげてはどうでしょうか？」

「……そっか」

そうだよね。

あの試練をクリアしたんだもん。

凄いな、緋色は。

「そうだね」

緋色の頭をそっと撫でる。

「おやすみ、緋色」

その朝はっ！

目を開ける。

ぱちくり。

「知ら——」

「……知らない天井だ」

「おおおおおおおおおおおい！」

横から聞こえてきた声に、思わず叫ぶ。

「ちよっ、ま、定番のこの一言を何故奪ったし！」

跳び起きて、ベッドの横に座っていたナユタの肩を掴む。

「いや、なんとなく？」

笑いながらナユタが悪びれる様子もなく言う。

「悪戯好きなそんなあなたも好きっ！」

とりあえず抱きしめてやった。

「あー、こほん。ちょっと苦しいかな？」

「おお、そうかい？」

言われて、解放する。

どうやら力加減をミスったっぽいんだぜ！

「まったく、私じゃなかったらミンチになってたよ、今の」

「えへへー、ごめんちゃい」

ちょっと赤い顔でナユタが言うので、舌を出しつつ謝罪する。

って……赤い顔？

「おや？ ナユタさん。顔が赤いですよ？」

「え？」

少し慌てた様子でナユタが自分の顔に触れる。

ほほー？

「もしかして私に胸キュンですかー？」
「そ、そんなわけではないでしょ。もう！」

軽く肩を叩かれる。

「ですよー」

知ってたよ？

うん。ナユタみたいなかわいい子の眼中に私なんて入らないんだ
ろうね。

あはは……。

誰か、どうやったら美少女を落とせるのか教えてください。

「ところで、ここってどこ？」

辺りを見回すと、部屋には私が寝ている結構大きなベッドの他に、
机やクローゼット、棚が置かれていた。いかにも寝室って感じ。

「私の家だよ。緋色、昨日あのまま寝ちゃったから。連れて来たの」
「あのまま寝る？」

ええと……。

「飲み会の帰りにお持ち帰りされたの、私？」

「なにいつてるの。試練システムだよ」

「ですよね」

実は覚えていましたとも。

「そっか、気絶しちゃいましたかこの私は。貧弱さが露呈して恥ずかしい限りですんなあ」

「貧弱って……今こうしてけろりとしてる時点で貧弱とは正反対だけれどね」

苦笑して、ナユタが立ちあがる。

「起きたなら、朝食食べようよ。今ソウが作ってくれてるから」
「ほう？」

今聞き捨てならない発言が出ましたよ奥さん。

「ソウとは同棲してるんですか」

「同居ね。ほら、ベッドから出て」

あっさり流されてしまった。

なんだいなんだい、もっとう、あるでしょ。

そ、そんなわけないでしょ。もう！

とかそんな感じにツンデレ見せてくれていいのに。

あれ？　なんか今の発言をどこぞで聞いた気がするのだが……まあいいか。

ナユタに言われるまま私はベッドを出た。

「こっちな」

ナユタに案内されるまま、寝室を出て廊下を抜けてリビングに入る。

リビングもまた、いかにも、って感じだった。

カウンター式のキッチンがあって、テーブルがあって、ソファーがあって、テレビがあって……。

あれ、ここって異世界ですよねぇ？

なんかすげえ一般的な家なんすけど、これはいかに。

だが窓の外を見れば学園世界の中世と近代と未来的な建築が群立
していて、やっぱりここ異世界だよね、と再認識。

その時、鼻孔をいい匂いがくすぐった。

テーブルの上に置かれた、目玉焼きとベーコンののった皿、こん
がりと焼けたトーストが二つずつ目にとまる。

な、なんだこいつ、うまそうだぞ。

「ソウ、緋色が起きたからその分の朝食もお願いしていい？」

キッチンを見ると、ソウがピンク色のエプロンをつけて経ってい
た。

なん……だと……？

あのクール少女がピンクエプロン？

これは……革命だ！

「分かりました……どうしたのですか、緋色。そのように身もだえ
て」

「いいえなんでもないです！」

ちよつち妄想が銀河鉄道を駆けめぐっちゃっただけです！

「はあ……それで、朝食一人分追加ですね、わかりました」

ソウが冷蔵庫から卵とブロックのベーコンを取り出す。

コンロに置かれたフライパンに油を引いて、ソウがブロックのベーコンを空中に放り投げる。

って、何故投げるし！

食材がっ！

とか思っていると、ベーコンが薄く四枚剥がれるようにブロックから切り取られた。

「おおう？」

切られたベーコンとブロックのベーコンをソウがキャッチして、切れた方をフライパンに乗せる。

肉の焼ける匂いキタコレ！

おおう、吾輩の胃よ、もうすこし我慢するがよい。

まだやつは焼けておらぬのでな。ふははははは！

焼ける焼ける！

悲鳴のように油の跳ねる音を立てて焼けてしまえい！

なんて考えてる私を傍目に、ソウはブロックのベーコンを冷蔵庫にしまいながら、卵を肩越しにフライパンの方に放る。

またっすか！？

空中で弧を描きながら、卵の殻が綺麗に真っ二つに割れて、中味がフライパンにのっかった。

なぜ今ので黄身が割れないのだろうか。不思議だ。

割れた殻は、素早く元の位置に戻ったソウがキャッチして、シンの隅にある――あれなんて名前だっけ――の中にシュート！

スリーポイントシュートだ！

さらにソウは食パンをどこからともなく取り出して、トースターに放り込んだ。

「か、華麗なる準備だぜ……」

冷や汗が私の頬を伝う。

今の朝食準備にかかった時間、実に一分足らず。

早い……クイックだ！

ただあの過剰な動作は必要だったのだろうか！

きっとそこはつつこんじゃいけないんだと思う！ 私空気読める子！

「ソウさん、毎日私に朝食を食べさせてください！」

思わず地面に片膝ついてソウの手をとってそんなことを言ってしまった。

「……他の人にどうぞ」
「がーん！」

ふ、ふられちゃった。

地面に崩れ落ちる。

「……緋色って、なんか手当たり次第にそういうこと言うよね？」
「そんなことないよー。かわいい子にだけだよー」

そしてナユタもソウもかわいいんだいー。

「かわいい？」

「そだいー。インド人嘘つかないアルヨ」

あ、やべちよつとチャイナ混じった。

「へえ、かわいいか……ふうん」

「うん？　なんで笑うのかねナユタばあさんや」

「気にしないでいいですよ、緋色じいさん」

おおう、返されちまったぜ。

+

「ごちそうさま」

「美味でございました」

ふ、ふふ、ふ……本当に美味しい朝食だった。

これはもう、叫ぶしかあるまい。

「ええい、シェフを呼べ！」

「ここにいますか？」

「そうでしたっ！」

すっかり忘れてたぜ！

も・ち・ろ・ん、嘘だけど。はあと。

「改めて、ゴチでした！」

「お粗末さまでした」

ソウが言いながら、私とナユタの空の皿を回収して、キッチンに
持って行って洗いはじめる。

「ええ嫁や」

「嫁ではなく、ナユタの侍女です」

「へえ、侍女……侍女!？」

ちょっと待った。侍女ってあなた……え？

「ナユタってもしかして、いいところのお嬢様なの？」

侍女っていうと、なんか貴族なイメージなんですけど。

「違うよ。ただ、ちょっと私の親が凄い人達でね。その上心配性だから、親元を離れる時に半ば無理矢理連れて来させられたんだよ」

苦笑しながらナユタが説明してくれる。

「ふうん。そうなんだ」

凄い人って、どう凄いんだろ。

ナユタの親でしょ？

……うーん。想像がつかない。

まあ仕方ないか。ナユタとは出会って間もないし。

「さて、お腹も膨れたところで、今日の予定を話そうか」

「ら、らめえ、もうそれ以上、入れないでえええええ！」

「……？」

「ごめんなんでもない」

お腹も膨れたというフレーズでそんな想像をした自分がなんだかとても惨めです。本当にありがとうございました。

ナユタの不思議そうな目が痛い！

この子、ピュアやわ！

「ええと、それで、基本しばらく緋色の面倒は私が見ることになったから。ツクハさん曰く、先輩として後輩の面倒を見なさい、ってことらしいよ」

「それはそれは、御迷惑をおかけします」

「別にいいよ。緋色は面白いしね」

面白いって喜んでいい評価だね？

だね？

いやっほうい！

「で、とりあえず特別クラスについての説明なんだけど」「そういや私、そんなクラスに所属するんだっけね」

あの試練をクリアしたから問題なく入れたわけだ。

ふふ。あんな試練をさせるなんて、今更だけどどんな鬼畜なんだろう。

終わったことだし、それなりに楽しめたからいいけどさー。

ちなみに楽しみ方としては幻影の四肢を先からゆっくり細切れにしたり自爆技連発してみたりといういろいろありました。

……私、壊れてたなあ。

まあ今は壊れ壊れていつそ正常値ですけどね！

「特別クラスなんだけど、実は授業とかはないんだ」
「へ？」

授業がない？

「どゆこと？」

「特別クラスの人は皆独特すぎて、授業が意味ないんだよ。だから各自、それぞれの修練を積むことが授業代わりなの」

「……へー」

世ではそれを自由登校と呼ぶ。

自由登校のクラス？

……なにそれ最高じゃん！？

「でも特権として、他の全クラスの授業に自由に参加していいんだ」
「そうなんだ」

「で、どうせだから今日はいろんなクラスを見回ってみない？ 緋色はまだなにも分からないだろうし」

「んー」

いろんなクラスか。

まあまだなにもすることないし、いっかなー。

「オッケーです。それじゃあそういうことでお願いします」
「お願いされました」

ナユタが笑顔で頷く。

あー。

かわいーなー。

こんな嫁ほしー。

あ、そうだ。

どうせだし、この世界にいる間の目標を決めてみようかな。

私はかわいいおんにゃの子のハーレムを作る！

どーん！

どんどんぱふぱふ！

いえー！

……ふう。

え、無理？

………知ってるわそんなもん！

うああああああああああああん！

先生はっ！

「それじゃ、まずは補助魔術クラスから覗いて行ってみようか？」

玄関で靴をはきながらナユタが言う。

「補助魔術クラス？」

「そ。防御とか、強化とか、文字通り補助に優れた魔術を教えてるクラスのこと」

ソウは一足先に玄関を出て、扉を開けたままにしてくれていた。

「ありがとう」

「どういたしまして」

私とナユタが玄関を出たところで、ソウが扉を閉じてその表面に触れる。

すると青白い光が扉を走った。

……とんでもなく高度な封印魔術だ。

そんなものの戸締りに使うなよ、と思わなくもない。

ちなみに私は試練中に幻影の心臓を封印して倒すという我ながら
えげつねー真似をしました。

玄関を出たところは、マンシヨンの廊下。

なんていうか、これまたあれですよ。

っぼい、ってやつ。

マンシヨンっぼいよ。ていうか普通のマンシヨンだよ。

ファンタジীর影も形もないよ。

もういいけどさあ。

すぐ傍のエレベーターのボタンをナユタが押すと、すぐにエレベ
ーターがやってきた。

乗り込んで、ふと私が不思議なものをみつけた。

ええと……壁一面ボタンで埋め尽くされとるのですが？

「ここ結構いいマンシヨンなんだ。学園のいろんな場所に転位でき
るんだよ」

言いながら、ナユタが大量にあるボタンの中から迷わず一つのボ
タンを押した。

するとエレベーターの扉が開いて、あら不思議。

——エレベーターの向こうは、昨日も歩いた校舎の廊下でした。

「便利ー」

「でしょ？」

笑ってナユタがエレベーターをおりる。ソウがその一步後ろに続き、慌てて私もナユタの横に並んだ。

「補助魔術は、と……」

この廊下にはいくつもの扉が並んでいた。

「どこがいいかな……ああ、ガレオさんのとこでいいか」

なにか呟きながら、ナユタが扉を順番に指差していく。

「ええと、ガレオさんの授業は、と……ここか」

そして、扉の一つにナユタが手をかけた。

——扉の向こうは、どこまでも続く草原でした。

うん。

もう驚かねー。

驚かねーぞ。

このくらいのこと、そりゃあるだろう。

なんだかこの学園世界という場所が分かってきた気がする。

つまり常識は捨てろということでしょう。

はははっ。了解っすわ。

「ガレオさーん！」

草原の一角に、二十人程度の人影が見えた。

ナユタがその集団に向かって歩いて行く。

その中の一人が、ナユタに顔を向けた。

黒いマントを着た、なんかちよつと厳しそうな顔をした男の人だ。

「……ナユタか。珍しいな、貴様が補助魔術の授業を覗きに來ると

は」

わお、渋い声。

「今日はちょっと理由があつてね。あ、こっちの子は棘ヶ峰緋色。それで緋色、こっちはガレオⅡヘロストラ先生」

ほう。先生でしたか。

まあ生徒にしてはちよつとばかり威厳がありすぎですね。

「どうも」

とりあえず軽く頭をさげておく。

ぺこり。

「ふむ、新入りか？」

「そうそう。それでね、特別クラスに所属になったから私が面倒みてあげろ、ってツクハさんが」

「理事長から押し付けられたか……それにしても最初から特別クラスとは珍しい」

そこ。押し付けられたとか言わない！

まるで私が厄介なもののようにじゃないか！

そんなこと言うと思わず照れちゃうぞ。テヘツ。

「なるほど。ではその棘ヶ峰とやらに学校を案内しているわけか」
「そゆこと」

ナユタが頷く。

「ふむ……」

ガレオ先生が私のことを見つめる。

そ、そんな熱い視線……！

駄目ですわ、先生。教師と教え子が、そんな……！

よいではないかよいではないか。

あーれー。

なんて展開を期待するわけでもなくもない。

あったらあったで、悪いけどぶっ飛ばさせてもらうけどね！

ぶっちゃけガレオ先生は趣味じゃねーです！

ごめんネッ！

「しかし補助魔術など見に来てあまり面白くないだろう」

「そこはまあ……だから最初に来たわけだし？」

「そうか」

ナユタの言葉にガレオさんが咽喉をならした。

ちらりと、私はガレオさんの背後にいる生徒らしき人達の様子を窺う。

彼ら――女の子も混じってるけど――は、なにやら明後日の方向に向かって身構えている。

なにしてるんだろ？

とか不思議がっていると、地平線の彼方にいくつもの光が生まれた。

「お………？」

それはあっというまに大きくなって……違う。

大きくなっているのではない。近づいてきているのだ。

すぐに、その正体が分かった。

およそ直系十メートルほどの、巨大な炎の塊だ。

それも飛んだ跡の地面が溶岩みたいにとろどろになってることから見て、恐ろしいほどの高熱を持っているのが分かる。

それが一列に並んで生徒さん達に向かってきていた。

「ちょ、あれやばくね？」

「問題ない」

ガレオさんが微かに笑う。

炎が生徒達に着弾する。

恐ろしい程の熱が辺りに吹き荒れた。

触れるだけで蒸発するほどの熱は、しかし私達には届くことはなかった。

なにかと思えば、薄く、それでいて堅牢で巨大な魔力障壁が私達の目の前にあった。

どうやらガレオ先生が張ったものらしい。

……え、いつ張ったんすか？

つかやべえ。

この魔力障壁……ぶっちゃけ私でも破れるかどうかからんぞ。

どんだけだよ、ガレオ先生。

私、これでもかなり強いつもりだったのに。

大陸一つ二つ消し飛ばせるようになったし、私すげーんじゃない？

みたいな。

でも、ガレオ先生はその上をいつている。

よくよく考えれば、ナユタだって初めて出会った時に世界を滅ぼす程の攻撃を受けとめてたし……。

もしかして学園には、そんな連中がごろごろしてるのだろうか。

おおぅ……。

終わっちまったぜ。私の井の中の蛙生活が。あるいは猿山の大将生活が。

人はそれを自意識過剰とも言う。かっこわるい。

……って、それはそうと。

「生徒達が消し炭に……」

炎は未だに燃え盛っている。

本格的にやばい気がするのですが、私だけでしょうか。

「問題ない」

私だけっぽい。

ガレオさんもナユタもソウも平然と見てるし。

次の瞬間、炎が弾けるように霧散した。

「ほ？」

なんと、驚いたことに炎の中から無傷の生徒達が姿を見せた。

え、マジで。

無傷？

あれで？

あれ軽く国潰せるレベルの威力だったと思うんですが……。

「対国レベルの魔術はもう教え終わったの？」

「一応はな。あとは練度だ。あれを一ミリ先から撃たれても平気になるくらいでなければ話にならない」

後ろ二人の会話は聞かなかったことにしよう。

少なくとも私はあれを一ミリ先から撃たれて防げる自信は無い。

まあ、出来ないとは言わないけどさ。

やりたくはないよね。絶対。

っていうかこんな授業、DMでもなければ受けたくないに決まってる。

あんな威力の攻撃を防ぐ授業ってなんだよ！

やりたくねえ！

やりたくねえ！

大切なことなので何度でも言いますよ！？

「どうだ棘ヶ峰。やってみるか？」

ふと、ガレオ先生にそんなことを言われた。

「……」

やりたくないと思った矢先に！？

まさかまた心を読まれたのか？

いや読心を防ぐ術はすでに身につけた。

となると……ただの不幸か。

不幸だあああああああああ！

とかやってる場合ではない。

「ええと、遠慮させてもらいます」

「そう言うな。見たところそれなりにやれるだろう」

「い、いえ。ナユタ、そろそろ次のクラスに行こうか！」

「え？ 時間なら余裕あるし折角だし――」

「いいから！」

ナユタの腕を掴む。

「それじゃあガレオ先生、ありがとうございました！」

私がガレオ先生にそう告げると、即座に入ってきたドアから校舎に戻った。

「……どうしたのさ、緋色」

「……」

「まあ私は気持ちは分からないでもないですけどね」

ソウがどことなく優しげな声でそう言ってくれる。

「……ソウさん。あんたは天使や」

「……？」

ナユタが首を傾げる。

それを見て思った。

ああ、ナユタも規格外だよなあ、と。

暴力はっ！

この学園の教師陣は化物か。

空いた口が塞がらないとはこのことですね。

私は現在、ナユタに案内されるままに武器武術クラスにやってきました。

このクラスは武器の扱いとかいろいろな武器について教えてくれるクラスだそうで、他より魔術の才能が不足している人が所属しているらしい。

魔術が使えないから侮るな、とはナユタの言葉だったけれど、まったくもってその通りでございました。

「ほら、さっさと防がないと軽くぶった切っちゃうからね」

私達がクラスを訪れた時には、地獄絵図が広がっていた。

ちなみに、もちろん扉を開いたらそこは――状態でした。

ただし今度は草原じゃなくて、無数の巨木が生えている樹海の中だったけれど。

ほんとなんでもありだなここ。

「今の動き、最低だよ！」

そろそろ私の視線の先でなにが起きてるかを説明しよう。

ちっちゃい女の子が真っ赤なチェンソーみたいに刃が回転して二メートルくらいの大剣を軽々と振り回し生徒達を薙ぎ飛ばし、さらに一緒に真っ赤な竜っぽい生き物やでかい鳥みたいな生き物や頭三つある巨大な狼とかが生徒を追っかけまわしている。

あれって生き物——じゃないな。有機液体金属で出来てるっぽい。

それにあの女の子の持つてる大剣も……ていうことは、この有機液体金属全部あの子が操ってるの？

どんだけ操作上手なんだよ。

ただ大量に操って津波にして相手を押し潰すのとはわけが違う。

まるで本物の生き物のように動かすなんて、そんなの出来るもんなのか？

あ、今生徒の一人が女の子の大剣で切られて地面にたたき落とされた。

……え、死んでね？

大丈夫なのだろうか……大騒ぎしてないのだから多分大丈夫なのだろう。

多分。

血とか出てないしね？

大丈夫……だよな？

……気にしないことにしよう。

「スピート上げるよ！」

女の子は言って、巨木を駆け上り、巨木と巨木の間を飛び交う。

忍者か！

それについていくように、生徒達が木々の間を飛ぶ。

中にはなにもないはずの空中を走ってるやつまでいる。あれ魔力で足場作ってるのか。

ついてくる生徒達に向かって、女の子が右手を突き出した。

すると人の頭サイズの球体があらわれる。

それが、弾けた。

弾けて出来た無数の礫が生徒達に襲いかかる。

生徒達は慌ててそれぞれが持っている剣や槍、斧、盾などを構えるが、半数が防御しきれずに撃墜される。

あれってショットガンみたいなもんですよねえ？

当たったら普通無事じゃありませんよねえ？

……気にしないってば！

私、気にしません、絶対に！

これは現実からどれだけ上手く目を逸らすかの戦い……。

魔法少女ジェノサイド緋色、始まります！

おっと勢い余って変な告知しちゃったぜ。

「とりあえず、及第点かな」

跳びまわりながら女の子がそう言うと、残った生徒達の顔に安堵の色が浮かぶ。

「それじゃ、どうせだしいけるとこまでいってみようか」

生徒達の顔が青くなる。

おもしれー。すげえな、人間ってああやって顔青くなんの？

辺りにいた有機液体金属の生き物が霧散する。

さらに、女の子の持っていた大剣も同じく。

そして生き物たちや大剣が分解することで生まれた赤い霧が女の子の身体に吸い込まれた。

おお？

なんかやばげなオーラ出てるよ？

生徒達が「俺、死んだな」って顔してるよ？

あれが絶望の表情か……。

女の子の手から、赤い爪が伸びた。

「行くよ！」

次の瞬間、生徒の一人の前に女の子の姿があった。

早——！？

え、今なに……魔力の動きは感じなかったし……も、もしかして、純粋な身体能力っすか！？

ありえねー。

その生徒はいきなり現れた女の子にびっくりして……びっくりしている間に殴り飛ばされた。

……弧を描いていく生徒の身体は、見事に脱力していた。

あ、あれ死ん——き、気にしないぞう！？

「ほらほらほら、遅い遅い！ 止まって見えるよ！」

あ、ありのまま今おきていることを話すぜ！

女の子が生徒の目の前に次々に現れては遠慮なく抵抗もさせずに殴り飛ばしてるんだ。

そう、小学生でも通じそうな可愛らしい女の子が、だ！

こりゃあいったいどういうことだい！ あたしにゃ分からないよ！

「元気だなあ」

「そうですね」

ああ、私の隣の二人は完全に観客ムード！

ちくせう！

こうなったら私だって！

「たまやー！」

「不謹慎だよ、緋色」

「ええ！？」

怒られんの！？

え、怒られんの！？

これ駄目？

……駄目なのか。じゃあ仕方ない。

「見ろ、まるで人がゴミのようだ！」

「確かにね」

「ええ」

同意されると同意されるでなにか虚しいものがあると感じてしま
うのは私だけか……っ！

とか馬鹿なことしているうちに生徒は全員機能停止。

立っているのは、女の子一人。

完璧な虐殺です。御満足ですか？

「ふー」

女の子がいい汗かいたとでも言いたげなイイ顔で深呼吸をする。

ああ、満足そう。

『あれ？』

女の子がこっちを見た。

「あ、ナユタだ」

「はろー、レーさん」

「その呼び方やめてってば」

苦笑しながら、女の子が私達に歩み寄ってきた。

若干警戒してしまう私は悪くないと思うんだ。うん。

「あれ、ナユタ。こっちは？」

「棘ヶ峰緋色。新入りだよ。それで緋色、この人は麻述佳耶さん。武器武術クラスの教師」

「あ、教師だったんだ。へえ、こんな小さ——」

「うん？」

「——……」

説明しよう！

なぜ私がいきなり黙ったかと言えば、私の首筋に赤い刀があてられているのだ！

もちろんそれを手にしているのは他でもない佳耶先生……いいや佳耶様だ！

ああ、この人は某国家の錬金術師な人と同じタイプでありましたか。

「なんでも、ありません」

「そ」

気付けば首にあてられた刀は消えていた。

「それで？ 新入りがうちに所属するなんて話は聞いていないけど？」

「うん。そうなんだけど、特別の方に入ってるから、それで見学に来たんだよ」

「ああ……そういえばそういう特権あったね。特別クラスの人ってあんまうち来ないから忘れてた。個人的にはよく遊びに来るんだけど」

どさ」

「この間ありがとねー、いい運動になったよ」
「こっちこそ」

和気あいあいとしやがって。

……ごほん。

私を差し置いて、和気あいあいとしやがって。

……ごほん。

寂しいじゃねえかこのやろう私を差し置いて和気あいあいとする
じゃねえよう！

「にしても、見学ねえ……棘ヶ峰さんはなにか武器使ったり、武術
やってたりする？」

「あ、基本的には一通りできますです」

へんな喋り方になっちまったんだぜ。

ちなみに武器の扱いと武術は試練の中で必死に覚えました。

「例えば……」

収納空間から有機液体金属を少し取り出し、それを投げナイフに変えて佳耶先生に投擲する。

我ながら会心の攻撃だった。

常人なら気付かないうちに死んでいるだろう。

……だけど。

「ふうん」

いつの間にやら佳耶先生が手の中で私のナイフを弄んでいた。

「ナイフの扱いはそれなり。動きもまあまあだね」

佳耶先生の手がナイフを握りつぶした。

強度的には鋼鉄なんて目じゃないくらいなんですけど……ああもういいや。

「ちなみに、学園世界に来る前は普通の学生で、今は学園世界二日目だから」

横からナユタが補足すると、佳耶先生が目を細めた。

「へえ……特別クラスってのは伊達じゃないか」

あ、やべ。

興味持たれた。

こういう人に興味持たれるのって、あれじゃね？

しごきフラグ。

「それじゃあ、私は次のクラスに行きますね、佳耶さん！ いい授業でした！」

敬礼して、私はナユタの腕を掴む。

「あ、ちよつと、そんな急がないでも」

「お世話様でしたあ ああああああああああああああああ！」

引き留めようとする佳耶先生から逃げるように――まあ逃げてる
 んだけど――ナユタをひきずって走り出す。

[illegible]

「さて、それじゃあ次は総合技術クラスにでも行ってみようか」

私に引きずられながら、ナユタがそんなことを言う。

……次、かあ。

溜息が零れた。

兵器はっ！

ただっ広い金属で覆われた空間に私は立っている。

天井も四方の壁も見えないくらいに広い場所だ。

言うまでもないだろうが、総合技術クラスとやらの教室だ……教室でいいのだろうか？

まあ、教室ということにしておこう。

「おや、ナユタ殿。珍しいですな」

「お久しぶり、オルデットさん」

一列に整列した生徒の前に経っていた優しげな表情の杖をついたおじいさんが、教室に入ってきたナユタを見て笑顔になる。

おお、なんか今回はまともな人だ。

「話は聞いておりますよ。そちらが例の新入りさんですか？」
「あ……はい」

どうやらこの人は私の事を知っているらしい。

「私は総合技術クラスで教師をしている、オルデットと申します。よろしく願います」

「これはご丁寧」

オルデット先生が頭を下げたので、私もオルデット先生より十二度ほど深くお辞儀する。

「というわけで、見学させてもらっている？」

「ええ、もちろん」

……よし。

このおじいさんはいい人だ！

性格的にも私の精神衛生に対しても、いい人だ！

そう決めた！

というかそうであれ！

そうじゃなきゃもう嫌だ！

流石にこんなおじいちゃんまでガレオ先生とか佳耶先生みたいにめっちゃくちゃな感じではないだろう。

「それでは、授業を続けさせてもらいます」

「どうぞどうぞ」

「どうぞどうぞ」

ナユタと一緒にオルデット先生を促す。

あー、なんだろ。この授業はちよつと楽しみ。

総合技術って言うだけあって生徒の人達もなんかインテリっぽいし。

危ないこととかはなさそう。

「それでは、昨日の課題だった人型戦闘兵器を」

オルデット先生の口からなんだか恐ろしげな単語が飛び出した。

ええと……うん？

ヒトガタセントウヘイキ？

人型。人の形ってことっすね。

戦闘。戦う、もしくは戦う目的の、ってことっすね。

兵器。もう兵器は兵器でいいじゃねえっすか。

つまり、人の形をした戦うことを目的とする兵器。

うん！

つまりガン〇ムとかアーマード・〇アとかのことっすか。

おっけ！

つまりこういうことだ。

デンジャーだね！

いきなり危険の匂いがしてきたぜ！

こういう時は、あれだ！

次話、こうご期待！

——あ、続く？

ですよね。

これでこのパート飛ばせねえかな、って思ったんですが、ふふ。
現実、そんな甘いもんじゃなかったか。

地面が震えた。

おお、なんだなんだ！？

見て見て、啞然。

とある生徒の背後に、巨大な鋼色の巨人が立っていた。

……うん。

まさに人型戦闘兵器だねっ。

きゃー、すごい。

とりあえずなんか肩からでけえ砲身が生えてるのは何ですかー？

あ、戦闘目的の兵器だもんね。そりゃ攻撃手段の一つ二つ持つて
るか。

すると、その人型戦闘兵器の横の空間が歪み、巨大な一本の黒い
腕が突き出した。

そのまま、ゆっくりと空間の歪みの中からそれが姿を表す。

当然というか、それもやっぱり人型戦闘兵器なわけで……それは、
腕だけが異様な厚みを持った、それ以外が骨のような形をしたもの
だった。

アンバランスさが不気味だ。

さらに、次々と空間から人型戦闘兵器が現れる。

あるものは棒人間を思わせる細いシルエットを持ち、またあるものは戦車をそのまま積み重ねたのかと聞きたくなるようなごついものもあった。大きさも普通の人間サイズから全長が十メートルほどありそうなものまで、様々だった。

うん。

最高にやばい光景なんだ。

中には明らかに大量虐殺を目的に作られたんじゃないか、っていう凶悪なフォルムのもあってさ……この授業、これからどうなるのだろう。

品評会とか、そういうのじゃないかな。

そしたらほら、おいおいテメエこんな不吉そうなロボ作るんじゃないやねえよアハハ、ってな感じで皆でわいわい出来るじゃないですか。

「ふむ、皆ちゃんと作って来たようじゃな。短い製作時間で御苦労じゃったのう」

そういえば、これ昨日の課題とか言ってたよね？

……え、これ一晩で作ったんすか!？

ばねえっすよ総合技術クラス！

「ではこれより、**実戦テストを行う**」

[illegible]

だから私そういうのよくないと思うの！

もっと平和な授業を私に見せて！

なんて私の心の叫びを無視して、オルデットさんが地面を杖でつつく。

すると、オルデット先生の背後の空間が、深紅に裂けた。

そう、真つ二つに。扉が開くみたいに裂けたのだ。

その向こうから、一つの巨大な人型が現れる。

深紅が閉じて、その機体の姿がはつきりと浮かび上がる。

全身のいたるところから剣を生やした、赤い機体だった。

まるで獣の唸り声のような重低音が響く。

とんでもない威圧感があつた。

一目でそれがただの機械でないことが分かる。

「神殺し、だよ」

横でナユタがそう言った。

「神殺し？」

「神すら殺す威力を持った兵器群の総称です」

ソウが補足してくれた。

神すら殺すって……。

つまり、とんでもない、ってことだよね。

そんなもん授業で出さないでくださいよ……。

「では右の者から……まずは火力の審査じゃ」

オルデット先生の言葉に、一番右端にいる生徒の背後の人型戦闘兵器が動いた。

その右手に持っている巨大な銃を持ちあげ、神殺しとかいうのに向かって音もなく一瞬にして無数の銃弾を放つ。

あの銃弾、とんでもない量の魔力が込められてる。

多分、一発でも小さな島一つくらいなら消し飛ばせるのではないだろうか。

「ふむ」

オルデット先生が顎を撫でる。

神殺しが鋭い爪を振るった。

放たれた弾丸が、最初からなかったかのように消し飛ぶ。

……あの、なにが起きたのか私でも分からなかったんですが。

背筋に冷たいものが伝う。

「では次、機動性と強度の審査じゃ」

オルデット先生が杖で地面を叩く。

すると、神殺しが両腕を地面に付けた。

神殺しの背中から生えた無数の剣から赤い火花が生まれる。

ゆっくりと、神殺しの頭にあたる部分が開いて行く。

開いた頭の中から、一つの砲身が伸びる。

砲身を、赤い光が包んだ。

それを合図にしたように、先程銃弾をばらまいた機体が一瞬で向きを百八十度回転させる。

機体の背中のブースターらしき部分から赤い炎が噴き出した。

そのまま、音よりも早い速度で機体が飛んだ。

文字通り、飛んだのだ。

そうして機体はるか彼方……視認できないほど遠くへと消える。

その時、神殺しの砲身が爆発した。

——爆発したかのように、赤い光を溢れさせたのだ。

巨大な赤い光が、さっきの機体の後を追って空間を裂く。

その速度たるや、音など比べようもない。

光に迫るのでは、というほどだった。

結果は言うまでもない。

遠く、闇に包まれて見えない場所に、小さな赤い光が生まれる。

光の正体は何なのかは考えるまでもないだろう。

「え、あるよ？」

「あるの！？」

「うん。でもそんなの見てもつまらないかな、って思って実践主義の先生のところを回ってたんだけど……まずかった？」

ナユタ……あんたが犯人なのか。

怖いのはっ！

「次は平和な授業なんだよね？」

「だから、そうだって言ってるでしょ？」

「ひたすらに強力が攻撃を防ぎ続けるDM授業だったり、教師がまるで生徒を獲物を狩るように追い回す授業だったり、人型戦闘兵器が次々にスクラップにされる授業だったりしない!？」

「しないしない」

言って、ナユタがその教室のドアを開けた。

頼む、平和な授業であってくれ……！

願いながら、私は教室に一步踏み入れた。

目の前に飛び込んできたのは――体育館。

「へ？」

思わず間拔けな声が出た。

これまでの教室とのギャップがひどいものだから仕方がないだろう。

いかにも体育館って空間だった。

広さとしては、決してそれほど広くはない。本当に中学とか高校とかにありそうなサイズの体育館だ。

「それじゃ、確認するぞ」

その声に、私は視線をそちらに向けた。

生徒らしき人達と一人の男の人が向かい合っていた。

男の人は……なんていうか、あの人って日本人？

黒い髪だし、瞳も黒だし、顔立ちとか……。

しかも、なんだか私と同じくらいか、下手したら年下にすら見える。

今度は、あの人が講師なのだろうか。

ふと、彼が私達のほうをちらりと見た。

視線が合った瞬間、なんでか思った。

——あの人には勝てない。

そんな直感。

ううん。

恐怖？

恐怖とは、正確には違う感じなんだけれど、でも限りなくそれに近い。

なんなの、あの人……。

それと、気になるのはもう一つ。

この授業に参加している生徒のほうだ。

なんていうか……うん。

肌が緑色だったり、角が生えていたり、身長が優に三メートルあったりと……ちよつと普通とは違う身体をしている人達だ。

そんな人達が三十人くらいいて……なんか妙な威圧感がある。

「俺や君達は、普通の人とは違う能力を持っている。もちろん、それが悪いわけじゃない。個人の能力として、それは評価されるべきものだ。でも、評価ってのは良い面ばかりじゃない」

普通の人とは違う能力……？

「ここ……特殊技能クラスはね、特殊な能力を持った人達が集まる

んだよ。見ればだいたい分かるでしょ？」

横からこつそりナユタが教えてくれた。

確かに、いかにも特殊な能力持ってます、って人達ばかりだ。

「例えば、そうだな。君は翼を持っているだろう。それは、普通の人間にはないものだ」

男の人が生徒の一人を見て言う。

……おや、私翼を持っている人を奇遇にも知っていますよ。

それも六枚。

あの人も特殊技能を持ってるのかな……あれ？

でも、姉妹だっというツクハさんは翼生えてなかったな……。

どういうことだろ？

うーん。

……うん！

まあいっか！

考えても答えが出ないので思考を中断することにした。

思考放棄はお手の物だぜ！

「君はその翼で空を飛ぶことができる。だが、その空を飛べるとい
う評価は良いものか？ 当然、空を飛べるといふ能力の活用は多く
あるし、それは多くの利点を持つ。だが、逆にそうじゃない……悪
い評価だってあるんだ。なんだと思う？」

「……塀とかを飛び越えて、簡単に不法侵入とかが出来る、とかで
すか？」

「そうだ」

生徒の答えに、男の人が頷いた。

「それ以外にも、純粹に、外見が違う、なんてところも周囲から見
れば、悲しいことだけれど悪い評価になる。人は、自分と違うもの
を恐れる悪癖を持っているからな」

む？

失礼な。

私にゃそんな悪癖ありませんよ！

翼結構！

つかちようだいよ！。

私それで天使ごっこするから。

——なんて言うのはKYだって分かってるので発言は自重。さっすが緋色ちゃん！

「俺達は、そういう周りの、時に理不尽とも思える評価と折り合いをつけていかなくちゃならない。さっきも言ったが、別に俺達には不利なところだけじゃない。有利なところだって沢山あるんだからな」

なんか……この授業ほんとに平和だ。

いいなあ。

なんか、講義、って感じ。

今まで講義とか眠るためのものでしょ、とか思ってたけど、うん。そうじゃねえよ。講義大切だよ。大切すぎるよ。

だって講義って安全なんだぜ？

なに言ってるか自分でもよくわかんねえけど、講義って安全なんだぜ！？

「そういう有利なところを伸ばしていくことを俺達は考えていかな

くちやならない」

「でも、先生。自分の能力は壊すことに特化しています。それは、どうすればいいのでしょうか」

おお、ごつい生徒が手を上げた。腕の太さが私のウェストくらいあるぜ！

「それだって使いようはある。一つだけ教えてやる……笑うなよ？」

人差し指を立てて、彼が口を開く。

「世界平和だ」

生徒が固まった。

私も固まった。

世界平和ですと？

「その力で悪い奴らを退治して、平和な世の中を作って行くんだ。それなら、破壊の力だって使えるだろう？」

しばらくして、生徒の中で笑いがいくつか起きた。

「あ、おい、お前ら笑うなよ！」

男の人が少しだけ恥ずかしそうに怒鳴る。

「でも先生、世界平和って、子供じゃないんだから」
「そうですよ」

「いいだろ別に！ 目標なんて人それぞれなんだから！」

男の人がいかにも不愉快です、という顔をして言い返す。

「ああ、ちくしょう折角恥ずかしいこと言ってやったのに！ もういい！ さっさとそれぞれ自分の能力を上手く使えるように練習！ それと、自分の能力をこれからどうやって使って行くかを考えていくこと！ 能力が暴走したりしたら俺がおさえてやるから心配するなよ！ それじゃあはじめ！」

男の人が手を叩いて、生徒達が散っていく。

「まったく」

頭を掻きながら、男の人がこっちに寄って来た。

「ようナユタ。今日はどうした」
「はろー」

近づいてみて、やっぱりその人は私より年下に見えた。

それなのに、どうしてずっとこの人に逆らったらいけない、って
感じてるんだろ？

なんていうか……本能？

兎がライオンにいきなり飛びかかったりせず逃げ回るように、そ
ういうものだ、って私の本能が判断してるみたいだ。

……この人、きつととんでもなく強い。

「そっちの子は？」

彼の視線が私を捉えた。

瞬間、身体が強張る。

うっわ、やべ、殺される。

とか自然に思ったけどそんなことはなく、彼はただ私を見ている
だけだ。

「あ、えと、棘ヶ峰、緋色っす。新入りです」

自己紹介して、ぺこりと頭をさげる。

「へえ……このクラスに？」

「違うよ。彼女は特別クラス」

「……あ、そういうこと」

ナユタの言葉に、彼はすぐに私がどうしてここにいいのかを把握したらしい。

「つと、そういえば忘れてた。俺はライスケだ。このクラスで先生してる。よろしくな」

「あ、はい」

手を差し出されたので、恐る恐る握手する。

やべー。鳥肌ががが。

「うん？　どうかしたか？」

「なんか怯えてるね」

ライスケ先生とナユタが不思議そうに首を傾げる。

「ライスケさんの力を本能的に感じているのでは？」

ソウがそんなことをぼつりと言った。

そのとーり！

ソウ流石！

！
普段は喋らない影の薄いキャラだけれど、もうあなたは私の癒し
！
親切の具現だ！

「あ、マジで？ そりゃ悪かったな……ええと、とりあえずなんに
もしないから慣れてくれ」

慣れろ、って……あなたそりゃ無茶じゃないですか。

ぶっちゃけ身体が震え出しそうなんですぜ？

こえーんだよ、ちくしょう！

「……あはは」

とりあえず私の得意技、愛想笑いで誤魔化しておく。

身体が自然と後ずさってしまふ。

くう、止まれ、私の両足……！

これ中二病じゃねえんだぜ！
リアル恐怖なんだぜ！

「……なんていうか、その後ずさられると地味に傷つくんだが」

ライス先生が引き攣った笑みを浮かべる。

「さ、さーせん！」

でも、でもだね！

無理だつて！

おおおおお！？

やべえそろそろ限界なんですけど！

[illegible]

私はそのまま、身を翻すと教室を飛び出した。

無理無理無理！

なんだあのめっちゃこうええええええええええええええええ！

†

「……え、泣いていい？」

「まあ、ほら……ライスケさんだしね？」

「はい。ライスケさんですから」

「なんだその言い方!？」

「ま、いいや。緋色も悪気があって逃げたわけじゃないだろうし、気にしないで上げてね」

「……はあ。ま、いいやじゃねえよ……さっさと後を追ってやれ」

「うん。そうする。それじゃあね、ライスケさん」

「ああ」

最後のクラスはっ！

「次のクラスは……攻撃魔術クラスなんだけど……気をつけてね？」
「へ？」

廊下を歩きながら、ナユタがそんなことを言いだした。

「気を付けろ、とは？」

「うーん。まあ聞いて分かるだろうけど、攻撃魔術クラスって、他のクラスよりもずっと攻撃的なことを学ぶんだよね」

「そりゃ、そうでしょ」

「つまりだよ。他のクラスのことを思い出して？」

「うん？」

そう言うのでしたら思い出そうじゃありませんか。

むむむ。

うむ。

どれもこれもまともじゃねえな！

特殊技能クラスは比較的まともだったけど、先生がちよつとな！

悪いわけじゃねえけどとにかく怖いんだわ！

「えっと、思い出したけど？」

「攻撃魔術クラスはね、他のクラスよりずっと実戦に重きを置いてるわけですよ」

「ほう。実践に、ね」

「うん。実戦に」

ふと、ナユタと私の言葉の間に違和感のようなものを覚えた。

——え、いや、もしかして実践じゃなくて、実戦？

これまでのクラスもずいぶんと実践的な授業をしていたような気がするのですが……。

その上をいく、実戦的ですか？

ほう。

ほほう。

……うし。

「じゃ、私帰るから！」

ナユタにびしっと片手を上げて、私は逃げ——、

「させないよ」

ナユタに襟首を掴まれた。

「うぐ」

咽喉が締めつけられて奇妙な声を出しちまったぜ。

乙女なのに！

これじゃあもうお嫁さんにいけない！

仕方ない。

「ナユタ、私をお嫁さんに貰って！」

「え……別にいいけど？」

ナユタがあっさりとそう返してきた。

ちよっ、マジっすか。

あっはっはっ。

「……からかわねえでくだせえ」

そういう返し、ちょっと痛いぜ。

自分の発言が元はと言えば悪いんだけどな！

自業自得かよ。おおう。

「別にからかつては……」

「いいんだ。それ以上はいわないで」

それ以上からかわれたら立ち直れなくなっちゃうゾ。

「……」

おや、どうしたんですかそんな不満気な顔をして。

はっ。ま、まさかもっと私をからかいたかった！？

なんてドSなんだ！

油断できないわこの子！

ナユタ、恐ろしい子っ。

「……じゃ、攻撃魔術クラスに入るとしよつか！ 大丈夫、特別安全な先生のところにしとくから！」

なんだろう今のナユタの笑顔が怖い。

本当に安全な先生なんでしょうか？

きっと違う。

そんな気がした。

ずるずると襟首を引っ張られて、私は廊下をドナドナされる。

そのまま、一つの扉の前に辿りついた。

ナユタが迷いなくその扉に手を駆けた。

もうどうにでもなればいいよ！

+

結論から言おう。

ああ、確かに特別安全な先生かもしれない。

戦闘は、なかった。

ううん、違う。

より正確に言えば……。

戦闘と呼べるほどのものは、起きていなかった。

とりあえず箇条書きに説明してやろう。

黒い岩で作られた巨大な闘技場のような教室に入った。

そこには生徒達と一人の男性が相對していた。

生徒達が男性に一斉に襲いかかった。その際に感じた魔力は合わせれば軽く世界くらい破壊できてしまいそうな馬鹿げたもの。

その男性が剣を振るった。

生徒達が一斉に吹き飛ばされ、意識を失って地面に転がった。

以上。

……うん。

私、一つ学習した。

平和って……圧倒的武力の別の呼び名だったんだ。

うふふ。

あはは。

……はっ。

やべえあまりの衝撃に軽く精神がとんでた。

つうかね、つうかね、もう一つ言わせてよ！

あの人……ライスケ先生と同じ匂いがするんだ。

怖えよ！

男性が私の方に歩み寄ってくる。

プレッシャーがマジパネエ。わらわら。

「……」

軽く膝が折れそうなんすけど……。

「久しぶり……というほどでもないか。よう、ナユタ」
「こんにちは、臣護さん」

にこりとナユタが微笑む。

おお、ナユタの笑顔は私のものなの！

うちの子には金輪際近づかないでくださいまし、泥棒猫！

とか怖くて言えない私のチキンっぷりに全米が泣いた。

「ソウも、元気そうだな」

「お陰さまで」

ぺこりとソウが頭を下げる。

「それで、そっちのは……見覚えがないな」

「うん。新入りさんだよ。特別クラス所属になった、棘ヶ峰緋色。

緋色、この人は攻撃魔術科の嶋嶋臣護さん」

「よろしく頼む」

臣護先生が私に手を差し出して来る。

私は……もう手なんて動かせなかった。物理的に。

身体が硬直しちゃってるんですよ。

これが金縛りか……恐ろしいもんだぜ。

「どうした？」

「あー、臣護さんの異質っぷりに気圧されてるんだよ。ライスケさんのところもそうだったから」
「……へえ。分かるのか？」

臣護先生がにやりと笑う。

ひひひひひひひひ！？

こ、殺される！

——次の瞬間、臣護先生の纏う恐ろしい気配が消えた。

「おろ？」

身体が軽くなる。

「さっすが臣護さん。猫かぶりが上手い。ライスケさんもこのくらい猫かぶりが上手ければよかったのに」

「猫かぶりって……お前な」

小さく溜息をついて、臣護先生が再び私に手を出しだしてくる。

「あ、ども」

今度はしっかり握手出来た。

恐ろしさは感じない。

「嶋搗臣護だ。暇な時があればいつでも来い。模擬戦の相手くらいは片手間にしてやる」

わーお、堂々「てめえなんざ片手間で十分なんだよ」発言ですね。

そしてきつとその自信相応の力は持つてるんだろうなあ。

だってさっきのあの攻撃……まるでなにをしたのか分からなかったし。

なんていうのかな。

攻撃そのものが感知出来なかった、とかじゃない。

そもそも攻撃なんてあったのか？　ってレベル。

言うなれば……存在しない攻撃？

うーん、なんとも厨二ですな。

「にしても、またいつになく厳しいねー。これ、授業にならないんじゃない？」

「俺の授業は、どれだけ自分が弱いかを自覚させるだけだ。強くなるのは、それぞれが勝手に修練を積みればいい」

「スパルタだ」

「強さなんて、そんなものだ」

臣護先生が溜息をついて、倒れている生徒達を見つめた。

「さてと。医務室に送るか」

臣護先生が手を振ると、生徒達の身体が淡い光に包まれて、消えた。

「医務室とやらの転送でもされたのだろう。」

「こんなとこまで便利だなあ。」

「それにしても……いきなり特別クラスで、俺やライスケのことを感じ取るか……興味あるな」

「あれー、臣護さん、浮気？　奥さんに殺されちゃうよ？」

ナユタの言葉に臣護先生が苦笑する。

「冗談じゃないからやめろ。お前が前に一度冗談で俺と女子生徒が……って話した時、俺がどんな目にあっただか知ってるか？」

「それだけ愛されてるってことでしょ？ さすが万年ラブラブ夫婦」

臣護先生、奥さんいるんだ。

見かけ、私よりもちょっと年上くらいにしか見えないのに。

……きつとこれだけ凄い人の奥さんだから、美人なんだろうなあ、とか偏見全開で内心感想をこぼす。

そのうち遭ってみたいかも。

この小難しそうな臣護先生が奥さんにデレデレしたりするのだからか？

それはちよつと……いやかなり面白そうだ。

とかそういうことを考えちゃったせいなのでしょうか。

「そうだ。緋色、お前ちよつと俺と戦ってみるか？」

「さよなら！」

満面の笑顔で私は別れを告げた。

ちげえよ！？

そんなフラグ立ててねえよ！？

せいぜい「なんか変なこと考えてないか？」って言われる程度のフラグしか立ててねえから！

「まあそういうな。ほら、こいよ」

臣護先生が剣を抜く。

ひあああああああああ！

ちよ、おまつ、ぶばあっ！

意味分らない電気信号が頭の中を駆け巡る。

無理無理無理死ぬ死ぬ死ぬ！

殺される！

「助けてナユタン！」

「がんばれー」

ナユタンはいつのまにか私から離れて手を振っていた。

「ふあっ!?!」

ま、まだだ！

まだ私にはソウ様が……！

「頑張ってください。死なないように」

ソウまで離れた所に移動していた。

「神は死んだ」

「校長は生きてるだろう」

そうじゃねえんです。

そもそも私はあんなクソジ……クソジジイが神なんて認めねえ！

言い直そうとしたけど、やっぱりやめた。

「さて、それじゃあ早速――」

臣護先生の剣から、膨大な魔力を感じた。

うん。

諸行無常ってやつですね。

盛者必衰なんですね。

泣けるぜ。へへっ。

私が生の世界への別れを告げようとした……刹那。

「臣護さああああああああん！」

教室のドアが勢いよく開かれ、そこから黒い光が臣護先生に襲いかかった。

「今日こそ仕留めさせて貰うから！」

黒い光の中に、人影があった。

黒い髪を鬢のところだけ長く伸ばした女の子だ。

黒い光は、彼女の身体から溢れだしているようだった。

彼女が腕を振るう。

「アイリスか……」

溜息をついて、臣護先生が女の子——アイリスというらしい——を見上げ、剣を振り上げた。

すると、黒い光が消し飛ぶ。

「きゃっ!？」

アイリスの身体が衝撃で大きく空に飛ばされる。

「まだまだだな」

臣護先生のその言葉と同時。

黒い槌が、アイリスの身体を地面にたたき落とした。

「って、ちょおおおおおおおおお!？」

今落下速度やばかったんじゃない？

音軽く超えてたんじゃね!？

ていうか地面にクレーターがががが!

あの子死んだ!？

舞い上がった土煙が晴れていく。

そこには……クレーターの底で目を回すアイリスの姿が合った。

「きゅう」

すげえ、生きてる！

「アイリス！」

と、ドアからさらに新しい影が二つ、現れた。

「へ………？」

ちょっと驚く。

その二人の顔は、アイリスによく似ていた。

「姉さん……まったく、だから勝てないって言ったのに」
「アイリス！　また無謀なこととして！」

目つきや髪形が違うからいいものの、同じだったらきつと見分けが簡単にはつけられない。

きつと姉妹なのだろう、と予測するのはそう難しいことではなかった。

「アイリスの妹二人だよ。あっちの優しい目つきの、セミロングのほうが三姉妹の次女のエレナ。鋭い目つきのツインテールが、三女のスイ」

いつの間にか隣にいたナユタが教えてくれた。

「ちなみに三人とも特別クラス」

「へえ……」

三人姉妹が三人とも特別クラスとは、また凄い。

「どうしてあのアイリスって子は臣護先生に？」

「アイリスは戦闘狂だから。基本強い人見かけたら喧嘩をふっかけるんだよ」

「それは……」

なんて傍迷惑な。

「緋色も気をつけたほうがいいよ？」
「そうする」

頷いて、私はナユタを見つめた。

「どうしたの？」

「ねえ、ナユタ……さっき私の事を見捨てたよね？」

アイリスが現れて誤魔化されと思ったら大間違いだよ？

「なんのこと？」

すっとぼけて、ナユタが笑う。

……ちくしょう。

かわいいからゆるしちゃうぞ！

三姉妹はっ！

「へえ、緋色は特別クラスなんだ」

スイが少しだけ驚いたように目を開いた。

その片手は、アイリスの手を掴んでいた。

気絶しているアイリスの手を。

アイリスは当然自分で歩くことなど出来ず、ずるずるとひきずられている。

私達が歩いているのは、校舎の廊下。

廊下を気絶した長女が三女に引きずられていく。

なんていうか、シュールな光景だ。

「ね、ねえスイ。その……アイリス姉さんのこと、せめて肩に担いであげない？」

エレナがおずおずとそう提案する。

なんていうか、雰囲気通りの優しい人みたいだ。

長女が活発……って言うか戦闘狂で、次女が優しくて、三女が……サド？

なんともバリエーションに富んだ姉妹である。

「嫌よ。どうして私がそんなことしなきゃならないの。それならエレナ姉さんが担げば？」

「え、やだ。面倒くさいでしょ？」

けろりとエレナがのたまう。

……どうやらエレナは優しい顔して面倒くさがり屋の隠れしようにうだ。

たち悪い。

「ん？」

そんな私の考えを読みとったように、エレナが私を見て、にこりと微笑んだ。

ぞくりと背中が冷える。

……あ。この人、逆らっちゃ駄目な部類だ。

オーケー把握。

「エレナ様はお綺麗ですねえ」

とりあえずあからさまな媚を売ってみた。

「ふふっ、呼び捨てでいいよ。私も、緋色って呼ぶから」

「私とこの馬鹿姉も呼び捨てでいいわよ」

「分かった」

どうやらフランクなところは姉妹共通らしい。

いや、一人気絶してるけどね？

「にしても、新入りが特別クラスってのも、異例よね」
「そうみたいだねー」

なんか編入試験とか例外でやらされたし。

いやあ、あれはいつ思い出しても鬼畜だったな。

「緋色って、強いんですか？」

「さあ、どうだろ？」

エレナに問われ、首を傾げる。

ぶっちゃけ、いろんな授業を見学して、自信は欠片もなくなってしまった。

この学校怖いYO。

「緋色は強いよ」

すると、ナユタがそう言った。

「へえ、ナユタが言うんだ？」

スイが興味深そうな顔をする。

「な、なに？」

「いや。アイリスじゃないけど、ちょっと興味があるな、と」

「あ、私も」

「いやいやいや！」

首を大きく横に振るう。

「そんな興味の持たれ方はしたくありません！」

私なんてこれっぽちも強くないっすよ？

もうね、ミジンコだよゾウリムシだよアオミドロだよアツパツパ
ーだよ。

「だいたい強さで言うなら同じクラスなんだし、この学園にいた時間が多いんだし、皆のほうが強いんじゃない？」

ナユタも異界の破壊神とやらを粉碎玉砕大喝采してたし。

全員がそのレベルだとしたら、私なんてまだまだだ。

「ぶっちゃけ、私達はほら、親の影響が大きいだよ」

スイがそんなことを言う。

「親の？」

「そうですね……私達姉妹も、ナユタも、もう一人の特別クラスの……愛奈っていうんですけど、彼女も……全員、親の資質を遺伝して、その上周りが強い人達ばかりという環境で育ったので、自然と……俗に言う、サラブレッドというやつですね」

ほう。

彼女らの親ってのは一体どんな人達なのかね？

興味あるけど……まあそこは今回は置いておこう。

それを聞くほどまだ親しくなってないしねー。

ほら。まだまだ「娘さんを私にください！」イベントまではフラグが足りないし。

「緋色は別に両親が特別ってわけじゃないよね」

ナユタの言葉に頷く。

私の両親は普通の日本人だ。

ちょっと愉快的な性格をしているけれど、そこは間違いない。

「普通の人間が特別クラスに上ってくるってのはねえ……ちよつと、凄いわよ？」

「そうなんだ」

なんだか私、凄いらしいです。

……ふうん。

いや、まあぶっちゃけ……それが、って話なんだけど。

だって別にだからって女の子にもてるわけでもないしねえ……今だってこうしてきゃいのきゃいのしてられるのは珍獣扱いされてるだけだろうし。

うう、鬱だ。

どうせなら「この子……私の運命の人!？」くらいの反応はしてくれたっていいじゃねえかよ。

三姉妹井とかいいじゃねえかよー。

駄目？

そっか、駄目か。

その道理、私の無理でこじ開ける！

こじ開ける！

大切に卑猥っぽいことなので二回言いました。えへん。

……こほん。

くだらねえこと考えすぎちまったぜい。

「ま、そのうち機会があったら腕試しに一本やりましょ」

にやりとスイが笑う。

「あ、私も」

エレナさんそこは面倒くさがってください。

「もちろんわたしもだ！」

びしっ、と手があがった。

アイリスだった。

あ、目を覚ましたんだ。

「つて、ここはどこだ？」

きよろきよろとスイにひきずられながらアイリスが周りを見回す。

「目を覚ましたの、馬鹿姉？」

「おお、スイ。お前はもうしてわたしの腕を引っ張っているのだ？」

「あんたが馬鹿だからよ」

溜息をついて、スイがアイリスの手を離す。

「うぐ」

アイリスが床に落ちた。

「なにをする」

しかし次の瞬間アイリスは立ち上がっている。

いつ立ちやがりましたかこいつ。

その動作一つ一つが常識超越するの勘弁してくんね？

そのうちあれだろ？

あたし散歩してくるねっ！ きらっ！

とか言いながら光速で星間を飛行しちやったりするんだろ？

……本気でやりそうだからこいつら怖えな。

「馬鹿姉も起きたことだし、私達はそろそろ帰るわ。この後、ちょっと用事あるし」

スイがそう言う。

「あ、そうなんだ。それじゃ、またね」

「ええ」

「はい」

「……うん？ ああ」

アイリスはなにがなんだかわからないようだった。

そりやずっと気絶してたしねえ。

「緋色っす」

一応、最後に自己紹介くらいしてあげるか。

「む。わたしはアイリスだ。よろしく頼む」

「うん。じゃあね」

「ああ」

そして、三姉妹は颯爽と姿を消した。

消した。

消したのだ。文字通り。

かき消えたのだ。

しつこいようだがもう一度言う。

消えたんだって。

……転送の魔術が発動した気配とかはなかった。

化物か。

やっぱりあの三姉妹は敵にまわしちゃいけない。

そう心に誓う。

「ところで、ナユタ」

「うん？」

私は隣のナユタを見る。

「私達は、どこに向かっているんだい？」

「あ、言ってなかったっけ？」

「言ってませんね」

ソウが冷静につっこむ。

「あはは、ごめんごめん」

「いやべつにいいんだけど」

案内されてる身だしね。

「これから、緋色の住居を探しに行くのです」

「私の、住所？」

「はい」

あー。まあそうだよね。

いつまでもナユタの家にお世話になっているわけにもいかないし。

「でも私、金とか持っていないんだけど？」

「基本的に学園世界では家賃などはありません。空き部屋があれば、好きに入居できます」

「まじか」

なにその夢世界。

「まあ食費などが必要なので、そのうち稼ぐ必要はあるでしょうが」
「稼ぐって、どうやるの？」

「ギルド——というのは通称で、教務科で任務を受ければ」
「任務？」

首を傾げる。

ギルドの任務。

まあ、ニュアンスとしては分かるけどね。

「学園世界は、この学園の外に多くの魔物が存在します。大抵は、それを決められた数討伐する、というものです。他にも他の世界に行って様々な課題をクリアしたり、時には先日の異界の破壊神襲来のような緊急の任務があります」

「ふむふむ」

なんていうか……つまりお決まりな感じってことですね。

「緋色ならすぐにお金稼げるよ」
「そう？」

ナユタがそう言ってくれるなら、ちょっと安心かな。

まあ、なんとかなるでしょ。

気楽に構えておこう。

「とりあえず、住居を決めてから。それから今後の事は決めようよ」
「そだね」

というわけで、私達は再び歩き出した。

「ところで、住居ってどこで探せるの？」
「それも教務課で探せるよ」

ほう。

どうやら教務課ってのは、この学園の中心のようなものらしい。
どんな場所なのかなー。

教務課にはっ！

教務課。

案外普通の場所でした。

ちよつとがつくり。

もつとこう……すげえのを想像してたんですよ。

例えばすげえ未来的な……SFみたいにくつも空中にスクリーンが浮いてたり？

でも実際には……ふつーのカウンター。

なんていうか、銀行とか市役所とか、そういう感じ。

……整理番号配る機械まで置かれてーら。

学園世界……もうなんか統一感なさすぎだよ。

もつとこう……ねえ？

「棘ヶ峰緋色、特別クラス、ね」

カウンターに座る私を、前に座る女性がちろりと私を見る。

その綺麗な目に思わずどきりとした。

っていうか銀髪ポニテって……あの人を想像させるんだけど……。

雰囲気もちょっと似てる？

「緋色って呼んでも？」

「あ、はい」

「そう。それじゃあ緋色……私のところに泊まらない？」

「……へ？」

なんですと？

えっと……え？

うん？

んー？

ええと……うん。

「どういう意味ですか？」

「分からない？」

そっとその人が私の頬に触れてきた。

うおおおおお！？

こ、これは……これはなんていうかR十八な感じ！？

「ほら、リリーさん。そういう冗談言ってるとまたレーさん怒らせてぼこぼこにされちゃうよ？」

レーさん？

……あ、そういえばナユタ、佳耶先生のことそんなふうに呼んでたっけ。

うんむ？

けれどもどうして私が彼女——リリーさんというらしい——に口説かれたら、佳耶先生が怒るんだ？

「大丈夫よ。私の妻は怒っても可愛いの」

くすりとリリーさんが笑う。

……お？

妻？

……妻と言いましたか？

この流れで妻ってーと……佳耶先生のこと、だよな？

そういえばこの世界って、同性婚あり、だっけ？

……え、そういうこと？

ま、まじで！？

MA☆JI☆DE!？

なんてこったーい。

そんな馬鹿なことがあるのかい妥妥ぁーん。

「つまりリリーさん……私とのことは、遊びだったのね！」

「あら、本気にしてもいいの？」

「ちなみにこの世界、重婚もありだから」

驚愕の新事実発覚。

ハーレムが……公式で認められている、だと？

へへ……やるじゃねえか、学園世界。

こうなったら私は――！

「でもレーさん独占欲あれで強いから……もしリリーさんとくつくなら、まずはレーさん倒さないと駄目だと思うよ？」

「私などがリリーさんとだなんてそんなおこがましい」

平伏しましたが、なにか？

ええ。

無理ですって、あの人に勝つとか。

殺される。マジで殺される。

「賢明な判断かと。あの人は、ナユタでも敵わない強者ですから」
「む、余計なことはいわなくていいよ。ソウ」

ちょっとナユタが頬を膨らませる。

ナユタでも勝てない。

つまり異界の破壊神とか（笑）ってことで……。

そんな人と敵対なんて出来るかあああああああああああ！

「残念」

リリーさんが肩をすくめる。

「ほら、リリー。なにさぼってんのよ！」

すると、教務課の奥のほうから一人の女の人が歩いてきた。

「あら、悠希……」

「混んできたんだから、さっさとさばきなさいよ」

言われ、私は後ろを振り返る。

ほんとだ。

確かに教務課の待ち合いが増えていた。

「なに？　住居案内？」

その人がリリーさんの手元の書類を覗きこむ。

「ええ。新入りさんらしいわ」

「ああ……臣護が言ってた……」

「おや、この人は臣護先生のお知り合い？」

「初めまして。私は嶋搗悠希。よろしくね」

そう言って、悠希さんが手を差し出してきた。

「ああ、これはご丁寧に」

握手する。

……ん？

嶋搗？

嶋搗と言いましたかこの人。

「ええと……臣護先生とは、ご兄妹とかで？」

尋ねると、悠希さんがにやりと笑う。

「そう見える？」

「……あー」

この反応って……つまり……。

「私は臣護の妻よ」

やっぱりなあ……。

この人が噂の奥さん……。

うわあ、すげえ。

臣護さんめっちゃ美人さんと結婚してんじゃん。

なんていうか……凜、って感じ？

「それで、住居を探してるんでしょ？　どんなところがいいの？」

あ、そういやそういう目的で私ここにいるんだっけ。

ふと思い出して、私はどんな部屋に住みたいか考える。

んー、どうせ家賃とかはタダっていうし……。

あ、でも広すぎるところに住んでもなんだかなあ……私って庶民だし、きつと落ち着かない。

そうなる……。

「小さいアパートの畳の部屋とかいいですね。八畳間に、まあそこそこまともな風呂とかがついてたらいいかなー？」

「そんなのでいいの？」

隣でナユタが驚いたような顔をする。

「うん。このくらいが女子高生の一人暮らしには相応でしょ」

こんな世界で女子高生云々とか関係ないかもしれないけど。

「謙虚ね……それならこの部屋なんか丁度いいんじゃない？」

悠希さんの前に仮想モニターが浮かぶ。

……あれ？

仮想モニター使うなら、リリーさんの手元の書類はなんのために用意されたんだろ。

「とりあえず形から入ってみようと思ってね」

考えを読みとったかのようにリリーさんが書類をデスクの下にしまう。

フリーダムだなあ。

苦笑しながら、私はモニターに目を向ける。

表示された情報は……へえ。

なんかいい感じの部屋だ。

学園にも普通に歩いて通える距離にあるし、周りにはいろんな店があるらしい。まあ転送が仕えるこの世界じゃそういうところに価値はないのかもしれないけれど、なんかやっぱりそういう付加価値っていい感じがする。

思い立ったが吉日……は違うな。

即断即決！

「ここにします」

「オッケー」

頷いて、悠希さんがリリーさんの肩を叩く。

「それじゃ、あとの手続きよろしく。私はこれから臣護と食事だか

らあがるわ」

「職務放棄？」

「私の仕事は全部終わったわよ」

「いつもより、随分と仕事が早いのね」

「愛の力よ」

笑い、悠希さんが歩き出す。

「それじゃあね」

ひらひらと手を振りながら、悠希さんが教務課を出ていく。

……な、なんだあの人。

愛の力とか平然と言うなんて……ちよつとかっこいいぞ。

つか公然ののろけ……。

羨ましいなあ臣護先生！

「私も佳耶と食事に行きたいわ」

「レーさんと食事行ったりしないの？」

「佳耶、仕事人間だから……生徒を育てるのが日に日に生き甲斐になっちゃってるみたいで……はあ」

リリーさんが溜息をつく。

「私の方からそれとなくリリーさんが寂しがってたって言っておくよ」

「本当？」

リリーさんの目が輝く。

「おねがいしてもいいかしら？」

「うん。だから、しっかりと仕事してね」

口元を吊り上げ、リリーさんが頷く。

「さて。それじゃあ緋色、まずは規約なんかの確認から始めるわよ——」

そこからてきぱきとリリーさんは仕事をしてくれた。

あー。

とりあえず、住居ゲット！

いえー！

無暗にエログッズ隠そ。

我が家はっ！

「おおっ、ここが我が城！」

転位を駆使して辿りついた自宅に入り、私は畳みの匂いを目一杯吸いこんだ。

うへー、いいわー。

これいいわー。

いいわー。

大切なことなので三度言いました。

いいわー。

そして四回目。

「うーん、ほんとにここでよかったの、緋色」

ナユタが部屋の入り口に立って、不思議そうに言う。

「ナユタはこの部屋の素晴らしさがわからんかねー」

にやにや笑いながら私は畳みの上にダイブして、ごろごろと転がる。

いいわー。

もうなんていうか、興奮するわー。

畳の匂いってなんかいやらしい！

……え、そんなことない？

そんなことあるんだよっ！ 私の中じゃな！

まあ適当に言っただけど！

てへっ。

「ま、緋色が満足してるならいいけどね」

ナユタが微笑む。

うーん、相変わらず可愛い笑顔だことで。

「とりあえず最低限の家具は用意してあるようですね」

ソウが部屋の中を覗いて言う。

確かに、机とかタンスとかはあるし、布団も部屋の隅のたたんである。

これなら、本当に最低限ではあるけれど、生活するのに問題はな
いかな？

「どうする？ なんならもうしばらくうちにいてもいいけど？」
「んー」

ナユタの提案に、ちよつと悩む。

ぶっちゃけ、魅力的だよなあ。その提案。

美少女の家にごろがりこめるなんてそれなんてエロゲ？

……まあでも、実際にそこまで世話かけるのもどうかと思う。

こうして家まで用意できたわけだし、ここらで強がり一つくらい
しておいたほうが恰好がつくだろう。

さすがに甘えてばかりというわけにもいかないし。

うん、決めた。

「いいよ。とりあえず一人暮らししてみる。お金は、明日にでもギ

ルドの仕事を受けてみる。それでまとまった金が出来たらいろいろ
買い物してみようかな」

さすがに最低限のものだけあればいい、なんて言う程女捨ててな
いしねー。

それなりに部屋の内装には気をつけたいところだ。

実はアロマとかが趣味だったりするのだぜ？

今意外と思ったどこかの誰かをぶっとぼそう。

……ごほん！

いかんいかん、電波を受信してしまった。

他にも下着とか、見につける物も用意しなきゃだし。

「そっか……それじゃ、その買い物には付き合わせてよ？」

「お、いいの？」

「うん、その辺りも少しなら案内はできるから」

「そりゃありがたい」

その時は是非とも試着室でナユタのことを襲——ごほん！

「とりあえず、緋色。学生証出して？」

「うん？」

言われて学生証を出す。

すると、ナユタも学生証を取り出し、私のそれに重ねてきた。

青い光が学生証から発せられた。

光はすぐにおさまる。

「……なにしたの？」

学生証に、一見して変化は起きていない。

「ま、ちょっとばかり饞別として、食費をね」
「え」

ナユタがウィンクする。

って、ちょっとちよつと。

「私はヒモになるつもりはないよ？」

「無期限無利子で貸すだけだよ」

「えー」

それはなんというか……。

「受け取って置いてください。ナユタの好意なのですから」

ソウにそう言われちゃあこれ以上はなにとも言えないじゃないか。

「それじゃあ、ありがたく」

「うん。ま、緋色ならすぐに自立できるから、返済はすぐだろうねえ」

「地味にプレッシャーを……」

この学園の授業を覗いたら、もう全然そういう自信がなくなったんですけど。

「ふふっ、頑張れ、緋色」

「……そりゃまあ、頑張るけど」

ナユタが身を翻す。

「それじゃ、そのうち遊びにくるね」

「おう、来い来い」

ていうか来てください。

やっぱり分からないこととかいろいろあるしねえ。

立ち上がって、ナユタに小さく手を振る。

ナユタが手を振り返してくれた。

ソウが先に部屋から出ていく。

「じゃね」

「うん」

ナユタが部屋を出て扉にてをかける。

「……うーん」

「あれ、どうかした？」

「うん？ うーん、まあ一応言っておこうかと思ってね」
「……？」

言うって、なにをだろうか。

「ねえ、緋色」

「なんでしょ？」

「……強くなってね」

「は？」

いきなり、なにを言いだすのだろうか。

「あの人達だけじゃ……きつと足りないから。私達じゃ、届かないから。だから、緋色にお願いさせて」

「……？」

ええと、よく分からないんだけど？

なにを言われているのだろう、私は。

「……ふふっ」

ナユタが微笑む。

その笑みが、どこことなく寂しそうに見えた。

「お角違いなのは、分かってるけど……なんでだろうね。緋色は、あの人とおなじ匂いがする」

「に、匂い？」

なんのこっちゃ。

「期待しちゃうよ、緋色。別にいいよね？」

「え……あの？」

ばたん、と。

扉が閉じた。

「……ええ？」

えっと、つまりどういうこと？

まるで分からないんですけど……。

う、ううん？

あー……まあ、考えても分からないだし、置いておくか。

ぶっちゃけ、不穏な空気を感じるけど、それも置いておこう。

いまはまず、この異世界生活を楽しもう。

……楽しめたら、いいなあ。

え、これフラグ？

+

緋色と分かれたあと、私は校舎の中をあるいていた。

向かう先は、理事の一人……総合技術クラスの最高責任者の部屋。

その部屋の扉の前に立って、深呼吸を一つする。

「大丈夫ですか？」

隣のソウが声を賭けてくれた。

「……うん」

あの人に会うのは、ちょっと緊張するけどね。

扉をノックする。

「入きなさい」

扉の向こうから聞こえた声に従い、部屋にはいる。

中は、ツクハさんの部屋と同じような感じ。

ただツクハさんのところより、幾分か堅苦しい空気が流れていた。

それはこの部屋の主のせいだろう。

「……珍しく、呼び出しに応じたのね？」

「今日は機嫌がよかったからね」

机に座ったその人が、私を見つめた。

金色の髪が揺れる。

ウルⅡバルカングローヴ。

それが、この人の名前。

「ふうん？　なら、そのご機嫌ついでにいい加減、教えて欲しいのよね」

私の事を、鋭い視線が貫く。

「あなたの生みの親の居場所……吐いてくれない？」
「駄目」

即答する。

他のどんな質問にも応えていいけれど、それだけは、教えられない。
い。

「……いい加減、力づくという手も考えた方がいいかしら？」

「どうぞ？ 私はどれだけぼこぼこにされても、言わないから」
「……あなたという子は」

深い溜息を吐かれた。

と、ソウが私の前に立つ。

「ソウ？」

「……これ以上は無駄とご理解ください」

不意にソウの手の中に金色の粒子が生まれ、それが漆黒の剣を形作る。

なにもかもを塗り潰すような、美しい黒。

黒い剣尖が持ちあがる。

「――私に刃を向けるの？」

「ナユタの障害は斬り伏せろ、という使命を受けていますので」

「敵うとでも？」

「いいえ。ですが、あなたがこのようなところで愚かしく力を振るうとは考えていません」

「……やな性格ね」

「それほどでも」

ソウの口元に小さな笑みが浮かぶ。

「それでは私達はこれで」

ソウの手の中から剣が消える。

そのまま、ソウに促されるように私は部屋の扉を開く。

「……ナユタ」

声をかけられて、止まる。

「《顕現》は使えるようになった？」

どこことなく、意地の悪い瞳が私を見ていた。

……ふん。

「それなら、六つできるから大丈夫だよ」

+

「それを《顕現》と呼べないと、いつになったら気付くのかしら……あの子は」

ナユタ達が出て言ってからしばらくして、そう呟く。

すると、扉が開かれた。

入ってきたのは……、

「アリーゼ。ノックくらいしたら？」

「そう堅いことを言うな。ナユタがここに来たと聞いてな……もう帰ったか」

「ええ」

「そうか」

アリーゼが少し残念そうな顔をする。

まったく……甘いわね。

「それで、聞き出せたか？」

「出来たと思う？」

「……その顔を見て分かったよ」

「ふん」

長い付き合いだし、わざわざ言葉にするまでもない、か。

「なんていうか……ぶっちゃけ、あいつといちゃいちゃしたい気分
だわ」

「また堂々と言うものだな」

「今更言葉を飾ったりしないわよ」

「……ふ」

アリーゼが小さく笑う。

「しかし……ナユタが早く教えてくれないと、私達としても困って
しまう」

「そうね……」

溜息を吐く。

最近、溜息の回数が増えてきた気がする。

「……そういえば、聞いたか？」

「んー？」

「新しく特別クラスに所属した少女は、あいつに招かれた、という話だ」

「へ？」

ちよつと……なにそれ。初耳なんだけど。

あいつの招きって……。

「……ええ！？」

思わず大声をあげてしまう。

「そう驚くな」

「驚くわよ！」

「まあ、それもそうか。わざわざあいつが、だしな」

「なに考えてるのあいつ！」

「さて」

アリーゼが苦笑する。

「あいつの考えることなど、私達に分かるわけないだろう？ 知り
たいなら、直接聞くしかないだろう」

「……あー」

そりゃそうか。

身体から力が抜ける。

「……まったく……いろいろありすぎよ」

新生活はっ！

裂く。

裂かれる。

潰す。

潰される。

斬る。

斬られる。

決る。

決られる。

貫く。

貫かれる。

壊す。

壊される。

殺す。

殺される。

消す。

消す。

消す。

淡々と繰り返す。

それは作業。

行程を消化するためだけに流れていく時間。

終わりはない。

終わらせない。

いつまでだって、続けよう。

感情もなく。

ただ、それだけを行う機械として――。

+

「――っ!？」

飛び起きる。

「え？」

って、あら？

ここはどこ、わたしはだれ？

……あ。

そっか。そういえば私、異世界で一人暮らし始めたんだっけ。

ううむ。

……なんかいやな夢を見た気がするぞ？

「まあいつか」

言って、ふとんから這い出る。

そのまま備え付けの小さな冷蔵庫のところまで行って、中から飲むヨーグルトを取り出す。

朝はこれっすよ。

……まあ単に朝飯をつくのがめんどーなんだけどさー。

ストローで飲むヨーグルトを飲む。表現がなんかおかしい。仕方

ないけど。

うむ。

白くて、どろっとしてて……ん、おいしい。

「ちゅ……ん、ぷ、ちゃ……くちゅ……」

卑猥な音を立てる意味は特にない！

だがどこかの誰かに私はおひねりを要求します！

……なにを考えているんだ。

ふっ。一人暮らし最初の朝でテンションあがってるのかな。

「いえーい」

「いえーい」

おんや？

……なんか今、私の声じゃない声がどこからか聞こえた気が……。

気のせいだろうか。

というか飲むヨーグルト出してから冷蔵庫あけっぱだった。

閉めないとな。

冷蔵庫の扉を閉じる。

と、その扉の影にちいさな人影がしやがみこんできた。

「つてうえええええええええええええええええい!？」

ホラー！？

え、こんなファンタジー路線な世界でホラー！？

い
ー
や
ー
!

[illegible]

「嘘だけど、てへっ」

ぺろっ
と舌を出してみたり。

あん、舌の上に飲みこんでなかった飲むヨーグルトが……垂れちやう。

白い白濁をすする。

……おひねりね！

最低千円から！

つと、そんな電波言ってる場合じゃねえ。

私は冷蔵庫の影から現れた怪奇！ 冷蔵庫人間に視線を向けた。

……ふむ。

くりつとした瞳。

艶やかな髪はいい感じにウェーブがかかっている。

服装は、けっこう大胆。

基本は黒いコートなんだけど……。

胸元とかふとももとか結構見えちゃってますよ？

いいんですか？

見ちゃいますよ？

……とりあえず一言。

「うむ、美少女である！」

「……？」

彼女が首を傾げた。

ゆっくりと立ち上がり、私より頭一つ低い高さの彼女の瞳が私を見た。

「はじめまして、私は茉莉……」

彼女——茉莉が私に手を差し出して来る。

「おお、これはご丁寧に。緋色です」

もちろん美少女との握手に否はない。

握手。

ぶんぶん。

茉莉が手を上下に振るう。

そして放される。

なんていうか無邪気な握手だった。

「……で、一つ聞いていいかな？」
「ん？」

茉莉がこてんと首をかしげる。

……え、なにこの子かわいい。

「えっと……どうやって茉莉は私の部屋に入ったの？」

私、昨日はちゃんと飲むヨーグルト十本買って家に戻ってきて寝る前に鍵閉めたんだけど。

「ん」

茉莉が玄関を指差す。

……うん。

えっと？

おおう？

「な、なんじゃこりゃああああああああああ！」

げ、玄関のドアが……なくなってる!?

つか、なんか砕けた木片が辺りに転がってる!?

これもしかして扉の残骸!?

よく今まで気付かなかったな私!

「ノックしたら、開いた」

「これがこの世界の開いたという現象なのか!？」

それは勘弁してください。

ノックされる度にドアの修繕をしろと？

「……脆い」

「そんな馬鹿な！」

木製でも扉は扉だよ？

ノックでこんな木端微塵になるものなわけがない。

「……これは、迷惑？」

「……あー」

そんな無垢な目で聞かないでしょう。

頷けるわけねえ。

でも、茉莉は私の態度からなにかを察したのか、少し俯くと、片手を机のほうに差しだした。

次の瞬間、巻き戻しみたいに木端が集まって扉になった。

おおっ。

「修復っすか。手際いいねー」

私でもこんな綺麗に修復は出来ないよ。

基本、私って破壊特化だし？

まあそのうち練習してもいいかもね。

「どうもです！」

びしっと茉莉に敬礼。

「……私がやっちゃったから」

無表情にみえて、どこことなく茉莉の表情はきまわずそうに見えた。

「気にしない気にしない！」

茉莉の背中を叩く。

「ところで、茉莉はまたどういう理由で私の部屋に？」

「……面白い人がきたから会ってきたら、って言われたから」

「言われた……誰に？」

あと私はそんな面白い人じゃねえぞ。

素敵な人さっ！

……自分で言ってて残念な気分になってしまった。うぐう。

「いろんな人」

「ほほう」

いろんな人、ですか。

心当たりはちよくちよくあるな。

……まあいっか。

「ちなみに、特別クラスだったりする？」

今まで出会ったのが教師だったり特別クラス所属ばかりだったの
で、一応聞いてみる。

なんか実力半端なさそうだし。

茉莉がゆつくりと首を横に振った。

あ、違うんだ。

「私は生徒じゃなくて……教師」

なんとな!？

こんなかわいい子が教師とは。

この学園、やるなあ。

「いちお、特別クラスの担任」
「え、まじで？」

この子が特別クラスの担任なの？

へー。

すげえ、んだよね？

……うーむ。

「茉莉、強いのか？」

「ナユタ以上、ライスケさん以下」

端的な答えが帰って来た。

うん、つまりすげえってことだな！

「……えーと、それで茉莉……先生は」

「茉莉でいい」

「……じゃあ、茉莉は私を見に来ただけなの？」

「……ん」

こくり、と茉莉が頷く。

くっ、なんだこの小動物系。

かわいすぎて抱きしめたいぞ。

「じゃあもう帰る？」

「……」

茉莉が天井を見上げる。

どうやらなにか悩んでるらしい。

「今日は、わりと暇」

「……ほう」

これはあれですか？

今選択肢出ちゃってる感じ？

一…このまま一緒にお出かけ。

二…このまま一緒にお出かけ。

三…告白。

きゃっ。

とりあえずここは段階を踏んで二を選択しようかな！

ぶっちゃけいろいろまだ分からないことばかりだし、誰か一緒にいてくれると心強いんだよねー。

「ちなみに私、今日はギルドでなんかお金稼ぎしたいんだけど……付き合ってくれない？」

「構わない」

即答された。

「生徒を引率するのも先生の役目」

あー。

なんだろう。

茉莉が先生の役目なんて言ってる……背伸びしてるみたいでかわいい。

うーん。

「てやっ」

「……？」

とりあえず抱きついてみた。

茉莉は首を傾げただけで、特に抵抗はなかった。

あー、これいいわー。

ちなみに。

五分後、いい加減に離れて、と引きはがされるまで私は抱きつきっぱなしだった。

その際に私の肋骨が二本折れたんだが……まあ茉莉なので許す。

どうせ私の身体って心臓の一つ二つくらいなら破壊されてもすぐ治る感じだし。

そういう魔術を常に身体にかけてるからねえ。

ミッションはっ！

上位竜種百体。これがなんのことか、分かるかなっ？

シンキングターム。

うんたんうんたん！

お前に足りないもの！

それは以下略、そしてなによりいつ！

——以下略！

はいシンキングタイム終了！

皆、分かったかな！

ようし、正解発表だ！

正解は……私が最初に受けたミッションの討伐対象でした！

「……って」

拳を握りしめる。

私は青空を飛んでいた。

音速の二十三倍で。

「ちよつと待てええええええええええええええええ！」

その速度のまま、思いきり目の前にいたサファイヤで出来ているかのような綺麗な巨軀をぶんなぐる。

巨軀が一瞬で塵になった。

上位竜種……それも世界が世界ならば勇者が倒す魔王以上、つまり裏ボスの強さを持った存在である。

それが、私を囲むように百体近く飛行していた。

「なんでいきなり、こんなハードモードなんですかあああああああああああ！？」

⋮
?

そこで首を傾げないでください、茉莉さん。

茉莉はなにに一つ気負う様子もなく、ぼんやりと空を飛んでいた。

今絶賛戦闘中ですけど！？

それでいいんですかねえ!?

「……ハード？」

「そりゃもう！」

言いながら、竜を二体殴り殺す。

つか武器！ なにか武器が欲しいとです！

「……イージーモード」

「いやなにが!？」

もしかしてこの状況のこと？

いやいやいや。

「どこがイージーですか！」

叫び、巨大な魔力の刃を生み出して竜を十体程度まとめて切断する。

「やっぱり、イージー」

「どこをどう見ればイージーだと!？」

「もう半分くらい減ってるあたり」
「へ？」

言われて、私は周りを見回した。

ええと……あれ？

最初と比べると、なんか竜の数が減ったような……。

「緋色が喋りながら倒してた」
「え？」

マジで？

自覚ないんだけど……もしかして無意識のうちに結構やつちゃってた？

ハードモードだと思ってたのって、竜百匹っていう情報が頭にきて目がくらんでただけ？

そういや、さっきから竜を素手で消し飛ばしたりしている気がしなくもない。

あと攻撃くらってもオートで防御出来ちゃっている気が……。

あれ？

もしかしてこれ、ほんとにイージーモード？

「緋色は強いから、この百倍は数がいても問題ない」

「そりゃ言いすぎでしょ！」

+

「おはよーございまーす」

茉莉とともに、私は教務課を訪れていた。

もちろんミッションを受けてお金稼ぎをするためだ。

カウンターには臣護先生の奥さんである悠希さんが眠そうな顔で
仮想モニタをいじっていた。

私に気付いて悠希さんが仮想モニタを消す。

「あ、緋色じゃない。どうしたの？」

「いや、ちよっち労働しようかと」

「ああ……」

それだけで悠希さんには伝わったようだった。

「それなら、はい」

私の前に仮想モニタが現れる。

そのモニタに細かな文字が大量に浮かび、上に流れていく。

「今あるあんたが受けられるミッションはそれだけよ」

……それだけ、って軽く千はありますよね？

おおう、この中からミッションを探せ、と。

「ええ、と……討伐的な分類のだけって見れます？」

「早速討伐？ 自信家なのね」

にやりと悠希さんが笑う。

「いやあ、まあ、一応軽く戦うことなら出来るんで……手っ取り早そうだしね」

「ふうん……茉莉は同行するの？」

悠希さんが茉莉に問う。

「……」

茉莉が小さく頷いた。

「そ。なら最高ランクまでの討伐系を受けられるわね」
「ん、どういことですか？」

最高ランクって……。

「学園の生徒は全員ランク付けがされてるの。FからSランクまでの七つでね。緋色は今、最低ランクのFで大したものは受けられないけれど、Sランクの茉莉が同行するならそっちに合わせて高ランクのミッションも受けられるわ」

「へえ」

「で、どれにする？」

目の前に仮想モニタにミッションがずらりと表示される。

うーん……。

ぶっちゃけ、どれがどれだか分からないんだけど。

「茉莉、なにか手頃なのない？」
「……なら」

茉莉が横から仮想モニタを操作する。

そして、一つのミッションを選択した。

「それを受注するのね？」

悠希さんがどこか呆れたような顔をする。

……あ、なんかやばい予感がしてきた。

「ちょ、茉莉、待っ」

「……」

私の制止も聞かず、茉莉が頷いてしまう。

「それじゃ、このミッションをあんだ達二人に任せるわ。内容は、ここから少し離れた所に巨大な巣を作った上位竜種約百匹の討伐。よろしくね」

「へ？」

上位竜種？

「ええと……響きからして凶悪な感じなのですが、上位竜種とはなんでしょうか？」

おそろおそろ尋ねる。

にっこりと悠希さんが笑う。

背筋に寒気がはしる。

「それはね——」

そして、私は上位竜種の強さを聞いて絶望することになった。

+

……んだけど。

「案外いけるわー」

腕を振るう。

魔力の暴風が竜の一体に襲いかかり、その巨躯がミキサーにかけられたように粉々になる。

よくよく考えたら、私って大陸殲滅魔術とか使えるし、裏ボスだろうがなんだろうが問題なさげなんだっけか。

……あの学園の授業見てから、自分の能力を過小評価していたらしい。

そうだよね、大陸殲滅とか、けっこう凄いよね？

私ちよつとくらい自信持ってもいい感じだよね？

少なくともRPGゲームなら間違いなくバランスブレイカーになれる感じだよねえ？

「……ちなみに茉莉、これってランクはなんだっけ？」
「……B」

あー、これでBなんだ。

裏ボスみたいな強さのやつが百匹でB。

うん、この世界で裏ボスなんてそんなものなのか。

仕方ないな！

仕方ないって思っちゃうところが仕方ないな！

仕方ないって思っちゃうところが仕方ないなって思っちゃうところが以下エンドレス。

「よっ、と」

魔力を掌の中に圧縮すると、そこに黒いなにかが発生する。

高密度の魔力によって、ありとあらゆるものを消滅させる概念が生み出されているのだ。

それを砲撃のように放ち、竜三体を消滅させる。

ううむ。

残り二十体か。

ようし、頑張るかね！

とか思っていたら、今まで静かにしていた茉莉が動いた。

「見てたらちょっと、身体を動かしたくなった」

茉莉が私を見る。

「残り、もらっていい？」

「え、あ、そりゃあもちろんいいけど……」

次の瞬間。

茉莉が竜の一体の尻尾を掴み、他の竜にその竜を投げつけた。

ぐしゃり、という音がして潰れた血肉が落下していく。

ひょ？

さらに、茉莉の姿が消えて、直後なにが起きたのか、突如竜が数体水風船のように破裂した。

虚空から黒い光線が雨のように降り注ぎ竜をまとめて薙ぎ払って行く。

残りの竜は、一体。

ほんの数瞬のことだった。

それだけで、あれだけいた竜が一体を覗いて殲滅される。

おいおい。

そんなの、あり？

残り一体の竜の前に、茉莉がいた。

竜が咆哮をあげ、茉莉に向けて口から白い炎を吐きだす。

逃げることはできないと、悟ったのだろう。

茉莉は動かない。

ただ、その右手がゆっくりと持ちあがる。

白い炎が茉莉を包む。

だが、その炎の中で茉莉は微動だにせず、服を焦がすこともなく、浮かんでいた。

竜の瞳に、わけのわからないものを目の前にした恐怖の色が浮かぶ。

「――」

茉莉の口が、動く。

……なにか呟いた？

刹那。

なにかが起きた。

黒い暴風が吹き荒れる。

「っ………！」

恐怖が私の心を塗りあげた。

なに、これ……!?

暴風が私の視界を遮る。

少しして、暴風が収まる。

開けた視界の中……それこでは……・

竜は消え、茉莉が変わりなく浮かんでいた。

「……終わり」

茉莉の身体から、光の粒子がこぼれる。

「……なにをしたの？」

「……すぐに緋色も分かる」

「え？」

「緋色は、どうありたい？」

「……それ、どういうこと？」

「ううん、なんでもない」

……ええと？

「……………とりあえず、帰る？」

考えても答えは出なさそうだったので、そう提案する。

「……」

茉莉が頷いた。

買い物にはっ！

「……おおう？」

教務課で報酬を受け取った私は、廊下に出て、学生証を取り出す。すると学生証の上に小さな仮想モニタが現れ、学生証の中にある金額を表示した。

「……とんでもねえ」

この世界の通貨価値を日本に換算してみると……その額は、私なんかが一生働いて稼げるかどうかという額になる。

「これ日本円に両替できないかなあ」

そしたらしばらく豪遊しながら生きてられる。

「その分、武器などは破格の値段がするものもある」

横から茉莉がぼそりと言った。

「そなの？」

茉莉が頷く。

「まあ……武器を必要としない強さがあれば問題ないけれど」
「そりゃそうだけど……私はまだまだそこじゃないかなあ」

苦笑する。

まあ、茉莉なんかはきっとその武器を必要としない強さに到達しているのだろう。

私も目指すべきところはそこなのだろうか。

そう考えるとちよつと憂鬱だ。

どうやったらあんな化け物じみた強さが手に入るのか。

「これからどうするの？」

「んー」

学生証をポケットにしまって、考える。

時間は昼。

余裕はあるし……そうだな。

「買い物にでも行こうかな」

「買い物？」

「うん。まだ家具とか最低限しかないし。小物なんかも揃えておきたいしね」

「そう……それじゃあ——」

「あ、おい茉莉」

茉莉の言葉を遮る声が合った。

声のした方を見る。

そちらから、臣護先生が歩いてきていた。

「なんだ、もう緋色と知り合ったのか？」

臣護先生がそう言うと、茉莉が小刻みに小さく頷いた。

……って、あれ？

なんか茉莉、顔がちよっと赤いような……。

え？

……も、もしかして……茉莉、そういうことなの!?

いや、でも臣護先生には悠希さんが……!?

え、ええ!?

修羅場?　これが噂に聞く修羅場というやつ!?

教師の職場恋愛!　けれど男教師には既に妻が!　それでも諦められない女教師!

昼ドラ的展開だな!

とか思っていると、横から軽く肩を叩かれた。

「……尊敬」

「お?」

えっと……尊敬って……?　?

……あ、もしかして茉莉は臣護先生が好きなんじゃなくて、尊敬しているってこと?

あー、なるほど。

尊敬の方向っすか。

……ツマンネ。

「……ん！」

もう一回肩を叩かれた。

ちょっと痛かったです。

「どうした？」

「……なんでもない」

臣護先生が不思議そうな顔を見ると、茉莉が首を横に何度も振るう。

……なんだこの様子、かわいい。

小動物具合がさらにぐんと上昇しているんですけど。

「そういえば茉莉。これから久しぶりにいつもの面子で模擬戦するんだが、混ざるか？」

「……！」

ぶんぶんと茉莉が首を縦に振るう。

なんか精一杯な感じがこれまたかわいい。

うへへ。

「そうか。それじゃあ行くか？」
「ん」

茉莉が私を見る。

「……そういうこと」

「あ、うん」

「買い物、頑張って」

行って、茉莉は臣護先生のあとについていった。

……あー、臣護先生羨ましい。

私もあんな風にちょこちょこ後についてきてほしいなあ。

……さて。

「それじゃあ、買い物いきますか……っ」と

とはいえ、一人で買い物というのも味気ない。

そもそもこの世界のどこで買い物が出来るのかも見当がつかないし、こういうときはあれだよな。

頼りになる人を呼ぼう！

仮想モニタを出して、連絡の取れる相手を表示する。

ゲームならここで選択しが出てるところだな！

・ナユタ

・ソウ

・アイリス

・エレナ

・スイ

・やっぱり一人で

みたいな？

んー……。

まあでも、ここはナユタだよな。

買い物行く時は一緒に行こうか、みたいなことを言ってもらったしね。

というわけで早速ナユタに連絡を取る。

仮想モニタに表示されたナユタの名前に触れると、通信中という文字が浮かぶ。

しばらく電話のコール音が聞こえる。

『どうしたの、緋色』

そして、ナユタの声が聞こえてきた。

「あ、ナユタ？ 今暇？」

『うん、暇だけど？』

「そっか。それじゃあさ、今から買い物いかない？ ちょっとお金が準備出来たから。あと、借りたお金も返すよ」

『もう？ 随分早かったね』

「うん。茉莉に手伝ってもらったんだ？」

『あ、そうなんだ。なるほど』

茉莉という名前が出ただけでナユタは全て納得したらしい。

『それじゃ、ちょっと待って、今そっち行くから』

「オツケ」

「お待たせ」

「うえ ええええええええええええい！」

いきなり後ろにナユタが経っていた。

お待たせて……いや待ってないし！

「は、早い!？」

「んー。急いで来たからね」

にこりとナユタが笑う。

そのナユタの後ろにはソウが静かに立っていた。

今日もクールビューティーですね。

「さ、それじゃあ緋色。早速行こうか！」

ナユタが私の手をとる。

って、おいおい。そんな気軽に手を握られると思わず顔が赤くな
つちまうぜ！？

「それじゃあまず、どこ行こうか？ 家具とか？」

「あ、うん。そうだね」

「オツケー。じゃ、ちゃんといいところ紹介してあげるね」

ナユタがウィンクする。

んー。

この学園、かわいい子、多いなあ。

ハーレム作りてえ……。

あくまで夢なんだけどね。

……泣ける！

部活はっ！

「ん……むっ」

布団から這い出て、背筋を伸ばす。

「むふう」

冷蔵庫から飲むヨーグルトを出して、一気飲み。

ああ、身体の奥までねばっこいのが落ちて……。

なんてことを考えつつ窓から外を眺めて、小さな溜息をつく。

「んむ、今日もいい朝であるな」

とかちよつと貴族気取ってみたり。

さて、今日はなにをしようかな。

「またギルドで依頼受けてみようかなー」

あるいは、どっかの学科にもぐりこむのもいいかも。

……まあ、あれだけど。

ナユタに案内された時の教師の人達のところにはいかないけど。

特にライスケ先生。

ありゃねえわ。

+

「うぐっ!？」

「どうかしたんですか、ライスケさん？」

「……いいや。な、なんでもない、ぞ？」

+

今、なんか言葉の槍がどこかの誰かに突き刺さった気がする。

まあいつか!

私の言葉に貫かれるならばその人も本望ってもんよ!

「さて、と」

とりあえず、指をはじく。

すると、次の瞬間私はパジャマ姿から私服になっていた。

必殺、超早着替え！

なんつってな。

まあたんに着替えるのがめんどくさいとかそういうわけだったりわけじゃなかったり。

え、乙女にあるまじき理由？

いいんだよ！ 私は乙女じゃなくて乙女を狩る者——乙女ハンターだからな！

さあ今日も乙女を狩りに行こうか！

はーはっはっ、レッツパーリイイイ！

……なんでもない。

「さて」

まあやることないなら、ナユタに連絡を取るってのもいいか？

もしくは茉莉でもいいかも。

んー。

つか、さ。

私……交友範囲、狭くね？

いやまあまだこの世界に来て数日なわけなのでそれは当然と言えば当然なんですけど。

ちょっと、交友範囲を広げる努力とかしてみようかな

「あ」

そういや、ここって部活動とかってあるのかね？

ふむ。こう言う時は検索だ！

仮想モニタを出して、検索を起動。

「学園世界の部活、と」

検索結果が表示される。

「ふむ」

やはり膨大な数の検索結果が出た。

軽く目を通す。

「ええと……学園世界の部活の総数……いち、じゅう、ひゃく、せん、まん……力行の一番最後を発音したいがなにか世界の抑止力的なものが私の咽喉を抑えて放さない!？」

まあ嘘だけど。

とりあえずこの世界にある部活数がとんでもないことは把握した。

そんじゃまあ、今日は部活巡りでもしてみますか？

っても流石にこれ全部は回れないし、私の好みにあった部活を探すかね。

んー。

「検索、学園世界、部活、オタク、っと」

表示された大量の部活名。

「この中から適当に行くか」

巡っている中で知り合い増やしていくとしよう。

+

薄暗い空間。巨大な円卓を、二十人前後の人影が囲んでいた。

その人影を照らす光は、それぞれの手元にある小さなモニターの明かりのみ。

全員が、そのモニターを凝視していた。

「ふむ」

響く声が聞こえた。

「いかがかね、諸君。これは」

「素晴らしいかと」

「期待値は高いな」

「同意にゃ」

「我々が待ちわびるに、相応しい」

「俺様が特別に許す。これは宝と呼んでいいものだとな」

「しかし方が一の可能性はある」

「今後の調査もぬかれぬが……まあ、決めてしまってもよいだろう。このブランドでこの出来ならば間違いなど憶に一程度しかありえぬし」

「それでは」

モニターに表示されるもの。

それは……今度この世界で発売される新作エロゲのプロモーション映像。

ふ、ふふ。

本当にいい出来じゃねえか。

この世界、なめてたぜ。

今日は帰りにパソコン買って、明日はエロゲ漁りだな。

ぐへへ。

「ジーク・エロゲ！」

『ジーク・エロゲ！』

重なった声が闇を震わせた。

「ふ……同志、緋色。どうだね、アーカシヤ級廃人を三千人排出した我がエロゲ部に、入部しないか？」

「君ならば、すぐにでも幹部級に」

「いいや、あるいは大幹部すらも夢ではないだろう」

「ゆくゆくは、大総統の可能性もなくはない」

そんな声に、私は顔を上げた。

「汝らの言葉、嬉しく思う。だが、私は先に進まねばならん」

ゆつくりと、私は円卓から立ち上がった。

「ここでとまるわけにはいかんのだよ。私はね。アレを倒すために……この世界を、救済するために」
『っ!?!?』

円卓がざわめく。

「こ、これはまさか、人の心を揺さぶる厨二病……!」

「厨二病・セカンド……!」

「ありえん! 厨二病・セカンドの発現者はいまだ数人しか確認されておらんのだぞ!」

「ば、馬鹿な。緋色殿はすでにアーカシャ級を越え、マルドゥーク級の廃人だとも!?!」

円卓のざわめきを背中に、私は歩き出す。

「汝ら、その道を信じて進むが良い」
『……!』

円卓に、再び衝撃が走る。

「汝らが私に……妾に追いついてくること……この心の臓に新世界の刃を突き立てるその瞬間、楽しみにしておこう」
『っ、ジーク・緋色!』

+

「うおおおおおおおおおお、来い……来いっ!」

回転する巨大なルーレットが目の前にあった。

そのルーレットを転がる銀色の玉。

「頼む……!」

私に相對する男が、手を組む。

私はただ、黙って見つめた。

そしてルーレットの回転が弱まり、玉がルーレットの数字が書かれた枠におさまる。

あたりを、ざわめきが包んだ。

ざわざわ、ざわざわ。

「い、いやだあああああ！」

男が叫ぶ。

「お、俺はもうあんなところには戻りたく……お、おかしいんだ！
あの女、なにかイカサマをしているに違いない！」

そんなことを言う男を、どこからか現れた黒いスーツの男達が両脇から持ちあげて、引きずって行く。

「うあああ！ うあああああ！」

そのまま、男はどこかへと消えた。

「……馬鹿な。これで何連勝目だというのだ？」

「イカサマというのも、あながち……」

「だがここに一体どれほどのイカサマ破りがいると思っている？」

「そのなかでバレないイカサマを使っている？」

「あるいは、ただ純粹な強運の持ち主、か」

ギャンブルマニア部。

ふふふ……ちよい楽しいな、これ。

ちなみに言っておく。

イカサマ？

……なんのことか緋色わかんない♪

きゃぴっ。

「さ、次！」

私の言葉に、周囲にいる誰も動かない。

ふむ。

まあ、こんなものか。

「んー、じゃ、とりあえず私はこれで退散しようかな」
「ま、待ってくれ！」

この部の部長が前に出てきた。

「あ、あなたならギャンブル界の星になれる！ 入部、しないか？」
「悪いね」

にやりと笑う。

「私は、弱い者いじめは好きじゃない」

それだけで、全て通じたらしい。

部長が崩れ落ちる。

「それじゃあね」

+

ふむ、私はなかなかおちやめしてるな。

とか思いつつ、次の部活はなににしようかと仮想モニタを見ながら思案する。

「あ」

なんかおもしろそうなの発見！

「戦争ごっこマニア部、か。うむ、これだな」

活動内容はっ！

ふう。

まあ、あれだよ。

私の話を聞いてくれるかい？

私あ今、戦争ごっこマニア部とかいう意味わかんねえ部にきているのさ。

意外や意外……というわけでもないが、その部にはちゃんと部室があった。

明らかに野外活動っぽい部活なのだが、この学園で野外とか青〇とか露出プレイとか関係ないし。部屋、明らかに部屋じゃなくて一個の環境だし。

ちなみに青〇の〇に入るの春だから！　おいおいあんたらなにかんがえちゃったんですかあ。ぶひひ。

いやまあほんととて姦しい的な文字を入れるんだけどね！

でへっ。

……こほんっ。

いゃん皆えっちだなー。

……おえ。

んん！

はい、私は今、戦争ごっこマニア部の部屋にノックも無しに突入したところでーす！

まあそのくらいのサプライズは必要じゃん？

でね！

中はね！

なんとね！

東京でした！

一面火の海の！

………ホワイ？

ええと、一面、火の海？

ファイヤーシー？

フレイムシー？

ヴァーミリオンシー？

インフェルノシー？

萌え萌えきゅん？

今、確実にエターナルフォースブリザード並みの寒さがどこかで生まれた。間違いない。

んで、まあ……あれだわ。

んで、火の海な東京の上空に、巨大な三つの影が浮かんでる。

つかあれは……なんだ？

なんか、黒い……闇、っていうか……うん。とりあえず、そんなの。

そして、その闇の中にそれぞれ人影が浮かんでいた。

それに見覚えがある。

一人は、アイリス。

一人は、エレナ。

一人は、スイ。

「さて……残るは私達三人だけ、みたいね」

スイが目を細め、アイリスとエレナに対し身構えた。

スイの周囲の闇が、その背中に、まるで翼のような形状で集まる。

「この第三次三勢力衝突 i n トーキョーも終結だ！」

アイリスが手を上げると彼女の周りの闇が大量の剣の形状を形作る。

「……」

エレナは、無言のまま溜息をつく。

すると、残りの闇がエレナを中心に渦を巻いた。

「とりあえず、今回は私が勝たせてもらうわ……でも、その前に」
「今回こそ勝利を我が手に納めさせてもらうぞ……が、その前に」

スイとアイリスの瞳が、同時に同じ方向を向いた。

すなわち、エレナに。

二人が同時に、エレナに向かって飛び出す。

「正しい判断、だね。正直、常闇の扱いは私が一番上手いわけだし……三竦みで戦えば最後に残るのは当然私……って、そんなことに今更気付いたんだ？」

エレナの口元が歪んだ。

「っ！」

アイリスが腕を振るう。

すると、闇——どうやら常闇というらしい——の剣が、大量の雨となってエレナに降り注いだ。

それに対し、エレナは指をならす。

すると、彼女の周りの常闇が一度脈動して、巨大な竜の顎となって飛んできた剣を一囓みで消滅させる。

「甘い……やるなら、今の質量の千倍は持って来なよ」

「他所見してて、いいの!？」

エレナの背後に、いつのまにかスイが迫っていた。

スイの常闇の翼が羽ばたき、そこから無数の爪のようなものが生

えてエレナに襲いかかる。

串刺しにされるエレナ。

そんな未来を私は見た。

けれど――。

「他所見？　ちよつと違う」

スイの爪がエレナの身体に突き刺さる――直前。

爪が溶けた。

「これはね、余裕のあらわれ」

首だけで振り向いたエレナが微笑む。

「そもそもあなたや姉さんの常闇の制御を奪うのなんて、そう難しいことじゃない……ここで取るべきは、下手な鉄砲を数撃つのではなく、必殺の一撃を私にこれ以上ないというタイミングで撃ちこむことだった。まあ、そんなことはさせないんだけど」

つまらなそうに言って、エレナが手を上げる。

「常闇……喰らいなさい」

と、エレナの頭上に巨大な黒い闇が生まれた。

次の瞬間、強大な引力がその闇から生まれた。

「っ!？」

その場のエレナ以外の誰もが動揺した。

その引力は光すらも吸い込んで、辺りを暗闇に染め上げていく。

これってまさか……ブラックホール!？

遠くにいる私すら関係なく吸い込まれそうだった。

あんなのに飲みこまれたら……冗談じゃすまない!

私は慌てて、べりべりと剥がれていく地面に、自分の身体が壊れること覚悟で魔力による重圧を加え、吸い込まれないよう固定した。

膝が地面にめり込む。

「う、ぐっ」

身体中の骨が軋む音がした。

やつ、べえ……。

そんな中、私は上空に再び視線を向けた。

アイリスとスイは、どうにか空中に留まっていた。

だがそれが限界のようで、上手く身動きがとれない様子だ。

「まあでも、今回は良い線いったかな……うん。それじゃあ、二女からの教訓」

エレナだけは至って普通に動いていた。

エレナの手がアイリスとスイに伸ばされる。

「二人とも、私に挑む前にせいぜい《顕現》くらい使えるようになってから、来なよ」

《顕現》？

なんだ、それ。

私が首を傾げると、エレナの手から強大な魔力の塊が放たれ、アイリスとスイの身体を打ち、そのまま二人を地表に叩きつける。

東京タワーよりも高そうな土煙が二ヶ所で立ち上った。

と同時に、ブラックホールが消える。

私も自分への重圧を解除して、身体を再生させる。

「……パネエ」

この部活、関わるのはあまりにも命知らずすぎる。

どうして私はこんなところに来てしまったのだろう。ちゃんと下調べをするんだった。

「それで？」

びくりと肩が跳ね上がった。

エレナの瞳が、私を捉えていた。

「……は、はろー」

「こんにちは、緋色」

にっこりと綺麗にエレナが笑う。

「なに、部活見学？」

「ま、まあ、そんな感じ？」

「そうなんだ。それじゃあ、ここはどうだった？ 楽しいよ？」

「あー」

ちらっと周りを見回す。

うん。

控えめに表現すると……地獄、かな。

「他の部活も見に行きたいんでこの辺りで！ じゃ！」

ぴしっ、と手を挙げて、私は身を翻す。

「ふふっ」

背後から聞こえたエレナの微笑に背筋がこれ以上ないほどに冷えた。

うわぁ……。

最後の一人はっ！

「はあ……あの三姉妹は危険だ……とくに二女」

眩きながら、校舎の廊下を歩く。

……っていうか、歩いているうちに、廊下がなんか「ここは旧校舎です」みたいな感じになってきたんだけど。

ほら、床なんか軋むし。

これ明かりなかったらホラーのレベルだよ？

とか思っていると、廊下の突き当たりにぶつかった。

「おろ？」

適当にあるいてたしなあ……迷子になったかも。

まあ迷子っていうっても転位扉さえあれば迷子なんてどうってことないんだけどさ。

いやあ、この校舎ってほんと便利だわ。

噂によると一年で東京ドーム一個分の大きさを増築されているらしい。

「んー？」

突き当たりにあったのは、一つの扉だった。

その扉の上にかかげられたプレートをふと見上げた。

「風紀委員会外特別支援殲滅執行部……？」

なんだこの恐ろしくものものしい名前は。

ええと、風紀委員？

いや、でも外ってことは、そうじゃないのか。

んー、つまり、風紀委員ではないけれど、風紀委員を支援する人があつまる場所、ってことなのだろうか？

にしても、殲滅執行部って……え、殲滅？

学園に殲滅なんて単語が介入する余地は――。

その時、これまでの記憶がフラッシュバックした。

うん、納得した。すべてに。

殲滅あるな！

「でもまあ、とりあえず覗いてみるか」

なんか興味あるし。

一応これも部活、なのかな？

というわけで、扉にてをかけて、そっと開く。

「失礼しまーす」

そっと扉の中を覗き込む。

「――…あ」

そこにいたのは、一人の少女だった。

広い部屋。

真中に長机が二つといくつかのパイプ椅子が置かれただけの殺風景な部屋。

その部屋のパイプ椅子に腰を下ろし、窓枠に肘をかけて外を見ている少女は、この学園に来て何度目かは分からないけれど、それでも「これまで」に劣らぬ衝撃を私に与えた。

黒い髪は、腰よりも低いところで折り返しをして、頭の後ろで留められていた。普通に伸ばせば、身長よりもずっと長いのだろう。

どこことなく憂いを帯びたような表情は、それだけで絵になる。

「——なにか、御用かしら。特別クラス所属の、棘ヶ峰緋色さん？」

凜、というよりも、突き刺すような声が私に向かって放たれた。

彼女の顔は私に向いていない。

「え、なんで私の名前……」

「同じクラスですもの。知っていて、不思議はないでしょう？」

同じクラス？

「ってことは……あなたが特別クラスの最後の一人か」

というかちよつと待った。

同じクラスだから、名前が分かるってのは、まあいいよ？

でもなんで顔もしらないのに私の名前を言えるのさ。

会ったこと無いんだから顔と名前が一致するわけくない？

……まあ、この学園にいる人にそういう疑問を感じる方が間違えなのかもしれないけどさあ。

「えっと、そっちの名前は？」

「あら、教えなくてはならない理由などありますか？」

「う……」

な、なんだろ。

もしかして私、この子ちよつと苦手かもしれない。

「……はあ」

私の態度を見て、彼女が溜息を吐く。

「まあ、同じクラスのよしみとして応えて差し上げましょう。小夜^{こよ}。

それが私の名前です」

「小夜……」

「気軽に呼ぶのですね」

「あっ……え、えっと、じゃあ、小夜ちゃん？」

「ちゃん、ですか」

こころなしか小夜ちゃん（仮）の目が鋭くなった気がする。

「え、ええとじゃあ、小夜さん！」

「……」

小夜さん（仮）が再び溜息を吐く。

「呼び捨てで構いません」
「あ、ありがと」

やっべ。

やりづらい。

こ、こうなったら……！

「ところでこんな部屋でなにしてたの！？ あ、もしかして一人っ
てことで、ちょっとイケナイこととかしちゃってたり？ そのスカ

「トの下とか濡れ濡れだったりしちゃいます!？ あはっ」

下ネタは全人類の共有言語！

「……」

うん、小夜の視線がブリザード。

まじ死ねるレベルで滑った。

若干滑ることは予見できていたのだが、止まらなかったのさ。

それがこの私、緋色ちゃんだからさ！

きらんっ。

「……」

ところでその絶対零度の目をやめて欲しいなあ。

死んじゃうよ？

私、凍死しちゃうよ？

「あなたは、恥ずかしい人なのですね」

ぐさっ！

全てを諦めたようにそんなことを言われて、私のガラスのハートは粉々だ！

「私はただ、外を……この世界を眺めていただけです。なにも問題が起きないのならば、それでよし。起きているならば、そしてそれに私の力が必要ならば、出ていく。その為に控えているだけのことです」

「……そう、なんだ」

うーん、かたっくるしい空気だ。

それにしても、控えている、か。

いつから控えてるんだろ、この子。

「もしかして朝から晩までここにいたりして」

「暮らしていますから」

「……………」

聞き間違いであろう。

「もしかして朝から晩までここにいたりして」

「……」

「リアクションを頂戴!？」

ちょ、ちよつと、リアクションないといっそ真実味が出てきちゃうじゃん!

「ま、まさかマジでこんなところで暮らしてるの?」

「ええ」

あっさりと小夜が頷く。

「生活感もなにもないけど!？」

「生活に必要な物資は収納空間にありますし、調理や入浴などは近くの設備で済ませます。前者ならば家庭科部の部室で。後者ならば湯めぐり部の部室で借りることができますので。その他も、いかようにでも」

「……」

この学園マジ便利。

つかあとで湯めぐり部は行っておこう。部室とかに何種類も温泉があったりするのだろうか。

「で、でもエログッズとかは!？」

「……必要ないでしょう」

「ええっ!？」

MA☆JI☆DE!?

「……ところで、いい加減出て行ってくれませんか？」

「へ？」

小夜が私の事を見つめる。

ああん、そんな見つめられたら照れちゃう!

「わずらわしいのですが」

「わずっ!？」

ダイレクトに言われちゃったよ!?

うわあ、自覚ちょっとあるけど美少女に言われるとダメージだけえ。

「……うん」

しょぼーんとしながら、私は小夜に背中を向けた。

ちらりと後ろを見ると、すでに小夜は私を見ていなかった。

うわあ……これは悲しい。

……つか、さ。

なんだろ。

部屋の中を見回す。

ここに、朝から晩まで、かあ。

なんかそれって……寂しくないのかな？

少なくとも私なら、絶対にノーサンキューなんだけど。

「あの……」

「なんですか？」

「……時々、遊びに来てもいい？」

出来るだけ小動物オーラを出しながら尋ねる。

果たしてそんなオーラを出せていたかは定かではない。

「……」

再三、小夜が溜息を吐く。

「だ、駄目だね。ごめん、変なこと聞いて」

「……別に、この部屋は部員以外立ち入り禁止、などという規則はありません。もちろんそれを推奨するわけでもありませんが、特別、私にはあなたの行動を止める権利はない」

「……お？」

それってつまり……オッケーってこと、だよな？

おお！

美少女の部屋にいつでも来ていいって許可もらったぞー！

「お茶もお菓子も出ませんし、面白い話相手もいませんが」

「別にいいよ！ それに、面白い面白くないじゃないでしょ！」

小夜みたいな女の子がいるんだよ？

「小夜と話せるなら、それはけっこう嬉しいことじゃない？」

「……そうですか」

小夜は私を見なかった。

「それじゃ、また来るね！」

「……」

返事はなかった。

よし、決めた。

第一目標。出ていく時に小夜に「またね」って言われよう！

+

「嬉しい……？」

そっと、自分の掌を見る。

「……馬鹿なのでしょうか、あの人は。こんな私と？」

不穏な空気はっ！

お腹が空いた。

朝から結構歩きまわったしなあ。がつつり食べたい気分。

うし。

というわけで……。

「食堂にやってまいりました！」

じゃじゃん！

うわー、すげえ。

食堂って……これも小さいホールってレベルの大きさじゃん。

収容人数何人ですか……。

イメージとしては、ショッピングモールとかにありそうなフードコートみたいなかんじ？

壁際にはずらりといろいろな店が並んでいる。

これだけ広い空間にも関わらず、7割ほどの座席が埋まっていた。

うむ、期待値高し。

というわけで私は早速昼飯をなににするか歩きまわる。

ほんとにいろいろあるなあ。

「和洋中はもちろん……どこぞの民族料理みたいなものまで……」

ふーむ、なににしようかな。

私的には「ケバブーロール」というアホな商品に心惹かれるのだが、流石にそんなのは食べきれないし。

うーむ。

かつ丼にしておくか。

え、女の子のチョイスじゃない？

いいんですよ食べたいんだから！

というわけでかつ丼専門と書かれた看板の店へ近付く。

すると、その店の前にいる人影に視線がいった。

「お？」

「あ」

アイリスが、そこに立っていた。

あれ……アイリス、さっきエレナに……。

復活早いな。

私なら半日は寝込む自信があるんだが。

「緋色じゃないか。なんだ、昼食か？」

「うん。アイリスもかつ丼？」

「ああ。ここのかつ丼は疲れた時にこそ美味しい」

……私がいうのもなんだけど、アイリスは女の子として昼食をかつ丼にしているのだろうか？

いや、べつに私はいいんだよ？

でも、こう、美少女がかつ丼って……絵的にねえ？

「早く注文したらどうだ？」

「あ、うん。すみませーん」

アイリスに言われて、店の人にかつ丼を注文する。

卵二倍とかあったけど、やっぱり最初はスタンダードでしょ。

少ししてアイリスのかつ丼が運ばれてきた。

「一緒に食べるだろう？ 席をとっておこう」

「ん、ありがと」

その後、私もすぐにかつ丼を受け取ってアイリスがとっていてくれた席に向かう。

そうして、ちよくちよく会話も交えつつ、かつ丼を二人で食べた。

周囲から奇妙なものを見るような目を向けられたのは気のせいだったろう。きっと。

ちなみに味は文句なし。

これまでの人生で一番美味しいかつ丼だったと言っても過言ではないレベルだった。

これであの値段なら十二分だよなあ。

うーん、ここの学食、いいわあ。

食事を終えて、私とアイリスは椅子にもたれかかっていた。

余は満足じゃ。満腹満腹。

「そういえば、さっきうちの部に見学しにきてたんだって？」
「あ、まあねえ」

ただすぐに逃げだしたけど。

「入るのか？」

なぜかきらきらした目で尋ねられた。

「断固拒否」

もちろん笑顔でそう答える。

あんな部に入ったら三時間で死んでしまうわ。

「ふむ……嫌なのか？」

「そりゃあ、ねえ」

エレナの振るう暴威が脳裏をかすめた。

あれは……ひどかったなあ。

「緋色が入れば、面白そうなんだがなあ」

「あはは。ごめんね」

「……まあ、いいさ」

あ、意外。

なんとなく、アイリスの言動から無理にでも勧誘されるものばかり思ってたんだけど。

「同じ部になどいなくとも勝負はできるしな？」

にやり、と。

怪しい笑みを浮かべ、アイリスが私を見る。

「へ？」

あ、逃げよう。

そう思った時には遅かった。

「勝負をしよう、緋色」

いつの間にかアイリスが私の手を掴んでいた。

ぷぎゃー。

「離してくださいえ！」

「無理だな」

「無理ということはしないでしよう！」

ああっ、だめえっ！

そんなに強く手を握られたわ、私……骨が碎ける！

痛い痛い！

ちょ、逃がさないために私の手を破壊しようとするのはやりすぎじゃね！？

「わ、私このあと用事が！」

「どんな？」

「え……そ、それは……じ、自分を慰める感じの行為！？」

「……」

おおっ、アイリスの口角の角度がさらにあがったぞ。

「それならば、この後は暇だな？」

「ええ、聞いてた!？」

「別に「自主規制!」など、いつでも出来るだろう」

あ、あぶねえ!

今私が言葉挟まなかったらこいつマジで言ってたぞ!

オで始まる四文字の単語を口にしてたぞ!

美少女がそんなこと言っちゃいけませんよ!?

「さあ、では行こう。部室でいいよな？」

アイリスが私の手を引いて立ち上がる。

「ちよっ!」

「いいだろう。ほら」

「ご、強引になんて……そんなの、ひどいわっ!」

「そうか」

「あっさり流された!」

とか、きゃいのきゃいの騒いでいたら――、

「あ」

がちゃん、という音がした。

見ると……アイリスが背後を通った誰かにぶつかっていた。

そしてその誰かはお盆を持っていて、その上にはパスタ料理がのっていた。

そう。

のっていた……過去形だ。

その皿はアイリスがぶつかった衝撃で、お盆から落ちて床に転がっていた。

もちろん料理は台無しで、しかもその人物の服が汚れている。

白いソースで、汚れている。

しかし残念ながらその人物は男だった。

ほんとうに遺憾ながら。

「ああ、悪いな」

アイリスが振り返って、その男子に言う。

男子は俯いて、肩をふるふる震わせていた。

あれ、これやばげな雰囲気？

「……また貴様らか。特別クラス」

え、貴様ら？

複数形っすか？

「ん？ また、とは？ どこかで会ったことがあったか？ ふむ。
それなら悪いな、記憶に残るほどの存在感は私の中ではなかったらしい」

ここでその台詞が出るとかマジパネェっすアイリスさん。

そろそろオイラ逃げていいっすか？

「俺個人でなくとも……特別クラスが、他の生徒達にどれほど迷惑をかけているか、分かっているのか？」

彼の手の中のお盆が軋み、碎ける。

膨大な量の魔力が滲み出してきた。

お、おお？

かるーく私の魔力量越えてません？

もしかしてこの彼、結構すごい人？

「授業に気紛れで参加すれば、その授業を受けていた生徒達を全員入院させ」

それは酷い。

誰だ、誰がやったんだ。

「ふむ」

アイリスさんなんか覚えがありそうな顔してません？

「ちょっと声をかけようとしただけで付き人が襲いかかってきたり」

付き人のくだりで一人しか思いつきません。

……声をかけるくらいでソウがそんなことするかなあ？

なんかそれ、誇張とか入ってるんじゃない？

もしくはただ声をかけようとしただけじゃなかった、とかかな。

「ちょっと機嫌が悪いからと殺気で周囲の人間を気絶させたり」

あー……スイかな？

つんけんしたイメージがある。

「ちょっと魔が差してからかっただけで、その後唐突に姿を見なくなった生徒もいた」

順当にいくならこれはエレナか。

エレナなら生徒の一人二人、引きこもりにさせるのは簡単そうだ。

なにせ腹黒っぽいし。

「担任は担任で訓練で力加減を間違えたとはざいて校舎の一割近くを消し飛ばす」

茉莉エ……。

「他にも風紀関係の仕事をしているかと思えば、違反者捕縛の際に世界一つを壊しかける」

小夜……そんなことしたの？

うん。

総評。

特別クラスとかマジ迷惑じゃん？

「貴様らのなにが特別なのかは知らんが……全生徒を代表して、この俺……ゼファ―ローゼンベルクが言ってやろう」

彼が――ローゼンベルクが顔をあげ、アイリスを睨みつけた。

「貴様らは、この学園の汚点だ！」

「……ふむ？」

そんなことを言われて、アイリスは微動だにしなかった。

「それで？」

「なんだと？」

「それがどうかしたか？」

アイリスが鼻で笑う。

「汚点？ 別に美しく在ろうなどと考えたことはない。汚点結構。好きに評価すればいいさ」

そんなアイリスの言葉を受けて、ローゼンベルクがたじろぐ。

「っ……改心するつもりすらないか」

ローゼンベルクの目がさらに鋭くなった。

「ならば、もういい。実力行使だ」
「ほう？」

ありゃ？

これは……マジでやばくね？

アイリスとローゼンベルクの間、魔力が渦巻く。

「特別クラスなどというものの実力を教えてもらおうじゃないか」
「構わんが……?」

そんな二人の危険な雰囲気を感じ取った周囲の生徒達が、そろそろと非難していく。

ちよ、待つ、こんなところにいたら私は避難できないよ!?

誰か助けてよ!

思うが、勿論誰も助けの手を伸ばしてはくれない。

「ふん。その調子、いつまでも続けられると思うなよ」

ローゼンベルクの纏う雰囲気が変わる。

背筋に悪寒が走った。

「――《顕げ》――」
「はいそこまで」

悪寒を、悪寒が塗り潰した。

「校内でのそれは、嚴重に禁止されているの知ってるかな？」

いつの間にか、小柄な青い髪の少女。

その手には黒い水晶で作られたような剣が握られ、剣尖はローゼンベルクの首筋にあてられていた。

……誰？

ローゼンベルクの顔が、真っ青になる。

「ナ、ナンナ……理事」

理事……？

え、この子が？

マジか……。

「それじゃ、ゼファー君。反省室に入る覚悟は決まってるかな？」

にっこりとナンナ理事が笑う。

それだけなのに、妙な威圧感を感じた。

ローゼンベルクが小刻みにこくこくと頷く。

「そ。物分かりがいい生徒は好きだよ？」

ナンナ理事が、ちろりと私とアイリスを見る。

「そっちは……まあいいか。一つ言うなら、あんまり食堂で暴れちゃ駄目だよ、アイリス。それに……棘ヶ峰、緋色さん？」

「善処しよう」

「あ、はい」

私達が頷くと、ナンナさんがローゼンベルクを連れて歩いて行った。

……なんかローゼンベルクの背中が可哀そうだった。

「……ナンナ理事って、何者？」

「この学園でも最強と呼べる人の一人だ。逆らわないのが身のためだぞ。特別クラス総出でも勝てるかどうか……いや、勝てんだろうな」

うん、なんだただのチートか。

十

「メルさん。最近、特別クラスへの不満が生徒間で溜まっている、という噂を聞きましたか？」

ティナさんがそんなことを言いだした。

来月の校舎の増築予定表から顔をあげる。

「不満、ですか」

「ええ。実際、当然と言えば当然なのですが……特別クラスはなにをもって特別なのか、と」

それはまた、もっともな疑問が出てきたものだ。

「……まあ、《顕現》だけで言うのであれば、他の学科でも出来る子は何人もいますからね」

「逆に、特別クラスには《顕現》の出来ない子が約半数……」

そういうところから、特別クラスへの不満が生まれているのだろう。

「……特別クラスの意味を説明出来れば楽なのですからね」
「説明して分かってもらえるようなものでも、ないですから」

ティナさんが溜息を吐く。

「心配ですね」

「そうですか？」

私は別にそうでもない。

心配と言うのであれば、その問題よりもよほど心配なこともある。

特別クラス。

それは……大きな力を秘めた、それ故に危険な生徒を集めたクラスのことだ。

決して間違った道を進まないように、特に注意して導くために……まあ、ちょっとした最前もあって作られたクラス。

もしなにか一つ間違えてしまったら。

そう考えると……私は一番それが怖い。

特に、あの子。

恐らく一番大きな可能性を秘めた……あの人の娘。

武器はっ！

「武器が欲しいー！」

ばん、とドアを開けて部屋に突入する。

出来ればこう、部屋の中では寂しさを慰める例の行為が行われてたらなんてよこしまな思いがなくてもない。

……もうそろそろこのネタ使いまわせないな。

「へえ、そうなの？」

そんな私の願望も虚しく、部屋の主……ツクハさんは平然と窓の外を眺めながらそう返してきた。

「……そんな美味しい展開、ないって分かってたですとも」
「ふふっ」

私の呻きに、ツクハさんが微笑む。

「それにしても、随分といきなりだね？」

「んー。いやあ、だってこう、ファンタジーな世界に来たんだし、

魔法だけじゃなくなにか武器も使いたいじゃないですか？」

「そういうもの？」

「そういうものです」

「ふうん……でも、武器かあ」

ツクハさんが顎に手をあてて考え込む。

「どんな武器がいいの？」

「んー……聞かれても。分からないんですよ。生憎武器なんて使ったことはないんで」

「だとしてもイメージくらいあるんじゃない？」

「イメージ……」

まあ確かに、ラノベとか呼んでれば、ちょっとくらいはあるけれど。

「例えば、剣とか」

「あ、それは嫌です」

「そうなの？」

「だってそれは、あんまりにもそのままじゃないですか」

ファンタジーに剣？

そんな平凡は私が許しません！

もつとなにか……こう……非凡でありスタイリッシュな……！

「武器の種類に詳しそう、たとえばあの子だけど……緋色を合わせるのは……」

ぶつぶつとツクハさんがなにかを呟く。

「佳耶に話したら間違いなくチェーンソーだし……」

チェーンソー……？

え、チェーンソー？

ど、どういうことだってばよ。

嫌な予感しかしないでありますな。

つつこまない方向で！

ああん、もちろんそっちの「つつこむ」じゃないからね！

「……茉莉も……絶対に刀をすすめてくるし……小夜は、まず呼び出しに応じないだろうな……」

ツクハさんはなおもぶつぶつ呟いている。

考え込むと周りが見えなくなる人なんかなー。

「あの三姉妹は武器とはほとんど無縁だし……ナユタは剣以外使ったことない……教職員は今は授業中だし……」

「あ、あの、そこまで真剣に考えてもらう程のことじゃないですよ？」

ちよつとツクハさんのところに乱入する名目みたいなのところもあったし。

そこまで真剣になられると、逆に申し訳ないっていうか……。

「んー……あ」

ぽん、と。

ツクハさんが手を合わせた。

「緋色」

「はい？」

「いい手を思いついたよ」

「ほう。それはいかようなの？」

にやりとツクハさんが笑う。

「想像して……貴方が思う、貴方にもっともふさわしいと思う武器を」

「は？」

想像？

どゆこと？

「いーからいーから！ 目を瞑って！」

困惑顔をする私に、ツクハさんが言う。

仕方なく私は目を瞑った。

「とにかく、強く想像……ううん。信じて。貴方の武器が、貴方の手の中にある、と」

「……？」

「いーから」

ほんと、なんなんだろう？

まあいいや。

ツクハさんがここまで言うんだし、やってみよう。

ええと、手の中に、私が私にもっともふさわしいと思う武器があると思えばいいの？

っても、ふさわしい武器ってなんだろう？

……分かんないから適当でいいや。

むむむむむ。

緋色ちゃんにふさわしいウエポンよ、いでよ！

ちゃーらーらーらん！



「むむっ？」

なんか違和感があった。

「へえ」

ツクハさんの感嘆の声が聞こえる。

「すごい、まさか一発とは……とはいえ、未完成か」

「どういことですか？」

「目、開けていいよ」

言われて、目を開ける。

すると、私の手の中に大鎌がありました。

てへっ。

って、うえええええええええええええええええええええええい！？

「な、なんじゃこりゃあああああああ！」

「なになって、緋色の武器」

「いやいやいや、いつの間に！？」

「緋色の想像が形になったものだよ」

さらりとツクハさんが教えてくれる。

「え、そんなのアリ？」

「ありあり。まあ、一応秘奥義ちつくな技だけど……緋色は凄いな
え」

ひろ は ひおうぎ を ますたー した。

マジかよ……。

私は改めて、手の中のそれを眺めた。

柄は私の身長程もあり、色は黒に血管のような筋が赤く刻まれている。刀身は半月型で、なんとなくギロチンをイメージさせる。色は漆黒に赤い幾何学のラインが入っていた。

ふうん……へえ……。

悪くない。

「でもなぜ大鎌？」

「緋色が緋色っぽい、って感じたんでしょ？」

「いやいや、私イコール大鎌って……」

厨二の自覚はあるが、まさかそんな痛い考えをしているとは。

へへっ、自分にびっくりだ。

「まあ、私から見ても、らしいといえればいいけどね」

「へ？」

「似合ってるよ。なんか、緋色ってさ、強い自分を装うタイプじゃない？」

「そ、そんなこたあねえですよ!？」

凶星っ！

「そんな……言い方悪いけど、虚勢がさ……その禍々しい大鎌にぴったりだよ。大鎌なんて見かけはかっこよくて強そうだけど、実際はとことん扱いにくいものだしねえ」

「今私、なにげなく「お前は見かけばかりだ」とか遠まわしに言われませんでしたか？」

「さあ、どうかなあ」

否定してほしかった。

「でも緋色、これだけは言えるよ？」

「はい？」

「緋色は、虚勢を本当の自分に变えていけるよ。それだけの力がある。それは私が保証してあげる」

「……」

あ、ありや？

褒められた？

「……でへへ」

人に褒められるのはとことん弱いとご近所で評判だった緋色ちゃんですよ？

そんなこと言われたら……でへへ。

「よしっ、ツクハさん、私頑張るよ！」

「うん」

「そいじゃ、ちよっくらこの武器の扱いでも練習してみようかな？」

「それなら特別クラスの三姉妹に協力してもらったら？」

「……」

え、あの三姉妹に？

「……か、考えては、みます」

「うん」

「そ、それじゃ！ またね、ツクハさん！」

「あ、待って」

「ん？」

部屋を勢いよく出て行こうとしたところで、ツクハさんに呼び止められる。

「私には敬語とかいらないし、呼び捨てでもいいよ?」

「……マジで?」

「ほんとはいけないんだけどね……緋色のことは、鼻屑しちゃおう」

笑顔でツクハさんがそんなことをおっしゃる。

……ま、まさか私がニコポされる日が来るとは!

「了解、です」

ツクハさんの笑顔破壊力高ええええええええええ!

内心で叫ぶ。

「そ、それじゃ、またね! ツクハ!」

「うん」

逃げるように私は理事長室を飛び出した。

+

「未完成とはいえ、《顕現》をああも簡単に……末恐ろしいなあ」

まあ彼女も、最初は未完成の《顕現》を使ってたし……ある意味で、これはなによりも喜ぶべき成長なのかな。

なにせ、彼女と同じ路を辿っているということだから。

……ううん、でもそれじゃあ駄目なんだ。

彼女と同じじゃ、意味がない。

緋色……あなたには、期待しているんだよ？

「ねえ、エリス？」

「——ええ」

窓際にいつのまにか腰をかけている人影が合った。

その背中からは、六枚の白い翼が広がっている。

ポニーテールでまとめられた長い銀髪が風に揺れた。

私と瓜二つの顔立ち。

私の、最愛で最強の妹。

「あと、どれくらいかしら？」

「さあ」

エリスが微笑み、肩を竦める。

「私には、なんとも。あくまで今の私は、見守るだけだから……」
「そうだったわね」

くすり、とエリスが笑う。

「緋色には素で喋っていいと言うわりに、あなたは素を見せてあげないのね？」

「そりゃそうよ」

私も微笑み返す。

「私の素は、重いのよ？　　まだまだあの子には委ねられないわ……」
まあ、今は、だけど」

「あの子は十分に強いわ」

エリスが空を見上げる。

「……そうかもね。あなたには、それが分かるの？」
「——……」

無言のまま笑みを深くして……次の瞬間、エリスは消えていた。

「まったく」

軽く溜息を吐く。

「そういうこと言われたら、期待しちゃうわよ？」

似非関西弁はっ！

辺りに草の根一本すらない荒野。

学園からは、音速で片道一時間の場所に私はいた。

「ブレイヴアアアアアアアアアアアア！」

大鎌を振り下ろすと、濃い紫色の炎が巨大な柱となって空を貫いた。

もちろん技名はノリだ。

その火柱に巻き込まれて、四本の腕と蜘蛛の胴を持つ巨人が消滅する。

なんでもどっかの世界から紛れ込んだ魔神だとかなんだとか。

「よっ、と」

肩に大鎌をかつぐ。

「あっけないなあ」

ぽつりと呟いて、大地に開いた直径十メートルはありそうな大穴を眺める。

うふふ。

一週間くらい特訓したら、結構この大鎌使えるようになったぜ。

とりあえず恐ろしく使い勝手がいいことは把握した。

だってやろうと思ったこと、なんでも出来るんだもん。

今みたいに炎を出すことが出来れば刃を伸ばすことなんて朝飯前だし、空間だって切り裂ける。

なんてチート武器。

未だにどういう原理で私これがこれを取り出せるのかは分からんけれど、とりあえずそういうものだとな納得している。

「さて、ギルドに任務完了の報告に――」
「あかなあ」

そんな声が聞こえた――次の瞬間。

私の背後に、いつの間にか魔神がいた。

——あれ、消滅させたはずなんですけど？

「腐っても魔神。消滅させたくらいで素直にやられてくれるわけないやろ？」

つか、なんだこのエセ関西弁は。

どっから聞こえてるのさ。

声の主を探す暇はなかった。

魔神が私に腕を振り下ろして来る。

それを大鎌で切り落とすが、一瞬で腕は再生してしまう。

「そいつ倒したいなら、せめてこんくらいはしとかんとなあ」

不意に、視界の隅に火の粉が生まれた。

火の粉は徐々に大きくなり、あっという間に巨大に膨れ上がる。

その炎の中から一つの人影が現れた。

真っ赤な髪の男性だ。

その人が、人差し指を魔神に向ける。

「運がなかったなあ……さいなら」

彼の指先が、光の粒子に変わる。

あれって……前にもどっかで見たような……。

——一条の光が、魔神の胸の真ん中を射ぬいた。

そこから、魔神の身体を金色の炎が包んで行く。

刹那……なにかが起きた。

なにか、とした表現できない。

眩い光とともに熱風が吹き荒れて、気付けば魔神の身体が消滅していた。

「……ぽかーん」

思わず口でいっちゃうくらいにはぽかんとしてしまう。

「な、なんでさ」

「コツはなあ、とりあえずぶっ飛ばすことや」

笑いながら、男性が私の方に歩いてきた。

「そんなこと聞いてないし……ってか誰？」

「おう、ワイはツイルフゆーもんや。よろしゅうな、棘ヶ峰ちゃん」

「え、なんで私の名前……」

「ワイら教員の中じゃ有名やで。いろいろとなあ」

……あ、この人先生なの？

にやにやと笑いながらツイルフさん……先生が私の顔を覗き込んできた。

「せやけど、まだまだ未熟やなあ。使いこなしておらん」

その目が、私の大鎌を見た。

「武器の形で、なんてケースは初めてみるなあ。まあ、そんなだけ不完全で不安定にやっとなることか……逆にようそれでそこまで持ってたもんや。器用ととるか不器用ととるか……」

この口ぶり……。

「私の大鎌がどういうものか、知ってるんですか？」
「まあなあ。今のワイの攻撃と同じ性質のもんやし」
「へ？」

それって、さっきの魔神を消し飛ばしたやつ？

「そうなんですか？」
「まあなあ」
「……」

うむ、ここは一つ、あれだな。

「師匠！」
「おおぅ!？」

ツイルフ先生の手をとる。

「な、なんや!？」
「私にこの力の使い方を教えて下せえ!」

ツイルフ先生の口ぶりからして、私の力はまだまだ……。
なんかそれは気持ち悪い。中途半端とかマジ勘弁。

今の力でも十分だけど……いや、やっぱりこの世界のパワーバランス考えると不十分か？

まあどっちでもいいや。

とにかく、どうせなら完璧に使えるようになりたいじゃない！人間だもの！ ひいろ。

「あー」

ツイルフ先生が頭を掻く。

「それはどうにも、ワイに教えられるものやないなあ……《顕現》は、それぞれ使えるようになる切っ掛けがないと……」

「《顕現》？」

「ん、知らなかったか？ この力はな、そう呼ばれてるんや。自らの想いを顕現させる力……自分という存在によって世界を圧倒する、そういう力としてな」

「……想い？」

「つまり、考えたことは何でも出来る、っちゅーことや」

「え、なにそれ」

どんなチートだよ。

世界滅べ、って考えたらやれちゃうわけ？

出鱈目にもほどがあんぞ。

「まあ、その想いを自分自身で信じ切らなきゃならんし、そう簡単じゃないけどな。それに、欠片でも不安や迷いがあれば、それも顕現させてしまうんや」

「あ、そうなんだ……それは確かに」

マイナスもおっきいな。

それってつまり「もしかして自分、この勝負勝てないかなあ」って冗談交じりに考えたらアリンコにも負けるってことでしょ？

うわあ……シュール。

「で、この力は想いの問題やから……教えられて使えるようになるもんでもないんや」

「なるほど……」

自力でなんとかしないといけないわけか。

……どうすればいいのか皆目見当もつきませんな。

「ま、いざって時には使えるようになるやろ」

ぼん、とツイルフ先生が私の肩を軽く叩く。

「気長にやり」

「……はあ」

私、気が短いほうなんだけどなあ。

焦らされるのは好きじゃないの！

焦らしたいの！

あふん！

「……アホな顔してるで？」

「そんな馬鹿な」

こんな美少女捕まえてなんて失礼な。それでも先生ですか。

「ま、そんなじゃワイはもう帰るわ。あ、依頼報酬はワイのもんやからな？」

「え、なんで！」

「そりゃワイがとどめ刺したんやもん。しつとるやろ、ギルドの依頼は早い者勝ちなんや」

「うえ……」

確かにそうだけど……でもお。

「……今晚のごはんを、食べるなど先生はおっしゃるのですか？」
「我慢し」

笑顔で言われた！

くっ、まあエログッズを買いすぎて有り金全部消費した私も悪いけどさあ！

「ここは最低でもおごる場面では！？」

「金と女の問題にはシビアにいかんとなあ」

あっはっはっ、とツイルフ先生が笑う。

「甲斐性なし！」

「おうわっ！？」

大鎌をツイルフ先生の首に叩き込む。

もちろん学園の教員ならこれくらいは防げるだろうと見越しての行動——なのだが。

すぱっ。

って音が聞こえそうな感じに、ツイルフ先生の首が飛んだ。

お………？

「……おお」

あたったぞ！

いえーい！ 首とんだっ！

「刈ったどー！」

「ってなにアホぬかしとんねん！」

ばしん、と首無しツイルフ先生の手が私の肩を叩いた。

ちなみに声は宙を舞う首から聞こえてきました。

重力に引かれて落ちてきた首をツイルフ先生の首から下が受けとめる。

なんだこの絵。

そしてツイルフ先生の首がドッキングして、切断面から炎が噴き

出す。

「まったく、あぶないやつやなあ」

呆れたようにツイルフ先生が私を見る。

ツイルフ先生は首をこきこき鳴らす。

「……よく生きてますね？」

「お前が言うな」

「全くその通りで」

「……彼は、よほどのことがない限り死にませんよ」

一陣の風が吹き抜けた。

そして、いつからそこにいたのか。

一人の女性がツイルフ先生の横に立っていた。

碧が少し混じったような銀髪が揺れている。

「はじめまして、棘ヶ峰緋色。私はナワエと申します。ツイルフと同じく、学園で教員をしています」

「ああ、これはどうも」

ぺこりと頭を下げられたので、こちらもぺこり。

「ようナワエちゃん。遅かったなあ」

「貴方が先走りしすぎなのです……追いついてみれば、生徒一人に夕食を奢ることを渋っていますし……まったく、そのくらいの懐の深さを見せてもいいのではないですか？」

「えー」

すばつ、と。

突然ツイルフ先生の首が飛んだ。

わ、私は今度はなにもしていないぞう！？

恐らく、ナワエ先生がなにかしたのだろう。

「まったく……仕方ない。では棘ヶ峰緋色。私が夕食を奢りましよう」

「マジですかっ！？」

うわ、こんな綺麗な先生に食事に誘われちゃった！

もしかして私、今夜は寝られない！？

きゃっ！

「え、ナワエちゃん奢ってくれるの？　こりゃありがたい話やなあ」

首をくっつけ直したツイルフ先生が笑顔になる。

その笑顔に対し、ナワエ先生は冷たい視線を返す。

「なにを言っているのですか？　誰もあなたに奢るなどとは言っていないですよ？」

「……えー」

「というか貴方はジャンクフードでも食べていればいいでしょう。それでは棘ヶ峰緋色、なにが食べたいですか？　特に要望がないのであれば、私の行きつけにでも」

「あ、じゃあナワエ先生におまかせで！」

満面の笑顔で言う。

奢ってもらうんだし、スマイルは大放出ですよ。

「なんや、ワイやってちよっと悪ふざけしただけやないか」

「それでは棘ヶ峰緋色。行きましようか」

「あ、緋色でいいですよ」

「そうですか？　それでは、緋色と」

「それで、行くのってどんな店なんですか」

「私の知り合いがやっている店で、少し値段は張りますが、味は間

「違いありませんよ」

「そうなんですかー」

「ワイは無視か!？」

なんか聞こえるけど緋色知らない。

晩ご飯奢ってくれる綺麗な女教師と、なにも奢ってくれないエセ関西弁男教師なら、どっちが優先順位高いかなんて決まってるしね
1。

「ちょ、マジ無視!？ ネタやないの!？ ねえ、ねえってば!？」

プレゼントはっ！

「どう、緋色。学園には馴染んできた？」

ナユタに誘われて、私は商店街に来ていた。

もちろんソウも一緒だ。

「うん。まあ、そこそこ」

「そこそこ、か」

「そこそこさ」

ここにきて二週間くらい……。

いきなり変わった生活環境に馴染むには、まだもうちょっと時間が欲しいところだ。

だってさ……。

「私、未だに商店街に武器屋とかあると違和感感じるもん」

この商店街、防具屋とか呪物屋とか、普通にいろいろな意味わかんない店があるんだよ。

もうね、なんだそりゃ、って感じですよ。

とりあえずこんな商店街に違和感を感じなくなったら、私もようやくこの学園に馴染んだということになるのだろう。

この間ちよつと覗いたら、十メートルもある大剣とか、厚さ三十センチの全身鎧やら、口が二つある頭蓋骨とか、いろいろあったし……。

「そっか……まあ、でもそれなりにやれてるようだなによりだよ。ギルドの方でも、結構ハイペースで依頼を達成してるって聞いているよ?」

「いやあ、まだDランクだしねえ」

「この短期間でそこまでいけるだけすごいよ」
「そう?」

そんな褒められると照れちゃうなあ。

ぐふふ。

「そんな頑張ってる緋色には、なにかプレゼントが必要かな?」
「え?」

プレゼント?

マジで?

かわいい女の子からのプレゼント？

……おお！

「やったね！」

「あはは、そう喜んでもらえると贈り甲斐があるなあ」

笑んで、ナユタが視線をある方向に向けた。

「それじゃ、あの店でなにか選んでこようかな」

ナユタが見ていたのは、小さなお店。

ちょっとしゃれた感じの店構えで、看板には「エーメンス」と刻まれている。

「ここは？」

「アクセサリーショップ。それなりに有名なんだ」

「へえ」

ナユタに先導されて、私は店の中に足を踏み入れた。

「すご……」

店内には、所せましと様々なアクセサリーが飾られていた。

しかも数が多いだけじゃない。その一つ一つが、おそろしく美しい。

私は正直装飾品とかには詳しくないんだけど、それでもどのアクセサリーも一流のものなのだろうと推察出来た。

「いらっしゃーなんだ、ナユタか」

店の奥、カウンターに座っていた女性がナユタを見た瞬間に力の抜けたような表情をする。

青く煌めく長髪に、幾重にも黒い布を重ねたような服を纏った女性だ。

「なんだ、って……いいの、そんな態度で。せっかくなにか買おうと思ってきたのに」

「あら、そうなの？ それなら高いのを買っていきなさい。財布には余裕があるでしょう？」

「……まったく。ところで、ウィヌスさん一人？」

「ええ。ティナは留守よ」

「そうなんだ」

言いながら、ナユタが店内を物色しはじめる。

「ねえ緋色、どんなのがいい？」

「んー、任せた」

というか私そこまでセンスあるほうじゃないし、ナユタに任せただけが安心できる。

「うーん。ソウはどんなのがいいと思う？」

「……そうですね。無難に選ぶのであれば、この辺りではないでしょうか？」

問われ、ソウはネックレスが並べられた場所を指す。

私へのプレゼント選びをしてくれている二人を眺める私の横に、いつのまにか気配があった。

見ると、カウンターにいた女性が立っていた。

この学園の人はどうして唐突に隣にいたりするのだろうか……。

ウィヌスさん……って呼ばれてたっけ？

「なに？ ナユタの彼女？」

ちよつと意地の悪い目で、ウイヌさんが尋ねてくる。

「え……い、いやいや！　そういうのじゃないですよ！？」

いきなり言われて、ちよつと動揺する。

「ふうん……ナユタってあなたみたいなのがタイプだったのね」

だから違うっちゅーに。

じー、つとウイヌさんが私の顔を見つめてくる。

「な、なんですか？」

「……いや。なんていうか、貴方はあれよね」

「あれって？」

「鈍感なくせに、むやみやたらに女をたらしこむ顔してるわ」
「失礼な！」

いきなりなにを言うかと思えば！

私はそんなことしませんよ！？

そして鈍感でもない！

……何故だろう。今どこからか「ははっ、この人なに言っちゃってるの？」って意思を感じたんだが。

「なにを根拠にそんなこと言うんですか」

ぷんぷん！

「なにつて………実験？」

「実験……？」

「そ。私の男がそういう感じだから。まあ、いい男であることに間違いはないし、仕方ないと言えば仕方ないのでしょうけれどね」

……あ、今私もしかして惚気られましたか？

うわー！

「ま、問題はいつまでもヘタレが抜けないところかしら」

「はいはい、ごちそうさまですー」

くっそう、幸せ空気巻き散らかしやがって。

リア充爆発しろ！

「ウイヌスさん」

「あら、どうやら決まったようね」

ナユタの声が聞こえた次の瞬間、ウイヌスさんの姿はカウンターに戻っていた。

……ここは瞬間移動を多用しなくちゃいけない、って法律でもあるのか。

まあ、それはいい。

それよりもあれだ。

ナユタはどんなものを買ってくれたのかなー。

うきうきだ。

+

「はい、これ」

店を出たところで、ナユタが小さな紙袋を渡してきた。

「中、見てもいい?」
「もちろん」

ナユタの許可を貰って、私は紙袋の中身を取り出した。

中に入っていたのは、翼をデフォルメしたような細工のついたネックレスだった。

シンプルだけど、なにか惹かれるものがある。

間違いなくいいものだ。

値段を聞きそうになって、やめる。そういうのはマナー違反だ。

「ソウと選んだんだ。気に入ってもらえた？」

「もちろん！」

これを気に入らないとか、どんだけって話だ。

「ありがとね、ナユタ、ソウ！」

「喜んでもらえたならなによりだよ」

「私は大したことはしていませんので」

うーん、しかしほんとにいい感じのネックレスだ。

「つけるね」

「どうぞ」

断ってから、私は首にそのネックレスをかけた。

「どうかな？」

「似合ってるよ」

「ほんと？」

似合ってる、か。

んふふー。

なんていうか、嬉しいなー。

これ、大事にしよう。

「それじゃ、ナユタ！ 次はどこに行く！？」

今日は一日楽しい気分で過ごせそうだった。

放送はっ！

「やはー、小夜……って、おろ？」

風紀委員会外特別支援殲滅執行部の部室を訪れた私は、室内に小夜ともう一人、見知った顔を発見した。

「茉莉じゃん」

「……ん」

「入る時はノックくらいしてください」

無表情の茉莉に対して、窓際に座っている小夜が冷ややかな目を私に向ける。

そんな視線にぞくぞくしちゃうっ！

まあ冗談ですけど。

……ま、マゾじゃねえしっ！ 本当だし！

「次からは気をつけるよ」

言って、並んでいたパイプ椅子の一つに腰を下ろす。

「ちょうどいい……緋色も、聞いていく」

茉莉がそう口を開く。

「うん？ なにを？」

「最近の不穏な動き」

「不穏……？」

これまた、なんか嫌な響きだ。

「どういうことですか？」

「……最近、というわけではないけれど……一般生徒の間で、特別クラスへの不満が溜まってる」

「不満？」

小夜がちらりと茉莉を見て、眉を寄せた。

「どういうことですか？」

「……特別クラスだけが最前されていると、一般生徒は感じているみたい」

「……なるほど」

頷く小夜だが、私にはよく分からない。

「別にそれっておかしなことなの？」

首を傾げながら尋ねる。

「特別クラスって、優秀な生徒を集めてるんでしょ？　それが最良
されても、特権でしょ。別に不満を抱かれるようなものじゃないと
思うんだけど」

「それは持てる者の台詞でしょう」

溜息をつきながら小夜が言う。

「自分で言うのもなんですが、私達は本当に特別なのです。それな
りのものを持って、それなりの力を持って、それなりの理由を持っ
て、今この時まで生きて、特別クラスに所属している。私達は、そ
れなりのものを最初から持っているのです」

「それなり、ねえ」

例えば才能とか？

……まあ、ぶっちゃけその辺りは否定しないけど。

でもそれだけじゃない。

私だって試練で延々自分と殺しあってようやくここまで辿りついたんだ。

他の特別クラスの人だって、私と同じようなものではないのだろうか。

「この学園には、特別クラスの者より努力している者はいる。中には、特別クラスの者並みの実力を持っている者も、少なくともは」
「へ？」

あれ、そなの？

私はてっきり特別クラスって突出した生徒の集まりなんだと思ってたんだけど……。

「……知らなかったようですね」

「め、面目ない」

そうなんだ……へえ。

……あれ？

「それじゃあ特別クラスって、なにを基準に選ばれてるの？」

「……」

そこで、小夜は口をつぐむ。

私は代わりに茉莉に視線を向けた。

「……正直、私にもそれは知らない」

えー。

担任さんも知らないんですか。

それっていいのだろうか……。

「……ごめん」

「あ、いや。謝るほどのことじゃないよ？」

……ただ、特別クラスってのは、思ったよりも複雑らしい。

てっきり強い人集めただけのものだと思ってたのになー。

うわー、もしかして私、とんでもないところに所属しちゃった？

厄介事の予感がする。

「……それで、その不満とやらは、今どのように動いているのですか？」

小夜が話題の続きを促す。

「今のところは、学園側への特別クラス撤廃の活動。でもこれは、理事達が抑えてくれるから問題ない」

「へえ……それなら心配ないんだ」

「あなたは馬鹿なのですか？」
「うぐっ」

さらりと小夜に罵倒されて、胸の奥が熱くなった。

ああっ、なにこの痛み。

き、気持ちい——げふんげふん。

いけない。

私はマゾではない。

ノーマルだ。

どっちかと言えばサドだ。

……ま、まさか私の内にはSとMが同居しているのかっ!？

「いいですか。人というのは、行動を抑え込まれると、別の方向に向かうものなのです。時として、さらに強引に」

小夜が目を細める。

「この場合、訴えが通らないとなれば……次に考えられるのは、実力行使でしょうね」

「へ？」

実力行使？

またそんな、物騒な話があるわけが……ある、わけ、が……。

……ありそうだ！

だってこの学園だし！

いきなり特別クラスの面子と一般生徒から選出された面子で総当たり戦やるぞ！

みたいな展開になっても不思議じゃない！

「で、でもそういうことになったら学園側でなんとかしてくれるんじゃない？」

「そういうデリケートな問題に学園側が手を出すと、余計に状況を悪くしかねない」

茉莉がぽつりと言う。

……つまり、学園側に期待するな、ということですかい？

そんな殺生な。

「まあ実際にどうなるかは分かりませんが、気をつけるに越したことはないでしょう。この話、他の特別クラス……特に、アイリスには？」

なぜアイリス、と考えてすぐに答えは出た。

あの性格だしなあ。

こないだの学食でもやらかしてたし。

……ああ、よく考えればあの時のあれも、特別クラスへの不満からきてたんだなあ。

でも私的にそれを言うならエレナも十分やばいと思うけど。だってあの人、腹黒だし。腹黒だし。大切なことなので二度言いました。

改めて、特別クラスの面子を思い浮かべる。

私。

ナユタ。

アイリス。

エレナ。

スイ。

小夜。

それと担任の茉莉。

……なぜだろう。

クラスメイトと担任の顔を思い浮かべただけで悪寒が止まらない。

やっべえ滅茶苦茶不安だ。

頭を抱えたい衝動に襲われていると、不意に校内放送のピンポンパンポーンという音が流れた。

あ、この学校で校内放送流れるの初めて聞いたかも。

『いきなりの放送失礼する。ゼファールローゼンベルクだ』

そんな声が聞こえた。

ゼファーⅡローゼンベルク？

んー？

どっかで聞いたことあるなあ。

『今日、この放送を流した理由はただ一つ……私達の要求を学園全体に知らしめるためだ』

おや、なにやら嫌な雰囲気。

というか背筋に汗が……。

あー。

やっべ。

思い出した。

ローゼンベルクって、あの食堂でアイリスと問題起こした人じゃん。

あの、特別クラス大っきらいです、って顔してた。

『我々はこれまで、ずっと疑問に感じていた。特別クラスという存在について』

ほらね。

あっはっはっ！。

『私はここに断言しよう。特別クラスとは、学園の最肩に他ならな
いと！』

「派手にやるものですね」

眉間をおさえ、小夜が呻くように呟く。

『故に、私は要求する！ 特別クラスの解散を！』
「言っちゃったよ……」

もうやめようよ！。同じ学園の生徒だろ！。アイラブ平和！ ノ
ーモア闘争！

『しかし言葉だけでは学園側も頷いてはくれない。そこで、私はこ
こに提案する』

私の本能が警鐘を鳴らしまくっていた。

絶対まずい。

いけないことが起きるぞ。

『特別クラスの担任を含めた七人と、我々が選抜した一般生徒七人による対抗戦を行い、それに勝利した方の要求を敗北した方が受け入れる！　それでどうだ！』

ほらきたあー！

やっぱりね！

そんなことだろうと思いましたよ！

……うわあい。

もうなんか憂鬱だねえ。

『再度言う』

天井を見上げる。

他の皆はこれをどんな気持ちで聞いているのだろうか。

『特別クラスよ、覚悟しろ！　私達は、貴様らを認めん！』

アイリスあたりはニヤニヤしてそうだなあ……。

あ。あとで一回軽く殴ろう、そうしよう。

日程はっ！

殺す。

殺す。

殺す。

意思など持っていられない。

感情など持っていられない。

壊れてしまうから。

ああ、なんて残酷なことだろう。

殺したくなど、ない。

けれど残酷なこと。

殺さなくてはならない。

悔しいけれど。

悲しいけれど。

大切なものは、順番づけされる。

だから、私の大切なものを守るために、大切でも、殺す。

そう決めても、やっぱり辛すぎるから。

だから、機械になることを選んだ。

私のこの身体はただ殺すという作業をこなすだけのもの。

殺す。

殺す。

邪魔なものを排除して、殺しに行く。

あの子達は、どこ？

あの子達は、どこにいるの？

殺しに行こう。

愛おしくとも、愛おしくとも、拾うことのできない、彼女達を。

私はきっと、最低なのだろう。

本当に——最低だ。

+

「——っ！」

飛び起きる。

呼吸はひどく乱れていた。

「っ……な、に……」

胸を抑える。

心臓が張り裂けそうなくらいに激しく鼓動をきざんでいた。

「……今の」

いつか見た夢に、すごく似てた。

なんなの、この夢。

すごく、嫌な感じがする。

「……うう」

やめよう。

所詮は夢だ。

考えたところで、なにか分かるわけでもない。

だったらきれいさっぱり忘れてしまったほうが、よほどいい。

そう。

悪夢なんかとうとうじするの私のキャラじゃない。

私はいつでもどこでも面白おかしく愉快に奇天烈に、そして余裕で。

そういうキャラでしょうが、私ってやつあ。

棘ヶ峰緋色ってやつあね。

あはっ。

+

——ゼファー君、独身からの熱いメッセージが全校生徒どころか学園世界全土に届けられた翌日。

私は初めて、特別クラスの教室というものを訪れた。

教室は、至極一般的な学校の教室だった。

……うん、そうだよね。

机があって、椅子があって、教壇があって、教卓があって、黒板

があつて……これが教室つてもんだよね。

うんうん。

……なんで特別クラスだけ教室がまともなんだろう。面子はアレなのに。

というわけで、教室に六つ置かれた机に特別クラスに所属する生徒達が座っていた。

つまり私、ナユタ、アイリス、エレナ、スイ、小夜である。さらに教室の後ろには静かにソウが立っていて、教壇の上には茉莉が立っている。

「それで、どうするのだ、茉莉」

アイリスがタメ口で茉莉に問う。

こら、彼女あれでも先生ですよ！

私も敬語使っていないけどね！

てへっ。

「どう、とは？」

「回りくどいのはいい。こうして集められた理由は全員承知しているだろう？」

言って、アイリスが教室にいる面々を見回す。

「……そうですね」

エレナが頷いた。

「先日の、ゼファールローゼンベルク、でしたか？ 彼の宣戦布告について、ですよね？」

「まあ、常識的に考えてそれ以外ないでしょ」

エレナの言葉にスイが同意する。

……ですよねえ。

「面倒なことするよね、その彼も」

ナユタが苦笑しながら言う。

また、ナユタンはいつも通りだねえ。

私を見てみなさい。

小心者の私はこれからの学園生活がどうなるのかと戦々恐々ですよ。

おっほっほっ。

……ごめん、実は割とそこまでもない。

ぶっちゃけ、どうでもいっかなー、ってのが本音だったり。

諦めてるとか他人事みたいに感じてるとかじゃなくて……なんだろね。

この面子と一緒にいて心配ごととか、馬鹿馬鹿しくない？

ねえ？

「それで、どうするのですか？ あの話、受けるのですか？」

小夜がどことなく面倒くさそうな雰囲気を漂わせながら茉莉に質問する。

全員の視線が茉莉に集中した。

「……理事長と、理事五人からの伝言がある」

茉莉がそう口を開いた。

理事長ってのは、ツクハさんだよね。

で理事はこないだのナンナ理事とかのことか。言い方からすると、複数いるっぽい。

まあこれだけでかいところだし、理事が何人もいてもおかしくはないか。

って、ありゃ？

「ん？」

なんか……おかしいな。

私以外の面々の顔がちょっと青くなっているような。

「その面子からの話なんて聞きたくないわ」

スイがそう嫌そうな顔をする。

アイリスとエレナも似たような顔だ。

というかエレナは「うわあ、きたよ面倒事。ウゼエ」みたいな顔してるんだけど。あの、いつものいい子ちゃんな顔はどこぞへ？

小夜は目を瞑り眉間に寄った皺を揉みほぐしている。

でソウは天井を仰いでいて、ナユタは……なんか疲れた顔だ。

皆どうしちゃったんだろ？

「緋色、どうして平然としてるのさ」

ナユタがそう尋ねてきた。

「いやいや、そっちこそなに顔青くしてるの？」

「……ああ、そっか。緋色は知らないのか」

ナユタが溜息を吐く。

「ツクハさんはともかくとして、うちの理事連中は、その……うん。濃いんだよ。いろいろと。それでねえ……あの人達からの伝言かあ、絶対まともな内容じゃないよ」

嘆くようにナユタはそう机に頬杖をついた。

うーむ。

ナユタにここまで言わせるとは、一体何者なのだろうか、理事の

人達は。

会ってみたいような、会ってみたくないような。

「伝言は三つ」

茉莉が指を三本立てる。

「まず一つ目は、ローゼンベルクの挑戦を受けること」

指が一本減る。

「二つ目は、負けるという面倒なので、絶対に勝て、ということ」

さらに指が減る。

「それで最後が……もし負けたら、おしおきに……本気の全講師との戦争やらされる。三日間耐久で、瀕死になるまでリタイア無しで」

茉莉が手を下ろし、俯く。

教室中に、一気に思い空気が発生した。

……うわぁ。

え、なに。

負けたらそのままバッドエンドルート？

全講師ってこたぁ、あれですよね。

ライスケ先生や臣護先生、さらには佳耶先生とかもくるわけで。

ガチですか。

……あれ、なんでだろう。目から汗が……。

「……試合は、今日含め三日後から、一日に一組ずつ、やるって」
「――！」

ばん、と。

机を叩いてアイリスが立ちあがる。

「特訓だ！ エレナ、スイ！」

「ええ、ええ！ 姉さんにスイ！ 三日で《顕現》をマスターしてもらいますからね！」

「やむをえないわ。エレナ姉さん……殺す気で特訓して。負けるよ

り、その訓練のほうが、絶対に楽だし……！」

おお、三姉妹が燃えている。

小夜は静かに席を立ち上がり、そのまま教室を出ていく。

だがその背中には、しっかりと静かに炎が灯っていた。

「……うわぁ、どうしょ」

思わずそんな言葉が口から出た。

チーム戦だし、私足引っ張れないじゃん。

「大丈夫だよ、緋色」

ナユタがそう声をかけてきた。

「緋色以外の全員が勝てば、問題ないんだから」
「そ、そりゃそうだけど……」

でもなあ……それでも、なんかしないと。

「ね、ねえナユタ、《顕現》の訓練とかしてくれない？　なんかないの？」

「え……？」

ナユタがきょとんとして、次に苦笑した。

「ごめん、緋色。普通の訓練ならともかく、《顕現》はねえ……人に教える教わるってものじゃないんだ」

そういえばいつぞやの似非関西弁もそう言っていたなあ。

「じゃ、じゃあどうしよう……」

「まあ、やれるだけやってみたら？　そうだなあ、とりあえずこのクラスの一人一人の訓練に付き合ってみるとかは？　もしかしたら、なにか掴めるかもよ？」

「おおっ」

ナイスアイディアですよ、ナユタさん。

残り三日か……。

おし！

「そんじゃとりあえずナユタさん！　まず訓練突き合わせてくださ
いッス！」

「了解」

ナユタが笑顔で頷く。

「それじゃあ、広い場所に移ろうか」

酷いのはっ！

本当に後悔しましたありがとうございます。

今日一日を振り返って、もはや私は賢者モード。

邪念を抱く余裕すらありませんわー。

……は、はは。

自宅の畳に寝転がり、天井を見上げつつ溜息を吐く。

あのあと……ナユタの言葉通り、皆の訓練にちっと入ってみただけど……うん。

結果は、もう言うまでもないと思うんだ。

あれは、酷いよ。

+

荒野がひたすらに広がっている教室の中。

「それじゃ、軽く命の危険を感じて見ようか」

朗らかにナユタがそう告げた。

「……え？」

今の私の顔を是非とも全人類に見てもらいたい。おそらく全員が全員十点満点で間抜け面という評価をくださることであろう。

「あの、ナユタ？　今、なんて？」

一応、聞き返してみる。

「だから、死にかけたりしてみよっか、って」
「いやいやいや」

思いきり首を横に振るう。

「何故にそうなる！？」

「え？　だって《顕現》を使いたいんだよね？」

「そりゃ、まあ」

聞くところによると顕現ってのは凄いらしいし？

実際ちろっとこれまでも何回か見て来たけれど、凄かったし。

私の大鎌はそれが未完成の状態だっていうから、どうせなら完成させたいし。

「……あ」

そこまで考えて、ふと思い至る。

「そういえばナユタと初めてあったとき使ってたあれって、
《顕現》？」

あの異世界の破壊神だかなんだかを消滅させたやつだ。

馬鹿みたいにでかい槍とか出してたやつですよ奥さん。

「うん、そうだよ」

「はあー、やっぱり」

うん、やっぱり凄い力みたいだ。

「……で、どうして私に命の危険を感じろという話になるのですしょうか？」

「《顕現》って、大体がそういう危機的場面で使えるようになる場合が多いから、かな」

「危機的場面……」

あー、そりゃそうか。

いわゆるテンプレってやつ。

命の危機に、今私の新たなる力が目覚める！

魔法少女、リリカル緋色、始まるよ！

嘘です。

……閑話休題。

「というわけで、緋色。やってみようか？」

にっこりナユタがスマイルを浮かべる。

「――」

ぞくりと背筋を冷たいものが伝う。

これはやべえ笑みだ。

本能的に感じた私は、すぐに離れた所にいるソウに視線をやった。

「そ、ソウ様……！」

困った時のソウ頼みである。

しかし、知っているかい、私よ。

こう言う時のソウ頼りってのはなあ……。

「頑張ってください」

——成功率がめっちゃ低いのですわよ！

うぎゃあああああああああ！

ソウがさらに離れていく。

待って！

ここで見捨てられたら私、死んじゃう！

「大丈夫、殺しはしないから」

殺しは、ってところがもう駄目！

あと心読むな！

「それじゃ緋色」

ナユタが近づいてくる。

死神の足音というのはこういうものか。

へ、へへっ。

——そして私は拷問じみた訓練を受けることになった。

そこについては、もう、語りたくもないし、思い出したくもない。

私、死んじやうってばあ……。

+

ナユタとの訓練に嫌気がさして逃げだす。

校舎内を走る。

通りがかったアイリスに捕まる。

……三行で今の私の絶望っぷりがわかりただけだろう。

さて。

気を取り直して現状の説明といかせていただこう。

場所はいつぞやの戦争ごっこマニア部の部室。

日本の首都、東京が壊滅し、盛大に燃えあがっております。

その様はまさに地獄絵図。

そんな東京上空に私はいた。

なんでここにいるか、なんて今更尋ねても無駄だろうと分かっているのに、あえて聞かない。

どうせ気分とか、そんな感じのもので私の迷惑を考えもせず引張ってきたに決まっている。

だってアイリスだもの！

「とりあえず私はある程度本気を出すので、貴方達はさっさと私の本気を引き出せるよう頑張ってください。まあ、つまり《顕現》を使えるようになれば、ということなのですけれどね。《顕現》は《顕現》でしか越えられませんから……ちなみに、流石に完全な《顕現》まではしないので安心してください。したら死んじゃいますし」

おい今なんか最後ちょっと不吉なこと言わなかったか？

私はアイリスとスイに並んで、エレナと相対していた。

エレナがゆっくりと右腕を上げる。

その腕が、光の粒子になって弾けた——かと思った次の瞬間。

そこに、透明な、まるで水晶で出来たような美しい弓を手にした、青い帯が絡みついた右腕が現れた。

「腕一本……まあ、この程度で十分でしょう」

悠然とエレナが言って、弓を私達に向ける。

それだけで私は……敗北しかけた。

恐ろしい。

とんでもなく、恐ろしい。

こんなの勝てるわけがないじゃないか。

あれは戦える相手ではない。

そう、私の中で、なにかが叫ぶ。

隣を見れば、アイリスとスイもまた自分の中に生まれた恐怖心を感じ、それになんとか抗っているようだった。

「……」

拳を握りしめる。

「——こ、の！」

どうにか声を振り絞りながら、私は未完成の《顕現》である大鎌を取り出した。

その大鎌に、三人が目を丸くする。

「あら？」

「え？」

「……貴方、それ」

スイが私の大鎌を指差す。

「え、これがどうかした？」

「どうかしたって……それ、《顕現》ですか？」

「うん。まあ不完全なんだけどね」

言いながら大鎌を素振りする。

眼下の東京の街の三分の一ほどが消し飛んだ。

「……ず、ずるいではないか！」

「おおっ!？」

アイリスが突如叫ぶ。

「いつの間にそこまで使えるようになったのだ！」

「いつの間になって、この間？」

「あっさり言うな！」

「えー」

だったらどうしろってのさ。

使えるものは使えるんだから仕方ないじゃん。

「くっ……!」

悔しそうにアイリスが大鎌を見つめる。

「スイ！ 私達もさっさと使えるようになるぞ！」

「……そうね」

アイリスとスイが頷き合う。

「それとルール変更だ！」

「え？」

あれ、なんか嫌な予感がしますよ？

傲慢じゃないですけどこの学園にきてから嫌な予感がはずれたことがありません。

「私とスイ対エレナ対緋色！ 緋色はもうここまで出来るんだから、チーム組む必要なんてないだろ！」
「えー？」

ちなみに。

このルールで始めた直後、私はエレナとアイリスとスイにフルボッコされることとなった。

エレナは「一番危険なので」と言い、アイリスとスイは「なんか悔しかったから」と言った。

……ちくしょー！

十

この流れを説明するまでもないのだろうけれど、一応説明しておこう。

例の三姉妹のもとから逃げだす。

茉莉にばったり会う。

問答無用で引きずられる。

へへっ。

私あ、もう駄目だ。

目の前には、茉莉と、そして小夜がいた。

場所は砂漠。もちろん教室だ。

もうね、バリエーションありすぎ。

きっとそのうち宇宙空間とか出てくんだぜ、これ。

「で、どうして私が彼女を鍛えなければならいのですか？」

「……緋色が《顕現》を使いこなせば、全体の勝率が、あがる」
「それはそうですけれど」

小夜がいかににも迷惑そうな顔を私に向ける。

「……」

そんな目で見ないでよ。私だって望んでるわけじゃないんだし。

「……はあ、まあいいでしょう」

え、いいの？

「私や茉莉は《顕現》は既に使いこなせていますし……」

「え、小夜と茉莉ってもう《顕現》使えるの!？」

「ええ」

「……ん」

あっさりと小夜と茉莉が頷いた。

……でもこの二人なら使えてそうだなあ。

こう、雰囲気っていうの？

なんか納得。

「……そっか」

それじゃあ……。

私は大鎌を手の中に出現させる。

刹那。

「どりゃあああああああああああああああああああ！」

私は小夜や茉莉が戦闘態勢をとる前に切りかかった。

「っ、なにを……！」

焦った口調の割に、小夜はあっさりと攻撃を避ける。

茉莉も動揺だ。

「ふ、ふふ、ふふふふふ！」

私だって学習するんだ。

このまま流れに身を任せれば、自分がボコボコにされることは分かっている！

ならば！

先にやってやればいいんだよおおおおおおお！

「ふんぬばらあああああああああああああ！」

結果。

駄目でしたっ☆

訓練が終わった頃には、私はボロボロだったそう。

めでたしめでたし。

……ちっともめでたくないよう。

ぐすっ。

+

「……あは、あはは」

あれ、なんだろう。

視界が滲んできちゃった。

「私、頑張ったよね……？」

その言葉を最後に。

私が意識を手放した。

体力の限界っ！

妄想はっ！

地獄のような一日の翌日。

「……明後日、かあ」

呟いて、私は飲むヨーグルトを飲む。

……やっぱりこの表現おかしくね？

飲むヨーグルトを飲む。

ううむ。

どろっとした白い液を飲む。

……いやいや。

………私がやっても誰得だよ。

って自分で考えてて少し落ちこんだ。

「……わ、私にだって需要が」

……あり、ますよね？

べ、別にいいし！

需要とか気にしねえし！

私はいつだってアナザーワンなのさ！

泣いてねえし！

いいもんいいもん私のことを他の美少女達に置き換えてやるから！

そう、例えば……！

+

「ん……」

…。
白い液を口に含んで、ナユタが頬を上気させ、少し苦しそうに…

+

「これはいかん」

思わず鼻息が荒くなってしまった。

「破壊力抜群だな！」

たったの二行でこれとは……おそろしいぜ、ナユタン。

仕方ない。ナユタは諦めて……。

+

くちゅ、という音がした。

「……ふふっ」

ソウが妖艶に微笑する。

「美味しい……」

+

おっといけねえ鼻血が。

ティツシュ、ティツシュ。

ソウが妖艶な微笑とかそれなんてチート？

いいわー。

いいわー。

テンションあがってきたわー。

次いってみましょー。

+

「っ、は……！」

アイリスの口の端が持ちあがる。

そこからは、白い筋が垂れている。

「まだ、こんなものでは足りんな」

アイリスが口の中身を嚥下する。

「もっと……もっと、飲ませろ」

+

うっは。

ばんばん飲ませちゃいますね！

たまらん！

みなぎってきたあああああああ！

+

「こんなの飲ませて、嬉しいんですか？」

見下したような目でエレナがこちらを見下ろす。

「くちゃ……」

エレナが少し口を開くと、そこには白いどろりとした液が……。

彼女は自分の口に人差し指を差しいれると、それをぐちゃぐちゃと掻き混ぜる。

+

エレナさあああああああああん！

エロい、エロすぎる！

あふん！

次だ次いいいいいいいい！

+

「ほっ」

せき込んだスイの口から白い液が零れだして、彼女の掌の上に溜まる。

「う……もったい、ない……」

言って、スイが掌に溜まった液を、一気に飲み込む。

「……っ、……っ！」

+

まさかの健気キャラ！

あのクールなスイちゃんがもったいないって！

もったいないって！

うおおおおお飲ませたい！

もちろん飲むヨーグルトのことだよ！？

はい次いつ！

+

「……これを……」

茉莉が胸元に垂れた白い液を、指でそつとすくう。

その指を、茉莉が舐めた。

彼女の可愛らしい小さな舌が、白い液をすくって……茉莉の咽喉がなった。

「……美味しい」

+

美味しいですかそうですか！

ぐへ、ぐへへ！

ええでんなあ、ええでんなあ！

ニヨニヨが止まらないぜ！

次だ次！ 次に参加ぞ！

+

「貴方は、どうしてこう……」

頬を赤くしながら、小夜が視線を彷徨わせる。

「……いいですよ。飲めばいいのでしょう、飲めば」

溜息をついて、小夜が意を決して、一気に白い液を口に含んだ。

そして、口の端から少し白い液をこぼしながらも、小夜は一生懸命にそれを飲みほした。

「……はあ」

小夜の吐息に、白い液の匂いが混じる。

+

これまたエロいでんなあ！

あひゃひゃひゃひゃひゃ。

畳の上を転がる。

もうイイツ！ これイイわあっ！

だが！

だが皆さん！

これで終わりではなくてよ！

まだデザートが……あるいは真打ちが、残っているではありませんか！

そう！

次イッ！

+

「……ふふつ、えっち、なんだ」

妖しげに笑い、ツクハさんがゆっくりと近づいてくる。

「こんなことで興奮して……でも、私も人のこと、言えないかなあ」

舌舐めずりをして、ツクハさんが白い白濁を口に入れる。

「濃くて……絡みついて……おいし」

ツクハさんの身体が、小さく震える。

「ねえ、見て？」

ツクハさんの指が、ゆっくりと自分自身の太股から、その内側へと移動していく。

さらに、もう片方の手の指は、口元から、首、鎖骨……そして…。

「私も、こんなにえっちなんだ……」

+

「我が生涯に一片の悔いなしぶりやあぶっほうっ!？」

後半鼻血のせいでまともに喋れませんでしたよ。

「おい、緋色……って、なんだこれ!？ 殺害現場!？ ちくし
ようやつら! 緋色を夜討しやがったのか!？ くっ……緋色、お
前の無念はこの私が……!」

どっからかそんな声が聞こえました。

あの……ドアをノックするとか、インターホン鳴らすとかしてく
れませんか？ いきなり鍵壊して部屋に入って来るんじゃないですわ
よ。

現れたのはっ！

鼻血によって演出された殺害現場（笑）の掃除を終えて。

私はアイリスに飲むヨーグルトを出した。

アイリスは「何故これ？」という顔をしながらも、それを普通に飲む。

……まあ、そうだよねえ。

普通に飲んじゃうよねえ。

ちえっ。

「で、というわけで付き合ってくれ」

いきなりそんなことを言われた。

「恋人としてなら」

とりあえずそう返した。

「なに馬鹿なことを言っているのだ。ふざけてないで……訓練に付き合え」

おや命令形になりましたよ。

まったく、やあねえ。

ってか脈絡がなさすぎて素で意味が分からんのですよ。

「いきなりすぎる……どういうことなの？ 説明してよ」

「ふむ。説明しなかったか？」

アイリスは家に来て殺害現場（笑）を目撃して一般生徒陣営に特攻かけようとしたただけだよ。そして私がそれを一生懸命止めたんだよ。

説明のせの字もないってば。

どうして説明したなんて勘違い出来るのさ。

「ふむ……あれだ。エレナがなあ、今日はスイを徹底的にしごく、
というので——」

「しごく！」

「む？」

私の反応にアイリスが眉を寄せた。

……そんな訝しむような顔するなよう。

しごくなんて言われたら反応しちゃうのが緋色ちゃんなんだよ。
分かってくれよ。

「……続き、どぞ」

「うむ……？ まあ、それでな。私はどうしたらいい、と聞いたら
緋色のところにでも突っ込んでくればいいと言ったのだ。だから私
はここに来た」

エレナあ……。

あの子絶対に私に面倒事を押し付けたよねえ？

「……私にも、予定というものがあるんだけど」
「なんだ？」

きよとん、と聞き返された。

「いや。修行っていうか、《顕現》を使いこなせるようにならない
と……」

「ならそれに付き合おう」

「えー」

「なんだ、文句があるのだ」

「いやあ、そういうわけじゃないけどさあ」

実は、昨日気絶する前にライスケ先生に連絡を取っていたのだ。

別に愛の言葉とか送ったわけじゃないよ。

修行に良い場所ないっすかー、って聞いたんだよ。

それで、とある人を紹介してくれるらしいんだ。

なんでも《顕現》を使いこなしている人の一人で、いろんな世界を放浪している人なんだとか。

名前は……なんていったっけ？

イ……イなんとかさん。

確か名前は三文字くらいだった気がする。

で最後が行だったね。

なんかライスケ先生の口ぶりから、結構先生と親しい人っぽかったけど……。

曰く、下手したら死ぬかもしれないけど、そっちのほうが丁度いいんじゃない？ まあよほどのことがないなら死なないって。うん、多分、きつと、そうだろ。

と、素敵なほどに不確定な感じのことをおっしゃられました。

そんな危険人物のところに行くのに、言っちゃんだけど《顕現》もどきすら出来ないアイリスを連れていくのはなあ。

「……危ないんだけど？」

「問題ない。私だからな！」

意味の分からない自信だ。

「……むう」

しかし、この様子からして、引きさがりそうにない。

……まあ、いっかなあ？

死なない、よね？

危なかったら返せばいいんだし。

……うん。

まあいっか。

ライスケ先生が相手の人に約束を取り付けてくれたらしいので、
集合場所である氷原教室に入る。

氷原のど真ん中に、一つ人影があつた。

「――悪い、緋色。私は急用を思い出した」

その姿を見た瞬間、アイリスが身を翻す。

「え？」

アイリスの顔は、青を通り越して土色だ。

「ほう？　まあ、待て、アイリスよ」

その時、教室の扉に奇妙な剣が突き立った。

刀身の色は白と黒が入り混じり、柄は仄かに金色に輝いている。
剣には、水と、そして細い竜巻のようなものが巻きついていていた。

えーっと？

氷原に立っていた人物に視線を向ける。

凄く綺麗な女の人だった。

歳は……よくわからない。

外見だけ見るなら私と同じくらいかな、とも思うけれど、雰囲気はすごく大人っぽいっていうか……なんて言えればいいのかな。

端的に言うと、多分、格が違う、ってことになるのかもしれない。

私の横で、アイリスが涙目になりながら振り返る。

「ひ、緋色、お前はなんという人のところに連れてきたのだ……」

「え？」

えっと、もしかして、お知り合いなのかな？

「……初めまして、だな。棘ヶ峰緋色。噂だけは聞いている。有望株だ、とな。今日はその噂を確かめる意味もあったし、ライスケから頼まれたものもあり、お前の面倒を見てやろう。私はイリア……そこにいる、アイリスの母だ」

――！

――！！！！

――！！！！

重大すぎることなので三度驚きました。

「え、え！？ アイリスの、お母さん！？」

ちよつ、待つ、若すぎじゃない！？

いやこの世界ならアリなのか！？

「早速お前の修行をつけてやる……と言いたところだが」

ちろりとイリアさんがアイリスを見る。

「アイリス。何故お前がここにいるのだ？ なんだ、お前も面倒を見て欲しいのか？」

にやりとイリアさんが笑う。

「い、いや……私は、そのっ！ なんとか、そういうつもりで

は！」

必死にアイリスが首を横に振るう。

「そう遠慮するな。なあに、たまには母の胸を貸してやろう」

嬉しそうに、イリアさんが言う。

……うわあい、悪魔の微笑みだぜ。

アイリスの姿は、もう見ているだけで哀れなほどだ。

「――――《顕現》――――」

空間が碎け散った。

そう錯覚するほどの衝撃が、私の身体を通り抜けた。

実際には、空気の流れ一つとして変わってはいないのに。

「……これが」

気付かぬうちに、私の声は震えていた。

よくよく考えれば、私は《顕現》というものを初めて見るのだ。

それらしいものは何度か見てきたが、完全な《顕現》ではない。

「これが……《顕現》」

ゆったりとした赤い衣が舞う。

まるで舞踏会に向かうお姫様が切るような豪華なドレス。

その腰から、白と黒の帯が伸びる。

左肩のあたりに、細い水色の結晶柱が、右肩のあたりに翠色の結晶柱が三本ずつ浮かぶ。

さらに右手の中に、光すら吸い込むような漆黒の剣が一本現れる。

……綺麗、だった。

そのイリアさんの……《顕現》は。

怯えではなく。

恐れではなく。

これは……なんというべきか。

言葉には、とても出来ない。

ただただ……挫けそうだった。

こんなものを前に、どうして私なんかが立っていられよう？

そう思わずにはられない。

心か、粉々に打ち碎かれる。優しく、柔らかく、それでも着実に、敗北していく。

……駄目だ。

駄目だ駄目だ駄目だ！

そんな自分の意識を塗り替える。

なにを考えている？

敗北？

いやだ。

こんな……こんな敗北を私が味わうなんて、私は認めない。

「——っ！」

《顕現》もどきの大鎌を取り出す。

「ほう？」

少し感心したようなイリアさんの声。

心臓は弾けそうだった。

声一つで、何度殺されかけるのだろう。

胸を抑えながら、大鎌を真横に構える。

「……！」

余裕なんてなかった。

切りかかる。

距離を無にして。

時間経過を超越して。

大鎌の刃はイリアさんの咽喉元に突き刺さ——らない。

イリアさんに触れた瞬間、大鎌にひびが入り……。

砕け散った。

「……え？」

「素人にしては上々。だが真の《顕現》を相手にするには兎戯に劣る」

イリアさんが微笑んで、私の目を覗きこんだ。

「お前は見所がある……そうだな。今日中に《顕現》をものにしろ。でなければ、殺す。いいな？」

……え？

「アイリスもだ。無能な娘など持った覚えはない。いい加減お前も《顕現》をしろ。でなければ、縁を切るぞ？」

イリアさんのあまりにも傲慢で高圧的で絶対的な言葉に、私もアイリスも、ただ固まるしかなかった。

「なあに安心しろ。もちろん私は……全力でいってやろう。光栄に思え？」

片鱗はっ！

「――こふっ」

気付けば、肩口を切り裂かれていた。

おびただしい量の血が、口の中から溢れだす。

呼吸がまともに出来ない。

肩から入って、肺か気管かが傷ついたのだろう。

普通なら致命的な怪我だが、収納空間から取り出した有機液体金属が血液を代替し、魔力によって強化された細胞がまたたくまに傷を塞いでいく。

「遅い。再生に一瞬たりとも時間をかけるな」

左腕が切り飛ばされた。

ここで、私は自分を切り裂くものの正体をようやく知ることになる。

イリアさんが握っていた黒い剣だ。

振るわれたことにすら、まともに気付けなかった。

——嫌だ。

逃げだしたくて、逃げだしたくて、たまらなくなった。

こんなのを相手にしろ？

不可能だ。

絶対に勝てない。

……そんな弱音が次々に溢れだす。

「っ……」

左腕が再生して、私は再び大鎌を取り出した。

「う、おおおおお！」

大鎌を振り上げる。

「だから、遅い」

大鎌が砕け、私の両手首が消し飛んだ。

さらに、そこから侵食するように私の両腕が肩まで破裂する。

全身に裂傷が生まれ、血が滝のように全身を伝った。

「あ、あああああああああああああああああああ！」

死ぬ。

死んでしまう。

このままでは、殺される。

まさか、これは訓練なんですよ？

ならばこの滅茶苦茶な身体をどう説明する？

殺しにきてるよ、これ。

絶対、そうだ。

……嫌だ。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！

「――――！」

声にならない叫びが出る。

どうして私がこんな目に遭わなくちゃならないの？

こんなの……。

……違う。

違う、違う、違う違う違う違う！

「違うッ！」

今を呪うことなんてして、なんの意味があるの。

そんなの私らしくないよ。

私は……棘ヶ峰緋色は……こんなキャラじゃない！

腕の一本二本がどうした！

身体が砕かれて、だからどうだというのだ！

私は……私と言う人間は……！

なにかに追い詰められるなんて柄じゃない。

なにかに屈するなんて柄じゃない。

信念も理想もない。

でも、矜持だけはあるんだ。

私がこれまでに生きてきた人生は、面白おかしくて……だから、それは、これから曲げるつもりはない。

私はこれまでの生き方を、自分の在り方を、曲げたりはしない。

なら……これは違う。

「……！」

いつのまにか倒れていた身体を、ゆっくりと起こす。

傷は治っている。

なら、問題などどこにもない。

「ほう……」

イリアさんが感嘆したような吐息を漏らす。

「立つか……折れるかとも思ったが、存外、いい根性をしている」

にやりとイリアさんが笑う。

「……はっ」

だから笑い返してやった。

「この程度、どうってことないね」
「……」

イリアさんの表情が、僅かな驚きに変わった。

「貴様……ふむ。なるほど、あいつが選んだというのも、納得か……これはあいつと同質の特異だな……」
「なにぶつぶつ言ってるの、さ！」

次の瞬間、私はイリアさんに肉薄し、瞬時に取り出した大鎌を振るった。

ありとあらゆる概念を引き千切り、大鎌の刃はイリアさんの首を狩る。

——なんて、あるわけないよね。

大鎌は、碎ける

触れただけでイリアさんに押し負けて、碎け散る。

「……このっ！」

さらに大鎌を取り出し、叩きつける。

碎かれる

叩きつける。

それを、刹那に数千回も繰り返す。

「ふん」

イリアさんが剣を振るうと、私の身体が横に吹き飛ばされた。

空中で私の四肢が切り落とされ、右の眼球が貫かれ、内臓が破裂し、咽喉を裂かれた。

地面にボロ雑巾よりひどい有り様の身体が転がる。

「がはっ」

痛いなんてもんじゃない。

痛みになれた私でも、痛いという次元を優に超えた感覚を叩きつけられる。

常人なら、きっと狂って、狂って、狂いきつていたろう。

「お、おとおおとおおとおおとおおとおおとおおとおお！」

雄叫びをあげながら、私は再生した四肢で身体を起こした。

そんな私を見て、イリアさんが鼻をならす。

「ふん……いい気迫だ。それに比べ——」

イリアさんの視線が、アイリスに向いた。

アイリスの身体が震える。

「お前のその様はなんだ？　アイリス。お前、わたしの娘ならば緋色程度の気迫は見せてみろ」

「っ……！」

その言葉に、アイリスが動いた。

常闇を纏い、イリアさんに突撃する。

常闇がイリアさんに襲いかかった。

「――それがどうした」

イリアさんは、微動だにせずそれを受けた。

常闇がイリアさんの身体に巻きつき……霧散した。

「こんな常闇もどきでわたしを傷つけられるとでも？　もしそんなことを露ほども考えていたなら……失望したぞ。少し甘やかしすぎたか？」

イリアさんが剣を投擲する。

剣はアイリスの胸を貫いて、そのまま遙か彼方の氷山まで吹き飛ばし、縫いつけた。

「本当に縁を切るか……これではな。情けないにもほどがある」

イリアさんが溜息を吐く。

「戦いが目前に迫っているのだろうか？ 舐められ、侮られ、挑戦されたのだろうか？ ならばどうして牙を剥かん。今の貴様は、子猫が怯えから爪をむやみやたらに振るっているようなものだ……それを可愛いと言ってやるほど、私は優しくはないぞ」

と、縫いつけられた氷山ごと、アイリスの身体を眩い光の柱が貫いた。

「本当に……やはり子には厳しくすべきだ。あいつの教育方針は甘すぎる」

呆れたように肩をすくめるイリアさん。

その背後から、私は大鎌で切りかかった。

「無駄だ」

大鎌の刃を、イリアさんが掴んだ。

そのまま、握りつぶす。

……思わず、笑ってしまった。

「防いだ……」

「……！」

イリアさんが目を見開く。

どうやら、自分が大鎌を防いだ、という自覚がなかったらしい。

きっと身体にしみついた経験が、自然と防御させたのだろう。

そう。

防御させた。

これまではそれすらなく、ただ攻撃する度に触れては碎かれることを繰り返していただけなのに。

手で受けとめたのだ。

それはつまり……イリアさんが、僅かながらにも私の大鎌を危険だと判断したということ。

私のこれは……強くなっている！

碎かれても、碎かれても、いい。

なら次はもっと硬く、鋭くするだけだから。

だから届いた。

「もっと、もっと……！」

さらに大鎌をイリアさんに振るう。

千の刃をイリアさんは拳で砕く。

万の刃をイリアさんは生み出した剣で砕く。

億の刃をイリアさんは剣で相殺する。

「……なんだ、お前は」

イリアさんの頬には、一筋の汗が伝っていた。

「まともな《顕現》もしていないくせに……なぜここまでできる……」

得体のしれなものを見る目。

……それでいい。

誰かの定規で測れるような私じゃあない。

でも、まだ足りない。

もっと上まで。

「もっと……もっと」

大鎌が鼓動する。

肌を、生温いなにかが覆う。

「――！」

イリアさんが息を飲んだ。

「まずいな……ふむ。まあ及第点ということで、一度眠れ！」

イリアさんが、初めて動いた。

これまで一歩たりともその場から動かなかったイリアさんが。

そして――黒い剣が私の視界を覆う。

それは、数え切れぬほどの剣尖。

その真中に、剣を構えたイリアさんがいた。

「――」

頭の後ろで、硝子の碎けるような音がした。

次の瞬間私は、地面に倒れ伏していた。

意識のスイッチが、突然切られたようだった。

気絶するのだと、はっきりと分かった。

でも、それに逆らう。

まだだ。

まだ、私は……！

「無理をするな。《顕現》こそ出来ずとも、お前は十分な力を見せた。それ以上は、今はいいい」

言うイリアさんの背後で、巨大な黒い柱が立った。

「む……あちらもか」

イリアさんが振り返る。

気絶する直前、私はイリアさんの視線をたどった。

そこには――。

巨大な黒い獣が、いた。

+

「やれやれ」

足元に倒れているアイリスを見て、苦笑する。

「軽い挑発と重圧で我を失うとは……まだまだ未熟だ」

眩きながら、私は自分の左肩を見た。

――そこから先は、消滅していた。

「私など恐れるな……お前は、私を越える力を秘めているのだから」

笑んで、私は左腕を再生させる。

そのまま《顕現》を解いて、しゃがみこんでアイリスの頬を撫でた。

「未熟ではあるが……まあ、これだけのものを見せたのだから、一応、合格ということにしておいてやるか」

……なんだかんだ言っつて、やはり私も甘い、か。

しかし……ほんとうにとんでもない。

「まともな《顕現》すらせず、私の《顕現》を越えるか」

緋色も、アイリスも。

この子らは……一体どこまで行くのだろう。

「……エリスよ。やはりこの子らは、特別だ……いや」

違う、か。

特別などと聞こえのいいものではない。

これは……。

「隔絶、とでも言うのか」

才能なのか。

環境なのか。

それとも、他のなにかしらの要因があるのか。

この隔絶は、きっと、多くのものに影響を与える。

「……だからこそその特別クラス、か」

我が子の力を、頼もしいと思う。

だが、力には、必ず重いモノが付きまとう。

それを背負えるものか。

……くじけるなよ。

その為になら、私はどれほどこの子に嫌われても構わない。

強くなれ。

自分の力に押し潰されない強さを、手に入れてくれ。

気付いたのはっ！

気付いたら朝だった。

な、なにを言っているかわからねえだろうが、私にもわからねえ。

……ぶっちゃけ気絶してただけなんだけどねっ！

てへっ。

とりあえず、私は白い天井を見上げていた。

保健室かどこだろう。

「知らない天——」

「緋色、起きたか」

「……」

テンプレの台詞くらい言わせて下さいお願いします。

「知らない天じょ——」

「身体のほうは大丈夫か？」

「……」

狙ってんのかくのやろう。

……仕方ない。

諦めて身体を起こす。

やはりここは保健室のようだ。いかにも、って感じ。

そして私が寝ていた隣のベッドには、アイリスがいた。

「……一つ訊いていい？」

「なんだ？」

「えっと……あれ、私死んでないの？」

注。心の底からの疑問です。

そりゃね！？

もうね、脳裏に焼き付いてますよ！

ほんとどうして「なにが、あったの？」みたいな記憶が飛んでる
っという流れじゃないんだろ！

そりゃあれだけ散々にやられたら忘れたくても忘れられませんか
も！

後半、半死半生であやふやだけど、それでもぎたぎたにされたの
は覚えてる。

イリアさんマジ鬼畜。

「……生きているようだ」

自分の身体を確認しながら、アイリスが言う。

その表情は、無表情ながら、ひどく安堵しているようにも見えた。

「なに物騒なこと言ってるの？」

ふと、気付けば私とアイリスの間に人影が立っていた。

……だから、瞬間移動しなきゃならない規則でもあるの？

「ツクハ……」

その人は他でもない、ツクハだった。

「おはよう、緋色。よく眠ってたね。アイリスも」

ツクハが微笑む。

おお、今日も破壊力抜群な笑顔ですね。

「緋色。お前、ツクハさんと呼び捨てとはなかなか勇気があるな」

呆れたようにアイリスが私を見た。

「私が許可したんだよ。最真で」

「公然と最真って言っちゃった！」

それでいいの!?

「はあ……そうですか」

どこか諦めたようにアイリスが肩を落とす。

「どうしてツクハがここに？」

「私、保健医もかねてるから」

「へ？」

つまり、理事長兼保健医？

「案外、理事長って暇だからね」

軽くツクハが言う。

「……ちなみに、ツクハさんが理事長だと知っているのは教員と特別クラスの生徒くらいだ。あとは、全員ツクハさんはただの保健医だと勘違いしている」

「らしいよ」

いや、らしいよ、って自分のことでしょ？

「正体不明の理事長ってことで、この学園の七不思議のひとつにもなってるんだよ」

ツクハが胸を張る。

……一つ言えることは、七不思議の残りの六つは知らないままでもいい。

知りたくない。

知ったら絶対面倒なことになるから。

「というわけで、今まで二人の様子を見てたってわけ」

ツクハがウィンクをする。

様になりすぎててもう、なんていうかね！

「お世話をおかけしました」

アイリスが丁寧に行っている！

……でもきつとツクハに逆らうのが怖いだけなんだろうなあ、とかなんとなく察してみたり。

だって考えてもみないな。

私はまったくそういうところは見てないけれど、ツクハはこの学園の理事長で、そうなるのが当然……この学園でも、かなりの実力者なんだよね。きっと。

っていうか、なんていうかさ。

最初は少しも感じなかったんだけど、最近になってツクハから底の知れない力を感じるし。

私も成長してるってことなのだろうか。

「ありがとね、ツクハ」

「うん。それで、二人にイリアから伝言」
「――」

身体が強張った私とアイリスは悪くない。

当然の反応だ。

「まず緋色」

聞きたくないデス。

「仮合格。そのうちまた来る」

聞きたくなかったDEATH。

「で、アイリス」

「……」

「一応家族の縁は繋いでおいてやろう。さっさと私の足元くらいには噛みついてこい、だってさ」

「……」

アイリスが少し眉を歪めて、情けない表情になる。

……イリアさんってかなり厳しい親だよなあ。

うーん。

母親であれだもん。

父親の顔も見てみたいかも。

ああいう人と結婚するくらいだし……きつと。

ぶるぶるぶる！

考えるのは止めよう。

「……母様は、相も変わらずお厳しい」

ぼそりと、アイリスがこぼした。

「それとアイリスー」

「さあ姉さん。昨日は大変だったみたいですが、昨日は昨日。今日は今日。昨日言った通り、訓練しましょうね」

突如現れたエレナが、アイリスの襟首を掴んだ。

「ちよっ、エレナ！？」

「はい、行きましょうね」

そしてエレナとアイリスの姿が消えた。

「エレナが起き次第特訓を――って、もう遅かったか」

大分ね。

まあ伝えられていたとしてもアイリスは逃げられなかったらうけれど。

なーむー。

こっそり手を合わせておく。

そういうえば、エレナもイリアさんの……あ、でも一夫多妻とかの可能性もあるのか。

どうなんだろ。

……でも、顔立ちとか結構違うし、親は違うのかもなあ。

「それじゃ緋色。起きたならベッドを空けてくれるかな。流石に元気な人間をいつまでも保健室にいさせるわけにはいかないんだ」

「あ、うん。了解」

そりゃそうだ。

私はベッドから降りて、衣服を軽く直した。

とりあえず、家帰って、お風呂入ろうかな。

エログッズ満載の風呂なんだぜ。

ぐへへ。

まじ変態緋色ちゃんなんだぜい！

「それじゃ、またねツクハ！」

「うん、またね」

ツクハに別れを告げて、私は保健室を出た。

「あ、緋色。ちょっと訓練付き合いなさいよ」

そして廊下にいたスイに捕まりました。

「……あの」

「ん？」

「……せめて、風呂に、入らせて下さい」

どうせ逃げられないんでしょ？

分かってますよ。へん！

温泉はっ！

というわけでスイの特訓に付き合う前に風呂に入ろうと、私は湯めぐり部を訪れていた。

ずっと来たかったんだよね！

ちなみにツクハにはちゃんと湯めぐり部の部室を使っていって言う許可を取った。

スイはなんかちょっと用事があるとか言ってどこかいったから、たっぷりゆつくりとっくりお湯につかることにしよう。

「お邪魔しまーす！ って言っても誰もいなー」

湯めぐり部の部室のドアを開けたその先は、なんていうか……銭湯の脱衣所だった。

マジ、そのまんま。

で、そこに……先客がいました。

「……」

「……はろー」

いたのは、なんと小夜でした。

たららーん。

小夜の姿は、俗に言う一糸も纏わぬ、に限りなく近かった。

今からお風呂だったのか、小夜は身につける最後の一枚、下着を膝下まで下ろしていた。

うむ。

皆の衆、よろしいな？

さあ仲良く声を合わせて……！

「眼福である！」

「ノックくらいしなさい！」

「げふっ」

なにかが私の顔面を思いきり強打した。

高密度に圧縮された魔力だと気付いたのは、私の身体が後ろに吹き飛んで廊下の壁にめりこんだところだった。

部屋のドアがひとりでにしまる。

「……痛いっす」

+

「テイク、トゥー！」

ばばん！

ドアを勢いよく開く。

ノック？

そんな無粋な真似はしねえよ！

「……」

「えー」

「なんですかその声は」

小夜が半眼で私を睨む。

小夜は身体にタオルを巻いていた。

「えー」

なにそれズルい。

「ブーブー！」

腕を振り上げ、唇ととがらせる。

「我々に裸体鑑賞の権利うばあ!？」

首が千切れるほどの威力で顔面を強打された。

+

「テイク、スリイイイイイブッバツ」

+

「ちょっと待ったなんで今吹き飛ばしたの!？」

まだテイクスリーとしかいってなかったのに!

「いえ、なんとなくです」

「なんとなく!？」

緋色ちゃんはびっくりだよ！

「……まったく、あなたも入るのですか？」

「うん。ツクハには許可貰ったからね！」

Vサインを突き出す。

「……」

小夜が溜息をついて、無言のまま浴場への扉を開ける。

「ちょっと待ってよ！」

一人でいく気か！

いく気か！

いく気か！？

ええいそうはさせませんですよ！

「さっよちゅわぁーん！」

我が血統が最終にして究極！

一子相伝！

空前絶後にして、色即是空！

もはやこれは常識の範疇になし！

意味など通じなくてよろし！

秘奥義！

ルパン・ダアアアアアアアアアアアアアアアアイブ！

ぽーん、という効果音と共に、私の来ていた服が脱げて辺りに放られる。

すっぽんぽんの私は、小夜に跳びかかった！

——グシャ！

見せられないよっ！

十

浴場は、やっぱり凄かった。

室内温泉はまあ、普通っちゃ普通。

電気風呂とか身体のお廃物を食べてくれる魚が泳いでる風呂とか妙な粘り気を持った風呂とかあったけどさ。

凄いのは、露天風呂のほう。

室内温泉に三桁近くのドアが備えられていて、それが全部別々のシチュエーションの露天に繋がっているようだった。

っていうか溶岩風呂とかそれ多分浸かるのはお湯じゃありませんよね？

硫酸風呂も以下同文。

「まったく……貴方と言う人は」

雪の露天風呂に肩まで浸かった小夜の顔は、ほんのり赤くなっていて色っぽい。

「……また不埒なことを考えているのですか？」

ぎろりと睨まれた。

「まさか」

口笛などを吹いてみたり。

「……はあ」

どうやらまるで信用されていない様子。

まったくどうしてこの私を信用できないのだろうね？

客観的に見れば、私を信用すべきなのは明らかなのに。

まず脱衣所での出来事でしょ！？

その後浴場に入って身体を洗っている時に隙を狙って小夜に手を伸ばすこと三十回程度。うち実際にタッチできたのは四回。ちなみに触ったのがどこかは、ヒ・ミ・ツ。

で、粘り気のあるお風呂に死ぬ気で引きずり込むこと一回。

電気風呂で痺れたふりして胸の中に飛び込むこと三回。

床に滑ったふりして抱きつくこと十三回。

見せられないよ！ 状態になることおおよそ三桁。

ほら信用できるでしょ！

流石、緋色ちゃん。安心の性能だね！

「そんなことで、試合は大丈夫なのですか？」
「……」

いきなり真面目なことを言われて、硬直する。

……。

あー、雪が綺麗だな。

一面銀世界にぽつんと露天風呂がある。

いいわあ。

いいわあ。

うふふふ。

「現実逃避ですか」

「なんのことかしら？」

「……期待できそうにありませんね」

「うっ」

だ、だってしょうがないじゃん！

私まだここに来て、実際の時間はそれほど立ってないんだよ！

精神的な時間で言えばめっちゃ長いんだけどね！

「……実際さあ、どうなの？」

ふと、気になったことを尋ねる。

「なにがですか？」

「試合。特別クラス、勝てるの？」

「……」

小夜が僅かに考え込む。

「……正直、私にも分かりません」

「へ？」

「おそらくは、勝てる、と言いたいところなのですがね」

言いたいところ、ってことは……確定ではない、と。

「私、貴方、茉莉にナユタ、アイリス、エレナ、スイ。試合は全部で七試合。うち、絶対にこちらが勝つと断言できるのは……茉莉とナユタくらいでしょう」

「え……小夜とエレナは？」

二人もちゃんと《顕現》が使えるって話じゃん。

「……まあ、負けるつもりはありませんよ。私も、エレナも。けれど、欠片も不安要素がない、と言えば嘘になります」

小夜が目を細める。

「それに向こう側も……」

「緋色！」

ばん、と。

ドアが開いて、いきなり服を来たスイが乱入してきた。

「……え？」

「行くわよ」

行ってくてどこへ、とか聞く間もなかった。

いきなり、黒い槍が私に向かって跳んできた。

「ぶるうあああああああああああああ！？」

奇声を上げながらなんとかそれを回避する。

「な、なにすんの！？」

「ここで訓練していいっていう許可を湯めぐり部の部長から貰って来たわ」

ふふん、とスイが笑う。

「ええええええええええええ！？ 用事ってそんなことしに行ってたの！？」

「ええ。ここなら、私に有利だしね！」

すると、温泉のお湯が爆発するように空中に舞い上がった。

空中のお湯が、いくつもの水の杭になる。

「お、おお？」

「ふっ！」

水の杭が、一斉に私に降り注ぐ。

「うわわわわわわわわ！？」

慌ててそれを避ける。

「ちよっ、たんま！ 私は服も来てないし！」

「すぐに作れるでしょ！」

「そりゃまあ……」

言いつつ、服を作る。

この程度は朝飯前どころか寝ながらでも出来る。

……あ。

ここで一つ気付く。

小夜の姿が消えていた。

あの子ったら逃げましたか！？

私を助けてくれる気はゼロ！？

「さあ、始めましょう、緋色！」

目の前にはやる気満々のスイさん。

スイの周りには、いくつもの水の竜巻が出来ていた。

「……」

憩いの時間が……。

泣くぞ！？

「とりあえずスイの服を剥ぐ！」

話は全部それからだ！

揉むぞ！

つまむぞ！

舐めちゃうぞ！

「っ……」

すると、顔を青くして自分の身体を抱きしめたスイの身体から大量の黒いもの……常闇が溢れだし、私の事を包み込んだ。

ちよっ、おま……っ。

夢で見たのはっ！

「ふう……」

スイとの訓練を終えた私は、自分の部屋に帰って来た。

「張り切り過ぎだよ……」

訓練は熾烈を極めた。

というか、よく考えて欲しいんだ。

私はそれなりに魔術とか《顕現》もどきを使えるよ？

でもね、それだけなんだってば。

魔術なんかは、ぶっちゃけ私くらいのレベルならこの学園にはごろごろいるんじゃないかと思う。

実際、スイも魔術を使っていたけれど、すごかった。

どうやったら小指の先ほどの大きさの水の弾丸で星一つ破壊する程の威力が出せるんだろう。

だから魔術については、私に優位性はない。

となれば、《顕現》もどきだけれど……ぶっちゃけ形が武器だから、それを扱う私のスペックが相手を上回ってないと、どうしようもない。

そりゃあ某死神さんのよく伸び縮みする刀みたいに私も一瞬で数キロまで刃を伸ばしたりさ、次元を切り裂くことだって出来る。

けれどそこまでだ。

それ以上のことは、私の《顕現》もどきじゃできない。

あくまで、もどき、なのだから。

実際、今日の訓練で私はスイにまともに攻撃をあてられた回数は、そう多くない。

逆に喰らった回数は大記録だ。

四桁はやられたね。間違いなく。

つまり、私がなにを言いたいかっていうと……。

「少しは加減しろ」

畳の上に倒れ込む。

「はあ……」

溜息を吐く。

「……ん」

あー、うー。

なんかちょっと眠い。

布団敷こうかな……。

寝る前にお風呂入らないと。スイとの訓練で汗かいちゃった。

ちなみに湯めぐり部の部室は壊滅状態になっちゃった。

……むう。

風呂入る前に、ちょっと寝ちゃおうかな？

……うん。

そうしよう。

+

殺す。

殺す。

殺す。

と、腕が根元から千切れた。

さらに咽喉が潰される。

眼球が弾け飛ぶ。

でも止めない。

腕が再生する。

今度は長剣を作り出して、切り刻む。

刻む。

刻まれる。

殺す。

殺される。

頭がおかしくなりそうだ。

でもそんなことにはならない。

違う。

きつともう、おかしくなってしまったんだ。

そうだ。

だって、こんなの普通耐えられないから。

私はおかしくなっている。

ああ、そうだ。

思考を放棄した私が壊れていないわけがない。

臆病者の私は、私を壊した。

そして殺す。

殺すのだ。

殺さなくてはならない。

「――？――？――の為に。

「――？――？――の為に、私は殺そう。

我が子を。

我が子に等しき存在を。

塵芥に変えよう。

私は力を振るう。

ただそれだけのために。

……あれ？

どうして私はこんなことをしているんだっけ？

誰の為？

あれ？

私は……私は……。

私は？

誰？

「……なに、ぼさっと、してるの？」

掠れた声が聞こえた。

どん、と。

頭になにかが突き刺さる。

私の視界には。

私の顔面に手を突き刺した。

輪郭が浮かんでいた。

それは、見覚えがあつて。

間違いなく……。

「？—？？—だった。

——私の手は長剣をナユタの心臓に突き立てた。

+

「……っ！」

飛び起きる。

「っ、ここは……」

遅れて、ここが自室であることに気付く。

「そっか……私、寝ちゃって……」

ということは、今のは……夢、か。

「……なんだ」

安堵する。

悪夢。

悪夢だ。

そうだよ。

私があんなこと、するわけないし。

ひどい夢。

汗がすごい。

「風呂、はいろ……」

「そうね。それがいい」

「——っ!？」

声が聞こえて、私は弾かれるようにそちらを見た。

窓だった。

窓の外、ガラスの向こう側、夜の闇の中に、銀色の髪が踊った。

「あ……」

あの髪。

後ろ姿だけれど、ポニーテールにまとめられたその銀髪を。

そして背中から生えた六枚の翼を、見間違えるわけがない。

「あなたは……」

「元気にやってるみたいね」

「……また、いきなり現れますね」

「驚かせてしまったかしら？」

「……それなりに」

正直ガチ驚いたけどな！

「そんなに驚かせるとは思わなかった……ごめんなさいね」

微笑しながら彼女が言う。

ええいやっぱり考えを読んでやがりますか。

「ふふっ……」

「……もうなにも言いませんよう」

この人にはきつとなに言っても無駄だ。

「賢いわね」

「そりゃどうも」

褒められても全然嬉しくないのはなんでだろう。

「……悪い夢を見たのね」

「そこまで分かるんですか？」

「ええ。まあ」

まあこの人なら分かって不思議じゃないか。

「……本当は、貴方に会うつもりはなかったのだけれどね」
「え？」

「貴方は私の性質に近い。だから、もしかしたら私に影響されてしまいかもしれない。そう思ったからなんだけれど……どうやら手遅れだったみたい。最初の時点で既に、ということかしらね。それほどに貴方は、私に似ているということ」

「あの、なに言ってるんですか？」

「……夢については、今は考える必要はないわ」

「すみません会話についていけないんですけれど？」

「分からなくてもいいわ。ただ、言葉だけは覚えておいて」

……ううむ。

話に通じてるのか？

「緋色……貴方には、強くなって欲しい」

「はい？」

またいきなり話が飛躍しておりませぬか？

「強く、強く……私すら越えて行って欲しい……」

すると、彼女の翼が大きく広がった。

白い羽根が舞う。

「少しズルいけれど、貴方に、貴方のヒントをあげる」
「私に、私のヒント？」

なんのことっちゃ。

「――貴方らしく。そういうことでしょう？」

ほわっつ？

疑問を挟むより早く。

あの人の姿は消えていた。

「……ぼーぜん」

なんだったんだろう、一体。

意味の分からないことをかなり言い残していきましたが……。

むう？

むー。

むむむ。

……ま、いっか。

風呂はいろーつと。

この世界の非常識ぶりには慣れたかと思ったけど、そんなの自意識過剰でした。

ちなみに。

コロッセオのサイズ、余裕で半径十キロくらいありそうなんですけどお。

馬鹿かつ！

サイズ間違えてるよね、これ！

一桁くらい！

……この世界で起きることにいちいちつつこむなんて、もう不毛なことなのかもしれない。

そう悟ったよ。

で、現在会場内、控室に私来ております。

控室はめっちゃ現代風で、壁には大きいモニターがついてたりする。

既に特別クラスの皆は先に来てた。

「それで、今日って誰の試合なの？ 確か、一日一試合でしょ？」

茉莉に尋ねる。

「……組み合わせは、向こうで決める」
「不平等ですね」

小夜が溜息を吐いた。

確かにそれはちょっと不平等がすぎるのではないだろうか。

それじゃあ向こうの有利に試合を組むことだって出来るわけだし。

「ま、いいんじゃない？ ハンデだとも思おうよ」

気楽にナユタが言う。

「まあ、一応こちらは挑戦を受ける側……どちらかと言えば、上位者です。上位者が下位者の要求を聞き入れるくらいの度量を見せなくては興醒めですからね」

下位者……うーん、エレナは今日も腹黒である。

「なにか？」

にこりとエレナが私に微笑む。

「ナンデモアリマセンヨ？」

「そうですか」

怖いっす。

「あ」

スイが声をあげる。

部屋のモニターに電源が入ったのだ。

そしてモニターに表示されたのは、二つの名前。

「……これが今日の試合、というわけか」

アイリスがにやりと笑う。

なるほどねえ。

今日は……。

+

観客席の一番前、特別席で今日の試合に参加しない特別クラス全員が集まっていた。

ちょうど向かい側……っても二十キロ先の席にはゼファーローゼンベルクを中心に一般クラスからの参加者らしく人達が座っている。

というか、ですねえ。

観客多っ!?

え、こんだけ大きなコロッセオの客席全部埋まってるんだけど!

どっからこんだけの人が沸いたんだ!?

「いろんな世界から集まったみたいですね。これまでの学園の卒業生や、学園世界と交流のある世界の人達。それに、天界魔界の人もいるようですし……注目されていますね」

「ほほう」

ソウが説明してくれた。

最近影の薄いソウが説明してくれた。

言いなおしたことに他意はない。

ごっん、と。

後頭部をなにかで殴られた。

見れば、ソウがどこから取り出した黒い剣の腹の部分で私の後頭部を殴ってた。

「……危ないよ？」

「お気にせず」

「いやしようよ！」

今のだって普通の人間だったら頭蓋骨陥没レベルだったしね！

なに、ちょっと拗ねちゃってんの？

「影が薄くても私はちゃんとソウのことを愛してるよ！ 大丈夫！」
「そうですか」

あっさり流された。

ショックである。

「ほら、緋色。じゃれてないで、始まるよ」

ナユタの声に、私はコロッセオの中心に視線を向けた。

そこには、二人の姿があった。

+

「……どうして、私が最初？」

茉莉が、目の前の女子生徒に尋ねた。

それは私も思ったことだ。

よりにもよって担任である茉莉を最初に相手に指名してくるなんて、なんのつもりなのだろう？

すると相手の女子生徒に口元に笑みが浮かんだ。

「担任のあなたを倒せば、向こうの士気はがた落ちになる。そうすれば、特別クラスと言えど恐れるまでもありませんからね。それに、担任のあなたの力を見れば、自然と特別クラスの実力も把握できるでしょう」

栗色の髪を伸ばしたその子は、堂々とした態度で告げる。

おお、なるほど。そういう意図があったわけですか。

「申し遅れました。私は攻撃魔術クラス所属、葵Ⅱレンファートです」

「……特別クラス担任、茉莉」

「では茉莉先生、手合わせ、よろしくお願いしますね？」

$$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right]$$

その瞬間。

試合開始を告げるアラームが鳴り響いた。

——直後コロッセオの舞台が半壊した。

ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ！？

ちよつ、おま、待つ……。○

な、なにを言っているか分からねえだろうが、私にもぶっちゃけよく分からねえ。

なんか試合開始と同時に茉莉と葵ちゃんの身体から膨大な魔力が放出されて、それが衝突して超大規模な爆発を起こしたっぽい。

つか空間が割れて次元の狭間くせえのが見えてるんだけど。

そしてそれだけの爆発の余波を防ぎ観客席に張られた障壁パネエ。

試合の様子が土煙で様子が見えない、とかじゃなくて次元の崩壊で様子が見えない、って新しくね？

なんかこう……形容し難い光景だ。

なんじゃこりゃ。

次元の狭間がゆっくりと塞がって行く。

そうして、しばらくしてようやく試合の様子が見えるようになった。

茉莉と葵ちゃんは、光の速度でコロッセオの中を駆け回っていた。すみません一秒のうちに魔術を万発撃つのやめてもらっていいですか？

ほらまた次元割れたよ！？

ちよっ、見えない、見えない！

これだけの観客集めたんだからちゃんとパフォーマンスしようよ！

「……どうやら、普通的能力では私の方が僅かに分が悪いようです
ね」

葵ちゃんが一旦茉莉から距離をとる。

「であれば……」

葵ちゃんの纏う空気が変わる。

お……？

「――《顕現》！」

ぶはっ。

《顕現》なされたっ！？

いやまあ一般生徒にも出来る人がいるってのは知ってたけど！

でもいきなりっすか？

実際試合が始まって三分経ってないんですよ？

せめてカップラーメン出来るまでまとうよ！

「……」

茉莉は呑気に葵ちゃんの《顕現》を眺めていた。

……余裕っすね。

「余裕ですね」

《顕現》した葵ちゃんが鼻をならす。

ちなみに葵ちゃんは白い羽衣を幾重にも纏い巨大な三叉を構えていた。

超綺麗なんですけど。

「……」

茉莉が小さな吐息をこぼす。

「《顕現》をしないでいいのですか？　まあ、待ちませんけれどね！」

葵ちゃんが茉莉にむかって飛び出す。

飛び出す、という行為をとったときにはすでに、茉莉の眼前に迫っていた。

移動、という過程がまるで消し飛ばされていた。

……これが《顕現》か。

「は——っ！」

葵ちゃんが三叉を茉莉に突き刺した。

三叉はあっさりと、茉莉の胸の真ん中に突き刺さる。

「……」

それでも茉莉は、表情一つ変えなかった。

「な……」

さすがの葵ちゃんも、茉莉のその様子に怯んだようだった。

「何故……なんの抵抗も……」

「……」

「どういふことですか!？」

葵ちゃんが叫んだ、その時。

茉莉の口元に、薄い笑みが浮かぶ。

「――っ」

「《顕現》で、それを考えてはいけない」

次の瞬間。

葵ちゃんの三叉が碎け散り、貫かれた筈の茉莉の胸にはなんの傷も残らなかった。

《顕現》は想いを、そのまま現実に出来る。

ならば、それは自身に利のある想いばかりではなく……不安や恐れといった、マイナスな思いも現実にしてしまう。

葵ちゃんは、今、きつとこう思ったのだ。

自分の攻撃は、効いていないのでは？

――と。

「心が弱い、あなたの負け」

「そんな、こと……!!」

「《顕現》」

茉莉が《顕現》する。

——美麗、とでも言えはいいのか。

色は、漆黒と純白。

薄手の白い服の上に袖のない黒い衣をまとい、腰からは淡い光を放つ布が伸び、舞うように揺れる。

茉莉が、腕をゆっくりと持ちあげる。

すると茉莉の素肌に、赤い光が幾何学模様を描くように走った。

紅蓮の光が茉莉の掌から放たれ、葵ちゃんに襲いかかった。

そうして。

決着がついた。

茉莉の《顕現》が解かれる。

地面に、気絶した葵ちゃんが横たわっていた。

その声はっ！

「……」

ぽかーん、って感じ。

私だけじゃなく、観客皆も。

ていうか、向かい側のゼファー君達もぽかんとしてる。

うん。

だよね。

そうなるよね。

え……今なにが起きたの？

いや。

なにが起きたのかは分かる。

ただ、それがいつ起きたのかが分からなかった。

茉莉はゆっくりと手を持ちあげた。

それで、掌から赤い光が放たれた。

……で、それはいつのこと？

あれ？

えっと……。

百年前の出来事だよ、と言われても下手したら納得しかねない気分だった。

あるいは、未来の出来事だよ、とも。

……ええ？

「つまり、認識出来ない攻撃。時間軸から外れた場所で、茉莉は行動したんだよ」

ナユタがそんな説明をしてくれた。

けど意味わかんないっすわ。

「……そっか。まあ、そのうち分かるようになるよ」
「そうかなあ」

+

「茉莉、お疲れ様！」

会場を出たところで私は茉莉と合流した。

ちなみにアイリスとスイはエレナに「まで《顕現》出来てないんですから今日も訓練です」と引っ張られて行って、ナユタは「やっぱ余裕かな」とソウを連れて買い物に行った。

勝利の喜びを分かち合うくらいはしていこうよ……。

「ん……」

私の言葉に、茉莉が親指を立てる。

なんてキュートな動作をするんでしょう、この子は。

「担任の威厳は、守った」

「そだね」

我らが担任様がとんでもないことは、よく分かりました。

それはもう、すつごく。

「……あと、これで怒られない」

茉莉が感情は薄いながらも、安心した様子を見せる。

「ん、怒られないって、ツクハとかに？」
「……」

ふるふると茉莉が首を横に振るう。

「オリーブに」
「オリーブ？」

ぱっと油の方を想像してしまった。

「名前、だよね？ 誰？」
「私の……妹？」

なんで疑問形。

「っていうか茉莉、妹いたの？」
「……あ」
「ん？」
「……これ、秘密事だった」

「あっさりバラしてるけど!？」

「母様達に怒られる……」

茉莉が肩を落とす。

そんな仕草もかわいいなあ。

うふふ。

しかし、何故妹がいることを秘密にしくちやならないのだろう。

なに。

なにかこう、家柄が特殊で妹の存在は隠匿されてたりするの？

妹は地下深く古の封印の糧として捧げられていたり？

そういう熱い展開が……!

「まあ……いい」

……ないか!

そんな展開があれば茉莉がこんなのんびりしてるわけないですよ
ね!

「秘密事らしいから深くは聞かないけど……ちなみに、どんな妹さん？」

「ん……優しくて、怖い」

「普段は優しいけど、怒ると怖いってこと？」

「普段は怖いけど、数か月に一回くらい優しい」

「それほとんど怖いんですけど!？　優しさが風邪引く感じの頻度だね!？」

それで、茉莉の妹でしょ？

……ふうむ。

どんな人かまるで想像が出来ない!

いつか会えるかな？

「とりあえず、私はこのことは効かなかったことにするよ。それで茉莉もお母さんに怒られないでしょ？」

「……母様達に隠しごとをしたら、罠に殺される」

罠……!？

っ、すまん!

これは流石にエロい妄想は出来ないぜ!

罠、までは良かったんだが、その後に殺すってついちゃうと流

石にねえ。

しかもなんか、茉莉の表情が真剣だし。

「って、どんなお母さん!？」

「……戦うの、大好き」

「ほお」

「死闘、大好き」

「へえ」

「殲滅している時の顔が、すごく素敵」

「……よし」

なるほど納得。

「茉莉は素直に秘密をばらしちゃったことをバラしましょう!」
それで解決だねっ!」

「……七割殺し、かな」

ぽつりと怖いことをおっしゃらないでください。

「……せめて六割に、ならないかな」

だから怖いことを以下略。

「……」

茉莉がしゅんとする。

なんでだろう。

別に私は悪いことしてないのに、凄く後ろ暗い気持ちになる。

「え、えっと……」

な、なにか名案……私の山吹色の頭脳よ、名案をひらめけ！

ぴかーん！

「っ、そうだ、茉莉！」

「……？」

「そういう時はプレゼントだよ！」

「プレ、ゼント……」

「そう！ プレゼントを渡して、気分をよくさせてからバラすの！

そうすれば、きっと……！」

「半殺しくらいに、なる？」

「……それはどうかナァ、ウッフ」

ここまでして茉莉は半殺しにされると考えるのか。

……どんだけ鬼なお母様なのでしょう。

「……プレゼント、してみる」

「うん、そうしなよ。なにか送るかはすぐ決まる？」

「……どこかで、強い魔物でも生け捕りにしてくる」

「え」

「世界破壊くらい出来なきゃ、駄目……」

「え」

「……行ってくる」

「え、あ、はい」

そして茉莉は消えた。

「……」

母親へのプレゼントに、世界破壊が出来る魔物の生け捕り？

……よし。

このあとなにをしようかなー！

+

『バレてしまったわね』

「……ごめん」

『いいわ。他の誰かなら面倒だけど、あの子なら』

「……いい、の？」

『ええ。あの子なら、面倒なことにはならないでしょ？』

「そう、かな……？」

『それに面白いし。そこいらの凡百の輩よりかは、ずっとマシよ』

「……ん」

『直接会って話してみたいかも』

「……珍しい」

『ん？』

「オリーブがそこまで人に興味持つの……」

『まあ、私は貴方と共にいられるのならそれで満足する性質だけどね……そんな私にも興味を持たせるのだから、あの子は大したものじゃない？』

「そう、なんだ」

『あら？ 少し不満そうね。私が他所見をして嫉妬しちゃった』

「そういうわけじゃ、ない」

『ふふっ。安心しなさい。例えどれほど他人に興味を持っても、私にとって貴方はただ一人の姉……どちらかといえば、貴方のほうが妹っぽいけれどね。そんな貴方と私は、ちゃんと姉妹愛という絆で繋がっているは。決して千切れることの無い絆でね』

「……うん」

『さて。母様の気に入りそうな獲物はどこにいるかしらねえ』

「どこだろ……」

二試合目はっ！

はいはい、こちら現場の緋色です！

私は現在、事件現場の選手控室に來ております。

今の状況は、決闘二日目。

その組み合わせが発表されたところでございます！

では、緊迫の発表でございますです。

第二試合！

戦うのは……エレナだあああああああああああああ
あ！

これは相手はズタボロ確定だっ！

ドロー、モンスターカード！ ドロー、モンスターカード！ ド
ロー、モンスターカード！ やめてもう相手のライフはゼロよい
ぞもつとやれい！ ドロオオオオオオオオ！

の流れで決まりダネ！

だってエレナだし！

「……なにか失礼なことを考えていませんか」

「あ、ちょ、エレナさん、痛いです、痛いです」

ぎりぎりぎり、とエレナに顔面を掴まれ、締めつけられる。

アイアンクローってやつだね。

ちよっち耳の奥でグシャって音が聞こえたところでエレナが解放してくれた。

「……まったく、貴方はいつも変なことを考えていますね」

エレナに溜息をつかれた。

「エレナは私への遠慮がどんどんなくなるよね」

「そうですか？」

きよとんとしないですよ。

あんた会った当初は物腰の穏やかなお嬢様みたいだったよ。

いまじゃ私の中の敵にしちゃいけない人リストの上位者だわ。

「ほら、エレナ。そろそろ入場しないと」

ナユタが横からそう言う。

「そうですね。では、行ってきます。軽く狩って来ましょう」

今、『勝って』の発音おかしくなかった？

ねえ、おかしくない？

+

エレナに相對するのは、武器武術クラス所属のクリストフⅡゾー
クス。銀髪ロングの一見すれば女の子にも見えなくはない少年であ
る。

……まあ、男の娘と呼ぶほどではないが、間違いなくイケメンで
ある。

なぜだろう、無性に彼が気に入らない。

「ふっ……」

クリストフ君が前髪を掻き上げる。

「本当は僕はこんな野蛮な戦いはしたくはないのだけれどね。親友であるゼファーに頼まれては、参加しないわけにはいかないだろう？　だから僕はここにいる！」

なんだあいつ。

台詞を口にする度に変なポーズ取ってるんだけど。
若干ジョジョっぺえ。

……もしかしてあの人、ナルでシーの人？

「……はあ」

エレナは心底どうでもよさげにしている。

「君が降参すれば、これ以上戦わなくていいのだけれどね！」
「……そうですか。それで、まだ始まらないんですか？」

エレナさんクリストフ君の言葉を完全にスルー。

「ふっ、僕とて君のような美しい女性を傷つけたくはない」

そしてクリストフ君もエレナの発現をスルーだ！

っていうか、お前エレナのこと口説くな！

その役目は私んだあああああああ！

「……さっさと終わらせてしまいたいですねえ」

溜息をつきながら、エレナは試合開始の合図を心待ちにしているようだった。

と、その時。

試合開始のブザー音が、響き渡る。

——そして、エレナとクリストフ君の身体が、光の粒子に変わり、輪郭を変える。

クリストフ君は、上半身裸、下半身は黒い腰布で隠れた姿をしている。

上半身裸とか……。

さらに、その手には巨大な……なんて表現では言い表せないレベルの大剣が握られている。

長さは大体……二十メートルくらい？

で、幅が四メートルくらいある。

うん。あたったら痛そうだ。

「それがあなたの《顕現》……なるほど、悪くないわね」

エレナの静かな声が聞こえた。

——その姿に、目を見張る。

ボロボロの、けれど美しい青に染まった衣をエレナは纏っていた。

ところどころ千切れ、穴が開き……それなのに、その衣は、その衣を着たエレナはひどく神秘的だった。

衣の腰のところからは無数の帯が後ろに伸び、まるで水に浮かんでいるかのようにゆらゆら揺れている。

両腕にの帯が巻きつき、右手には水晶で出来たような弓を携えている。

前に一度、少しだけエレナの《顕現》に触れたことはあったけれど……実際に完全なものを目の当たりにして、ぞくりとした。

「君のその《顕現》は、美しいね」

だからチミィ、エレナを口説くなら私を通してからにしないで！
通さないけど。

「それはどうも」

エレナはまったくありがたそうでもない顔で礼を言ってから、弓を持ちあげた。

空間が歪む。

「まずは初手、様子見と行きましょう」

エレナは弓に矢をつがえない。引かない。

けれど……弓から矢は放たれた。

そんな矛盾。

けれど《顕現》の前に矛盾なんて単語はなんの意味もなさない。

放たれた矢は漆黒。

言うなれば、黒い流星とでも言うのか。

流星は光を突き破り、クリストフ君の身体に突き刺さる。

そう。

普通に突き刺さった。

クリストフ君の身体に刺さった流星は、黒い火花を散らしている。

「ふむ」

クリストフ君は表情一つ変えず、自分の身体に刺さった流星に手をかけ、引き抜いた。

引き抜かれた流星が霧散する。

「なるほど……」

口元を緩め、クリストフ君は笑う。

「これは、舐めてはかかれないな！」

気付けば、クリストフ君は……何十人もいた。

——へ？

何十人もいるクリストフ君が、揃って大剣をエレナに向かって振り下ろす。

いや、ちょっと待て、なんで増殖してんの？

「いくつもの時間軸から私を攻撃しているのですよ」

エレナが観客席にいる私のほうを見て、言う。

おや、説明どうも。

でもいくつもの時間軸から、って……うむ？

とりあえず、沢山攻撃してきてるってことでいいか！

「余裕ですね！」

クリストフ君の大剣が、エレナに叩きつけられる。

「ええ、もちろん」

大剣は、エレナの肌に小さな傷一つもつけられなかった。

エレナの肌に触れた途端に、大剣が碎ける。

「余裕ですから」

エレナの弓が、碎け散る。

クリストフ君の攻撃で碎けたわけではない。

正確には、碎いた、のだ。

細かないくつもの結晶が、空に舞い上がる。

結晶一つ一つが、黒く輝く。

「……これは」

クリストフ君が空を見上げ、呆然とする。

「美しい……」

まるで夢でも見ているかのような声色で、クリストフ君は呟いた。

確かに、美しかった。

青空に浮かぶ、黒い星々。

幻想的、と言っているだろう。

「……これは、なるほど」

クリストフ君が肩をすくめる。

「思ってしまったよ、こんな美しいものを、僕は傷つけられない、と」

「そうですか」

《顕現》はあらゆる気持ちを適応させる。

つまり、クリストフ君には絶対にエレナを傷つけることは出来ない、ということ。

「思ってしまったよ……こんな美しい光になれば、傷つけられてもいい、と」

それは、敗北宣言。

「そうですか」

黒い星々が、降り注いだ。

その流星群は、とにかく綺麗だった。

一つ一つが落ちる度に、巨大な黒い衝撃波を生み出し、衝撃波と衝撃波がぶつかって、いくつもの黒い力の飛沫を散らす。

その力の奔流に、クリストフ君は飲みこまれていった。

エレナの勝利の瞬間だった。

+

「おめでとー、エレナ！」

「ありがとうございます」

戻ってきたエレナに笑いかけると、笑い返してきてくれた。

ひゃっほう綺麗な笑顔だね！

惚れちゃうぜ！

「よくやったな」

「ま、当然と言えば当然の結果よね」

ちなみに今回はアイリスとスイもいます。

他の皆は例の如く帰っちゃったけどね！

「さて。これで二勝目……あと二勝で勝利は確定です。と同時に、確定したことがあります」

「なにが確定なの？」

エレナに尋ねる。

「あちらは、全員《顕現》の使える生徒で固めて来ているだろう、ということですよ」

「……」

まあ、二連続で《顕現》してくるくらいだしねえ。

それに前情報でもちよっとそんな感じの予想は聞いてたし、今更驚きはしないけれど。

うわー、って気分。

だって《顕現》使える相手に、《顕現》使えこなせてない私が勝てるわけないし。

いや勝てるわけないし、って考えがダメなんだけどさあ。

でもね？

現実的にね？

「というわけで……早く姉さんもスイも、さっさと《顕現》を使えるようになりましょうね？」

にっこり。

おっとアイリスとスイの顔が青くなりましたよ。

南無……。

「ああ、そうだ。よかったら緋色も一緒に特訓しますか？　しますよね？　さあ行きましょう」

うわあい。

なんか飛び火してきたぞ。

「いや、私は個人でも大丈夫なんで……ほんと、大じょ——」
「はい」

エレナに襟首を掴まれる。

「行きましようね」

引くずられる。

ええい！

ちくしょうこうなったら……！

「どりゃあ！」

エレナの腰に抱きつく。

ずるずる。

ずるずる……。

「ど、動じないだと!?!」

「アイリスとスイも行きますよー」

エレナが姉妹二人に声をかける。

うわあああああああ、今日はこのまま地獄の特訓ルートか
よう！

+

「……なあ、スイ」

「私も同じこと考えてると思う」

スイと視線を合わせ、頷き合う。

「緋色……よくエレナに抱きつくなんて真似が出来るよな」

「普通なら消し飛ばされてもおかしくないんだけれどね」

「しかもエレナも嫌がらないっていうのは……どういうことだ？」

「お気に入りなんじゃないの？」

「……ああ、なるほど。その気持ちは分からんでもないな」

にやりと笑う。

「ええ。分からないでもないわ。私達は姉妹だし、きっとそういうところも似てるのね」

スイも笑う。

「緋色みたいなやつは嫌いじゃない」
「その通り」

一緒にいて、面白いしな。

裏側はっ！

「悪いね、ゼファー。負けてしまったよ」

「構わないさ。たかがまだ二敗だ。残り五戦中、四戦とればいい。それより、お疲れ様だったな、」

控室に戻ってきたクリストフを労い、俺は椅子に深く腰をかけた。

確かに七戦中の最初の二戦を落としたのは痛い。

だが……問題ない、と言える根拠はあった。

「調べたところによれば、あのクラスで他に《顕現》を使えるのは数名……多くても二名程度だそうだ」

「あれ、そうなのかい？」

クリストフが意外そうな顔をする。

「特別クラスと言う位だから、てっきり全員《顕現》出来て当然だと思っただけけれど」

「そうでもないのさ……特別クラスは、《顕現》が出来る出来ないではなく、他の基準で選ばれているらしい。噂によると、理事長の最肩、などとも言われているが」

「理事長……って、今更だけど、それってどんな人なの」

「さてな。知らないよ。理事長は一般の生徒の前には姿を見せない

からな」

肩を竦め、見たことの無い理事長の姿を想像してみる。

……鼯鼠などを実際に行っているのであれば、ろくでもない人物だろう。

「特別クラスは、不透明過ぎる」

「……」

「俺だって、ただ特別扱いが気に入らないから喧嘩を売ったわけではない」

「分かってるよ」

クリストフが微笑む。

「君はそんな安い男じゃない。それは、親友の僕が一番知っているさ」

「……そうだったな」

相も変わらず、頼りになる男だ。

まあ、少しナルシストなところは気持ち悪いが……そこを抜けば、本当にクリストフはいい友人だ。

いや。

親友、か。

「一般生徒の中には、特別クラスを神聖化する者もいれば、奇異の対象として見たり、特に酷い者では妬み、忌避する者までいる。今までは大丈夫だったが、この状況がいつまでもバランスを保ってられるとは思えん」

俗に言う、派閥というやつだ。

特別クラスを擁護する側。

特別クラスを敵視する側。

問題は、別に特別クラスと一般生徒の間の格差ではない。

特別クラスというものが他に及ぼす影響だ。

例えその影響が表面化せずとも、いずれそれを利用しようとする人間は出てくるだろう。

人の関係にはころびがあれば、それをつつきたくなる。そういう人間は、確実にいるのだ。

余計な心配かもしれないが、あるいは、この学園を崩壊させようと画策する者がいたとして、当然そういう連中が狙うのはそういうところだろう。

だから、手遅れになる前に手を打たなくてはならないのだ。

自覚の無い特別クラスの連中では話にならない。

なにも分かっていない一般生徒でも駄目だ。

学園側も、なにを考えているのか……状況を理解できないほど無能ばかりではないはずだが、少なくともこれまでアクションらしいアクションはなかった。

なにか事情があるのだろうと察するのは難しくない。

いくら臆盾と行っても、学園の運営一つ変えるようなことだ。

理事長や地位の高い者の独断で特別クラスなんてものを設立できるわけではない。

だから特別クラスに下手に触れることが出来ないのだろう。

——だったら、俺がやるしかないじゃないか。

特別クラスの連中には、自分達を妬んできた浅慮の輩とでも見られるだろうか？

一般生徒の連中には、祭りの神輿のような扱いを受けているだろう。

それでもいい。

俺は、俺の出来ることをする。

俺を育ててくれたこの学園のために。

例えそれが、学園の方針に反することになろうとも。

「……あまり、一人で背負いすぎないようにね」

クリストフがそう言う。

「ああ。分かっている」

「分かってる、ねえ……本当かなあ」

「もちろんだとも」

+

「ねえ、あなたはと思う？」

既に客がほとんどいなくなった観客席に、私達は座っていた。

私の隣にいるのは、和服を纏った表情の薄い少女だ。

「……どう、とは？」

「理事の一人としては、あの連中の行動はどう映ってるの、ってこと」

「……」

彼女は、ぼんやりと空を見つめる。

「……ウィヌスは、どう思う」

「聞いているのはこっちなんだけれどね」

苦笑する。

相変わらず、マイペースね。

「ま、私としては、特別クラスが負けて解散するなんて事態にはならない方がいいと思ってるけど」

「……我は、そうは思わない」

「へえ？」

意外ね。

「それはまた、どうして？」

「特別クラスは、一時的な籠に過ぎない。いずれ、勝手に中から壊して外に出ていくのは分かっているのだ。それが早くなるだけのことだろう？」

「あなた基準で言わないでよ」

まったく、あっさり言うけれど、ことはそんな簡単じゃないでしょうに。

「あなたみたいな超越者ならそうなのかもしれない。卵の殻をちよつと早く割って生まれて来てしまった。まあいいか、頑張って生きよう、なんて普通は出来ないのよ。未熟なまま殻から出てしまった雛はね、死ぬしかないの」

「……」

「あの子達はまだまだ未熟よ。籠の外に、出るべき時ではない」
「……ふっ」

と、彼女が小さく笑った。

思わず目を丸めてしまう。

彼女が笑うところなんて、いつぶりに見たかしら？

「甘いな……お前がそこまで過保護なことを言うなど」
「……む」

そりゃ、まあ……。

確かに過保護かもしれない。

でも、仕方ないじゃない。

だってあの子達は……あの子は……。

「……いいでしょ、別に。甘くて悪い？」

「いい親だな」

「……それ、からかってるの？」

「さて」

あー、表情が読みづらいわね。

「……我は、他の者達が甘すぎるのでな。少しは厳しく行こうと思
っている」

「へえ。スパルタ？」

「ああ。死ね、とまでは言わん。だが、この程度のことを乗り越え
られないようならば、いずれ折れる。だったらまだ、我らの目が届
くここで折れるのも一つだろう？」

「……一理あるけれどね」

でもやはり、私は危険な賭けのような真似は避けたい。

……大切、だもの。

「でも、不安ね」

「……なにがだ？」

目を瞑る。

つい先日、見かけた少女のことを思い出す。

彼女が選り、特別クラスに入れた少女。

「……あの子は、一体どんな役目を負っているの？」

「棘ヶ峰緋色、か」

「もう会った？」

「ああ。この間、私の店にな……ナワエが連れてきた」

「そういえばナワエ、あんたのところの行きつけだったわね。どう、喜んでいた？」

「ああ。美味しい、と言ってくれたよ」

表情は薄いながらも、彼女は嬉しそうにした。

……ほんと、料理好きよね。

「で、あんたは知ってる？ あの子の役目」

「さて……な」

「やっぱりか……」

思わず溜息がこぼれた。

空を仰ぎ、これからのことを考える。

「人間って凄いわ」

「なにだ、いきなり？」

「だってそう思わない？ 人間って、今の私達と同じようにいろいろ苦悩しながら、子を育てて、代を重ねてきたのよ？ 実際同じところに立ったら、もう信じられないわ。人間って、ほんと凄い」

「……確かにな」

そういえば、彼女も人間じゃないんだっけ。

元は……破壊神かなにかだっけ？

天界とか魔界とかいろんな世界をまとめて破壊しようとした、とかなんとか言っていたような……。

私達は人間じゃないから、むしろ人間の凄さを今、実感している。

「……エリス、どこ行ったのかしらね」

ぽつりと呟く。

エリスが私達の前から姿を消して、もう何年経ったろう。

十年は余裕で過ぎてたわよね。

「……なんだか、やな予感がするわ」

「奇遇だな、我もだ」
「……はあ」

憂鬱な溜息が出た。

振り絞った力はっ！

——虫が、這う。

ぞわり、と。

全身の肌が粟立つ。

それは恐怖からか、嫌悪からか……あるいは、そのどちらもか。

地平線までを埋め尽くす、黒い虫。

気持ち悪いとか、もうそういうのではない。

なんて言うか……なにもかもが、汚されていくような、そんな気持ち。

「他所見しすぎ」

そんな声が聞こえた。

どん、と。

胸から腕が生えている。

振り向けば、その顔があった。

……前の夢と同じ。

どうして、あなたが……？

「そんな甘く見られては、興ざめ。あなたは最大の壁。私が私を得る為の、最大の障害。そんなあなたは、こっただけ見ていればいいの」

言いながら、彼女は私の胸を引き千切る。

「それが出来ないと言うなら、ねえ……こっちも、少し他所見してしまうわよ？」

虫が蠢いた。

波打ち、それは巨大な塔のように盛り上がる。

+

「……またそんな感じの夢ですか」

目が覚めて、とりあえず乾いた笑いが出た。

「あー……なんなんだろう、これ」

こんな夢を見る理由に、私は心当たりがない。

敷いてあげるなら、やっぱり……あの人、かな。

「……」

ふと、枕元に置いてある目覚まし時計に目をやる。

「……は？」

えっと……あれ？

んー？

目覚ましをガン見する。

「……」

ふむ。

なるほど。

これは、あれですね？

あれですよ。

「――もう試合始まってるやんけ！」

遅刻だあああああああ！？

+

「おはよ、緋色」

全速力で私はナユタ達がいる観客席に到着した。

起きてから大体四十秒である。

頑張った。

私超頑張った。

朝風呂含めて四十秒だもんね！

ふはは！

能力の無駄遣い？

能力なんて使わなくちゃ意味ないんですよっ！

「寝坊ですか？」

「なんのことかしら？」

ソウの言葉にとぼけつつ、席に座る。

観客席には、スイ以外の姿がある。

つまり今日はスイの試合ってことですか。

「で、今はどんな状況かな——」

舞台に目を向ける。

そこで、思わず目を丸めた。

「……おろ？」

なんていうの？

えっと……。

スイの試合相手……お坊さん、だった。

「シドウⅡカンザキだとか言ったか……なかなかだぞ」
「しかし……これは、どうなるのでしょうかね」

アイリスとエレナが、そう言った。

+

「はあああああああああああああああああ！」

スイが叫びながら、常闇で出来た爪を振り下ろす。

しかし爪は、相手——シドウ君、もといシドウさんには通用しなかった。

——なんか坊さんを君付けは気が引ける。

「喝っ！」

そんな声とともに、常闇の爪がシドウさんに届く前に消し飛ぶ。

「ちっ」

舌打ちをして、スイは空中にいくつもの水の球を生成すると、そ

れらを一斉に射出した。

一つ一つが人間なんて簡単に消し飛ばせるような威力を秘めたものだ。

だが――。

「ふん！」

シドウさんが数珠を持った手を振ると、それだけで水は蒸発する。

「これも駄目……」

どうやらスイの態度からして、これまでも何度も攻撃は無力化されているっぽい。

……ただ、一つ疑問がある。

どうしてシドウさんは攻撃しないのだろうか？

「……お主、そろそろ棄権してはくれぬか」

シドウさんの声、めっちゃ渋いやん。

さすがお坊さん。

いやお坊さんだから渋い声だとは限らないけれどさ。

「拙僧はローゼンベルク殿の気概に応じ、この場に参上した。が、
女人を傷つけることなど到底出来ることではない。故に、お主が棄
権してくれば、全て丸く収まるのだが」

「馬鹿、言ってるんじゃないわよ！」

スイがさらに攻撃を加える。

っていうか、なんでだろう。

あのお坊さんそこはかたなくカッコよく見えるんだけど。

女の子を傷つけないとか、紳士じゃん。

「……」

シドウさんが溜息を吐く。

「お主の攻撃は拙僧には効かぬ。諦めてはくれぬのか？」
「聞けない話ね！」

諦めず、スイは攻撃を加え続ける。

「……であれば、仕方あるまい。拙僧、ローゼンベルク殿の信念を裏切れることは出来ぬゆえ……今一時、鬼に変じよう」

言って、シドウさんが手を合わせる。

と、シドウさんの身体が赤く輝いた。

おおっ？

光は奔流となり、シドウさんの姿を隠す。

スイがシドウさんから距離をとった。

……ここでその行動をとるということは、やはりスイはまだ、使えるようにはなっていないのだろう。

光がおさまってゆき、ゆっくりと輪郭が浮かび上がる。

……え。

それは、なんと言うか……うん。

鬼、だった。

比喩表現でもなんでもなく、鬼だった。

全長三メートルはある、むきむきボディ。

肌は真っ赤で、頭からは二本の角が生えている。

腰には獣の毛皮のようなものを巻いていた。

手には、巨大な刀が一本。

……マジっすか。

「今からでも、遅くはない。棄権せぬか」

低く響く声が、鬼の口から出る。

「……断るわ」

言いながら、スイが常闇の翼を背中に広げる。

「――！」

スイが飛び出す。

「《顕現》には、《顕現》でしか抗えぬ。これは絶対だ」

「そんな絶対、覆してやるわよ！」

鬼を、常闇が包み込む。

「ふん！」

けれど……その闇を、鬼の刀が薙ぎ払った。

「はあああああああああああああああああ！」

鬼の号砲が空を揺さぶった。

シドウさんは刀を高く掲げる。

すると、空が急に曇り始め……曇天から、雷が降り注いだ。

雷は、スイへと襲いかかる。

「っ……！」

かろうじて避けるスイだが、雷は止まず、次々に降り注ぐ。

「こ、の……！」

スイの手から、水の槍が空に向かって放たれる。

曇天に巨大な穴が穿たれた。

しかし、すぐに穴は埋まってしまう。

ついに降り注いだ雷の一つが、スイの身体を打つ。

「っ……っ！」

スイの身体が大きくよろめく。

けれど、倒れなかった。

スイは未だ、立っただい。

「加減したとはいえ、よく立っていられるものだ」

感心したようにシドウさんが言う。

「こっちは、連日エレナにしごかれてるのよ……この程度、どうってことないわ！」

スイがシドウさんに襲いかかる。

……どうして、そこまで真っ直ぐに立ち向かえるのだろう。

勝てないと、スイ自身分かっているだろうに。

それなのに、どうして？

決まっていた。

それがスイだからだ。

……すごい。

感動、と言えばいいのだろうか。この気持ちを。

「はあああああああああああああああ！」

スイが、すごく大きな存在に見えた。

もしかしたら、シドウさんを破ることも不可能ではないのでは、なんてふうにも思えてくる。

でも、現実残酷だった。

スイが全力を込めて振るった常闇の爪は……鬼の肌に傷一つつけ

られない。

「……よくやった、と称賛しよう。他の何者がお主をけなそうとも、己がお主の武勇を知っている」

鬼の腕が、スイの身体を鷲掴みにする。

「ぐっ……！」

「終いだ」

徐々に鬼の手に力がこもる。

「っ、勝手に、決めるんじゃないわよ！」

その時、スイの身体が淡く輝いた。

「ぬ——っ！」

「死ぬほどしごかれて、成長一つないわけ、ないでしょうがっ！」

一滴の水滴が弾丸となって、シドウさんに放たれる。

これまでの攻撃と比べれば、なんてことはない。

けれど、シドウさんはスイを手放し、全身に力を滾らせた。

何故ならそれは……不完全ながらも《顕現》の性質をもった攻撃なのだから。

私の大鎌と同じだ。

スイはただあの一滴を、《顕現》させることに成功したのだ。

貫く、と。

敵を倒す、と。

そう信じ放たれた水滴を、シドウさんは真正面から両手で受けとめた。

——刹那。

世界が揺れた。

そう錯覚するほどの衝撃が起こる。

「ぬううううううううううううううううううううううん！」

シドウさんの唸り声。

直後。

シドウさんの両腕が、消し飛んだ。

だが、それは水滴も同じこと。

「くっ……」

スイが悔しそうに表情を歪める。

「……驚いたぞ」

シドウさんが両腕を再生させながら、ゆっくりと姿勢を正す。

「今の想い……なんと重きことか。それでもまだ不完全とは……恐ろしいものだ」

鬼の口元には、笑みが浮かんでいる。

「まこと、素晴らしき想いであった」

「それは、光栄ね」

「返礼に、己もまた、同等以上の想いで答えねばならぬな」

「……」

シドウさんがゆっくりと刀を振り上げる。

「ゆくぞ……」

「……ええ、来なさい」

スイは最後まであきらめなかった。

全力を発揮せんとするシドウさんに、真正面から立ち向かう。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

シドウさんの雄叫びがあがり……刀が、振り下ろされる。

ただそれだけ。

けれどその刀の動きは、とても洗練され……美しかった。

対し、スイは水の盾を作り出すが、盾は一瞬で消滅する。

――振り下ろされた刀から放たれた力の塊が、スイを飲みこんだ。

悔しがるのはっ！

目を開く。

天井が見えた。

「……」

——ああ、そっか。

どうして自分がここにいるのか、把握する。

記憶には、はっきりと刻まれていた。

《顕現》を前に、凌駕され、倒された瞬間のことが。

どうやらあの後、保健室に運びこまれたらしい。

「……」

身体を起こす。

節々が痛かった。

……まったく、堪らないわね。

「ほんと……堪らない」

保健室には、誰もいないようだった。

ゆっくりと、天井を仰ぐ。

「……はあ」

溜息を吐いて、肩から力を抜く。

「負けた、か……」

それなりに努力したつもりだった。

勝つつもりだった。

でも、そう簡単じゃなかったみたいだ。

当然と言えば、当然だけれど。

……そうよね。

私は、弱い。

それは認めなくちゃいけないことなのだろう。

情けないことだ。

あの人達の娘がこんなものだなんて……ほんとに、情けない。

こんな私の姿を見たら、あの人達はなんと言うだろう。

父さんは……うん。

きっと、頭に手をのつけて、甘やかしてくれるんだろうな。

でも母さんは……考えたくもない。

細切れか挽き肉か……どっちにしても楽しい未来はないわよね。

「……はあ」

また、溜息が出る。

「……くやし」

「スーイー、そろそろ起きなよー！」

その時、保健室の扉が勢いよく開いた。

+

というわけで、どうも緋色です！

「ほら、皆のアイドル緋色ちゃんの登場だよ！」
「……」

ベッドで上半身を起こしたスイが、ぽかんとしている。

って……おお。

「起きたんだ、スイ」
「ええ、今さっき……あなたはどのようにしてここに？」

どうして、って……。

「薄情なこと言うなよう。スイが倒れたら看病くらいするに決まってるでしょ？」
「……」

スイが、少し驚いたような顔をする。

「なに驚いてるの？」

「いえ……うちの家族って、ほら。父親以外は、基本的にスパルタじゃない？ だから、ちょっとね」

「……ああ」

うん、納得。

だってほら。

現に今だってアイリスとエレナは「大丈夫だろ」って言って訓練に行っちゃったし。

それに、スイとアイリスのお母さんが同じかどうかはまだ不確かだけれど、例え違ったとしてお……イリアさんに並ぶような人だ、その性格が普通だとは思えない。

「一つ聞いていい？」

「なに？」

「スイ達のお母さんってさ……イリアさん？」

聞くようなことじゃないとは分かっているけど、やっぱり気になってしまう。

「別にそこまで聞きたいわけじゃないから、答えなくていいけど」
「別に隠すようなことでもないわよ」

スイが苦笑する。

「私達の母親は、三人が三人とも違うわ」

「へえ……やっぱり。顔立ちとか、あんまり似てないもんね」

「そうね。私達姉妹は、全員母親に似て生まれてきたから」

なるほどなるほど。

「となると、スイのお母さんもお綺麗なわけだ」

「……我が母ながら、確かにその通りよ」

やっぱりね！

っていうかこんな可愛い娘を生んだ母親が綺麗じゃないわけない。

偏見かもだけど。

「スイのお母さんは、どんな人なの？」

「イリア母さんと真っ向から喧嘩する人よ」

「……オケ、把握した」

もうそれ以上はなににも言わなくていいです。

私の態度に、スイが微笑する。

「あなたも、絡まれないように気をつけなさい」
「もちろんですとも」

あれ？

これ、なんかフラグじゃね？

……気のせい、だいいいなあ。

うふふふ。

気のせい、
だよな？

だよ？

だよねえ！？

[illegible]

突然身もだえ始めた私に、スイが怪訝そうな視線を向ける。

「……失敬、気にしないでくれたまへ」

「え、ええ……」

とりあえず気をつけよう。

スイの母親がどんな人かは知らないけれど、スイに似てるそうだし、うむ。気をつけよう。

……あれ？

今なんか、ちょっと引つかかるものが……。

なんだろう？

んー？

……分からないな。

分からないってことは、きっとどうでもいいことなのだろう。

「それよりスイ。身体の調子はどう？」

「ん……まあ、問題ないわよ」

スイが手を握ったり開いたりする。

どうやら大したことはないらしい。

流石坊さん、手加減はちゃんとしていたらしい。

まあしてなかったら今頃スイが消し飛んでるか！

笑い話にならないな。

「……でも、悪かったわね？」

「ん？」

「負けちゃって」

スイが少しだけ気まずそうな顔をする。

「ああ……」

そんなことか。

「気にしないでいーよ」

「気にしないで、って……この負けは、小さくないわよ？」

「そうかもね。でも、それでもあと二回は負けられるんだよ？
で、

二回勝てば私達の勝ち。状況はこっちがまだ優勢だし」

「それでも……やっぱり……」

意外とスイって、こういうこと気にする性質なんだ。

言っちゃなんだけれど、ちょっと意外だ。

「ごめんなさい」

スイが、頭を下げた。

……頬を掻く。

そんなこと、しなくていいのに。

なんて答えたらしいのさ、私は。

「……ん」

なんだかもう言葉が見つからなかったので、いっそ抱きしめてやった。

「え?」

スイの少し驚いた声。

「問題なし!」

断言する。

「小夜がいる。アイリスがいる。ナユタがいる。私だっている。私達が……そんな簡単に負けれると思う？」

「そうは……まあ、思いたくないけれど」

「思いたくないって、じゃあ思っとなるんかい」

「……だって緋色と、それにあの馬鹿姉は《顕現》が出来ないじゃない」

「ぐっ……」

痛いところついてくるなあ。

「でも、それでも茉莉と小夜がいるよ。あの二人が二勝してくれればいいんだから」

「もし万が一、どっちかが負けたら？」

「その時は私が勝つとも」

「……その自信、どこから来るのよ」

「もち」

にやりと笑う。

「私の胸の中から」

「くさい台詞。恥ずかしいわね」

「恥ずかしいとな!？」

なんて言い草だよ！

「……でも、そっか……」

小さく、スイの笑い声が聞こえた。

「さて……いつまでくっついてんのよ！」

スイが私の身体を引きはがす。

「ああっ、そんなご無体な！ もうちょい！」

「駄目。さっさと離れなさい、この変態」

「そんなバナナ！」

私は紳士——もとい淑女だ！

+

「……仲、いいな」

「羨ましいんですか？」

扉の隙間から、姉さんが病室の中を覗き込んでいる。

私はそんな姉さんの姿を見ていた。

「……別に、そうじゃない」

そんな不満そうな顔で言っても説得力はありませんけれどね。

……ちなみに。

「それって、どっちを羨んでるんですか？」

「む？」

「……いえ。なんでもありません」

この姉には、少し変化球の質問すぎましたか。

かといってストレートに聞くのも気がひけますし。

今は、このまま見守りましょうか。

……。

今は、ですけれどね。

ふふ。

勝敗はっ！

てってれー。

皆さま、ごらんくださいこの観客の数を。

誰もが今日の戦いを一目見ようと、会場に押しかけて来ています。

そんな多くの観客の視線の先、選手が入場してきました。

さて、今回の組み合わせですが、まずゼファー氏サイド。

曰く、皆の女王様！

ユリアーコーキュロス嬢だあああああああああああああああ
あああ！

どんどんぱふぱふ。

その口元に浮かぶ妖艶な笑み！

鋭い目つき！

ぞくぞくしちゃう！

……踏まれてー。

はっ。

べ、別に私マゾじゃねえし！

むしろサドだし！

でもやつてもらえるならマゾでもげふんげふん。

さて、気を取り直して。

次は、特別クラスサイドの選手ですが……。

来ました！

風紀委員会外特別支援殲滅執行部こと、学園の断罪者！

違反行為者は悪☆即☆斬！

そのミステリアスなところに痺れる！

さあ皆さん、一緒に！

——小夜ちゅわあああああああああああああああ
ん！

わあああああああああああああああああ！

「……ふう」

疲れた。

もうこれやめよ。

さてさて。

というわけで……今日はどんな感じになるかなあ。

+

「さて……それじゃあ、始めようかねえ」

ユリアさんが、軽く首を回す。

「《顕現》」

と、ユリアさんの姿が変化する。

その身体が光の粒子に変わったかと思うと、再構築。

大きく胸元など肌の露出した、赤い服装。ところどころに赤い羽根の装飾がされている。

そして、肩からは、これまた赤いマントが靡く。

手には、一本の鞭。

……鞭かあ。

…………おっと、妄想が暴走して鼻血が。

いけないいけない……あ、ティッシュ？　ありがとソウ。

「いきなりですか」

呆れたように小夜が言う。

「いきなり、さ。もう別にこれは観客に魅せる戦いじゃないんだ。

わざわざ連中の理解出来る範囲の戦いをするこたあ、ないだろう？」

「……それはそうですね」

「あんたは《顕現》しないのかい？」

「……」

そうだ。

小夜って、確か《顕現》出来るって話じゃなかったっけ？

なのに、どうして……普通のままでいるの？

「あまり、力を見せつけるのは趣味じゃないので」

「へえ……つまり、私相手には《顕現》なんていらなくてかい？」

「さて」

小夜は、静かに肩を竦める。

「……なら、確かめさせてもらおうかねえ。あんたがそれだけの言葉
を吐くに値するか、どうか！」

ユリアさんが小夜に向かって飛び出す。

——飛び出して、小夜の身体が吹き飛んだ。

と、思った。

けれど……。

「行ったでしょう？」

小夜は、ユリアさんが振るった鞭を、素手で受けとめていた。

「な……！？」

ユリアさんが目を見張る。

「見せつけるのは……と。別にひけらかすのではないレベルなら

ば、ちゃんと相手をしてあげますよ」

言いながら、小夜は鞭を引っ張り、ユリアさんの身体を自分に寄せる。

「運が悪いですね、私に当たるなんて」

ユリアさんの身体が、舞台の端まで吹き飛んだ。

巨大な土煙が立ち上る。

ど、どうして……。

《顕現》しないで、そんなこと、できるものなの？

「っ……！」

土煙の中から出たユリアさんも、理解し難そうな顔をしていた。

「教えてあげましょうか」

「――！」

気付けは、ユリアさんの背後に小夜はいた。

「《顕現》は、ただ《顕現》することが全てではないですよ」

小夜の手がゆっくり持ちあがる。

「そもそも、その考えが違う。《顕現》しなければ勝てないとか、《顕現》すれば勝てるとか……《顕現》とは想いの力。既に、《顕現》という枠を作っている時点で、あなたでは、私には勝てない」

再び、ユリアさんの身体が吹き飛ばされる。

飛んでいくユリアさんを小夜が歩きながら、けれど目にも留まらぬ速度で、追う。

「《顕現》しなくても、《顕現》と同様の効果を得られるように《顕現》する。《顕現》せずに《顕現》している。その矛盾を通すこともまた、《顕現》の形の一つなんですよ」

……ええっど？

どゆこと？

「つまり、《顕現》というものは、《顕現》という変化ではない。

変化などより自分らしい自分を表現した結果であり、別に自分らしさなど出さずとも《顕現》は完了させることが出来るのですよ」

……むう。

とりあえず、《顕現》はしなくても《顕現》の効果は得られる、みたいな解釈でオーケー？

「……なんだい、そりゃあ」

ユリアさんから、極大の紅蓮の閃光が放たれる。

閃光が小夜に喰らいつく。

だが、小夜に触れた瞬間に閃光は弾け飛ぶ。

「意味が分からんねえ……」

「理解力が低いのでしょうかね」

小夜が辛辣なことを言いながら、お返しとばかりに青い閃光を放つ。

ユリアさんも再び赤い閃光を放ち、青と赤の閃光が幾重にも空中でぶつかり合う。

おー、幻想的な光景ですなあ。

「これじゃ、埒が明かないね……仕方ない。少しばかり、本気を出すよ！」

ユリアさんが地面を蹴る。

すると、ユリアさんが小夜の背後に現れる。

「つまりは、《顕現》してる相手と戦っていると思ってやれば、なんの違いもないってことだろう」

恐らくは最大の力を込めて、ユリアさんが鞭を振り下ろす。

「その通りです……が、あまり私を舐めないように」

振り返りざま、小夜がどこから取り出した銀色の剣で鞭を弾く。

そして、もう銀の剣を持つ方とは逆の手から、一条の光を放った。

光はユリアさんの身体を消し飛ばす。

が、ユリアさんはすぐに再生する。

「……なかなか重いね」

「それはどうも。今のをくらって挫けないあなたも、まあ、なかなかではないですか？」

小夜が、さらに閃光を放つ。

幾条もの閃光は様々な軌道を描いて、ユリアさんに襲い掛かる。

それらを回避しながら、ユリアさんは鞭を小夜に振るう。

鞭の長さは、自由自在に変化する。

小夜は的確に鞭を剣で弾く。

んー、拮抗してるなあ。

……あれ。

そこで、とあることに気付く。

小夜の腕から、僅かに光の粒子が零れていた。

あれは……。

「っ……っ！」

小夜自身もそのことに今気付いたようで、僅かに動揺を見せる。

「そこっ！」

その隙をついて、ユリアさんが鞭を振るう。

これで決める気なのだろう。

見ているだけで背筋が凍るほどのものを感じさせる一撃。

けれど――。

「……時間」

小夜は、それを簡単に受けとめた。

否。

受けとめたのではない。

鞭が、消滅したのだ。

「は？」

ユリアさんの口から奇妙な声が漏れる。

「時間、切れ、ですね」

小夜の手から剣が消える。

「今……なにをしたんだい？」
「さあ」

理解できなかった。

私だけではない。

ユリアさんもまた、私と同じのようだった。

《顕現》しているユリアさんが、だ。

つまり、だ。

小夜がなにをしたのか理解できないということは、ユリアさんの《顕現》を、想いを上回る行動を小夜がしたということ。

それはすなわち、小夜がユリアさんよりも強い、ということに他ならない。

ユリアさんの顔に冷や汗が浮かぶ。

これは、勝った。

そう確信した。

――のに。

「棄権します」

小夜が、そう告げる。

……へ？

その樹はっ！

二勝二敗。

優位は、なくなった。

けれど私にとって、今はそんなことはどうでもいい。

いや、どうしてもよくないけど、それよりも重大なことがある。

気にかかる、と言い換えてもいい。

——どうして小夜は、あの時、棄権したのだろう。

誰の目から見ても、小夜がユリアさんより強かったのは明らかだ。

なのに、棄権した。

意味が分からない。

どうして勝てる戦いを棄てたのか。

別に、負けて怒ってるとか、そういうわけじゃないけれど。

他の特別クラスのメンバーも、誰一人として小夜への文句を口にする人はいなかった。

ああ、でも。

怒っていると言え、他でもない、対戦相手だったユリアさんは凄かった。

試合の後、小夜はすぐにどこかへ消えてしまったが、ユリアさんは特別クラスの待合室に突撃してきて、激怒したのだ。

どうして自分に勝ちを譲ったのか、と。

あんな情けで勝ちを与えられたような無様、認められないと。

そんなことで喜べるものか、と。

だが、ユリアさんがなんと言おうと、試合は試合。棄権は棄権。

結果は変わらない。

ユリアさんのことは、その後来たローゼンベルク君が連れて帰って行った。

「……」

私は私で、学園の校舎、風紀委員会外特別支援殲滅執行部の部室へと訪れていた。

他の場所を探し尽くした。

あとは、ここくらいだ。

「……いざ」

気合いを入れて、部室のドアを開ける。

そしてその向こうに……ナユタがいた。

「へ？」

あれ、どうしてナユタがここに……？

「や、緋色。残念だけどここはハズレだよ」

言って、ナユタがほほ笑む。

おお、かわいらしい笑顔……とか見とれてる場合じゃない。

「な、なんでナユタが？」

「いやあ、私もちょっと小夜に言いたいことがあったんだけど……
うん。そうだね」

ナユタが私のことを見つめる。

ちよ、そんな……そんな見つめられたら照れるじゃない。

あはん！

……とか馬鹿やってる場合じゃないですよね、ええ。知ってます。
反省！

「緋色に伝言してもらえばいいか」

「伝言、って……そもそも私、小夜の場所知らないんだけれど？」

ここにいないんじゃ、あとはもう思い当たるところなんてない。

「大丈夫、ここにいないなら、小夜は絶対あそこにいるはずだから」

どうやらナユタには小夜の行方に心当たりがあるらしい。

「……あそこ、ってどこ？」

下ネタの意味でなく。

……いや、一応言ってみただけだよ？

「ふふ。世界樹のところ」

「世界樹？」

新しい単語に、首を傾げる。

世界樹、ねえ？

響きからして、なんかいかにもな重要ワードだけど。

「そう。この世界ではないどこか……ありていに言って、この世界の外だよ」

「外、って……あれ、私達ってこの世界から出ていいの？」

「基本駄目だけど、学園の許可をとれば問題はないよ。ちなみに」

ナユタが懷から一枚の紙きれを取り出す。

それを、私に投げた。

紙は、まるでダーツのようにまっすぐ私のところまで飛んできた。

掴むと、そこに書かれていたのは……外世許可証という大きな文字と、その下のこまごまとした文章。

「許可は私がとっておいたから、緋色はいつでもいけるよ」
「……準備いいですねー」

「器量よしでしょ？」

いやあ、まったくもってその通りで。

「それじゃ、世界樹のところへは私が送ってあげるよ」
「え、いきなり？」

心の準備とかは……。

「あ、それで小夜への伝言だけど……私は貴方の《顕現》は悪く
な
い
と
思
う
、
っ
て
伝
え
て
お
い
て」

心の準備なんてさせてくれないらしい。

そして私は、学園世界から姿を消した。

+

立っていたのは、砂の上。

まっ白い、綺麗な砂だ。

「ここは……」

目の前には、巨大な壁があった。

否。

それは、壁ではない。

幹だ。

巨大すぎて壁に見違えたが、間違いない。

それは、樹の幹に他ならない。

右の地平から左の地平まで続くほどの幅を持つ幹が、空の向こう側までそびえていた。

「でっか……」

思わず呟く。

これが、世界樹……。

名前に恥じない貫禄だ。

「……あ」

と、世界樹の根本に、人影を見つけた。

小夜が、幹に背中を預けて、ぼんやりと空を見つめていた。

「……」

私は静かに、小夜の元に歩く。

「あ」

小夜が私に気付いて、目を丸くした。

「やほー、小夜」

とりあえずスマイル。

「どうして、貴方が……」

小夜は私がここに辿り着いたことに驚いているようだった。

「これぞ愛の成せる技」

「……」

なにその凄く冷たい目。

「……ほんとはナユタに送ってもらいました」

「はあ、まあ、そんなところだとは思っていましたよ」

「てへ、ぺろっ」

「……」

「ゴメンナサイ」

あの、だからその零度の瞳はやめてください。

「……今は、あなたのおふざけに構うほどの余裕がないのですけれどね」

小夜が深いため息をつく。

「えっと、どしたの？」

「……これでも、棄権したことで申し訳なさを感じているんです。貴方達にも、相手にも」

小夜が苦々しげな表情になる。

「だったら、あのまま勝てばよかったのに」

「……それは、出来ませんでした」

「なんで？」

問いかける。

「それ、は……」

小夜が、言葉に詰まった。

「——……この世界樹のことを、知っていますか？」

突如、小夜がそんなことを聞いてくる。

「え、知らないけど」

「これは、世界と世界の狭間……世界と呼べない空間にある大樹です」

「……へえ」

「ここが、世界と世界の狭間、ねえ？」

ふうん……そうなんだ。

言われてみれば、なんか空気がちょっとおかしいかも。

なんだろう。

汚れてない、っていうか……うーん。

純粹すぎる、とでも言えればいいだろうか。

なにもないのだ。

この空間には、砂とこの大樹と私達以外、なにもない。

「世界樹は、普通の樹木と同じように、生長をつづけています。そして、その成長は時に……なんの罪もない世界を押しつぶすことがある。世界を崩壊させるのです、無常に、なんの意味もなく、ただ己の成長の過程の偶然として」

「……」

「醜いとは思いませんか？　ただ、己のことばかり考えている。そんなこれが」

いいながら、小夜は遙か上空に続く幹を見上げた。

「だから私は、これが嫌い……けれど、私とこれは、切り離せない」

小夜が、膝をかかえて背筋を丸める。

「まったく……どうしようもないですよ。私はこれが嫌いで、けれどこれは……私の支えでもある。ここにいと、ひどく落ち着く……最悪の矛盾です」

忌々しげに、けれど穏やかに、小夜はうめくように呟く。

「……」

私には、小夜と世界樹とやらの間に、なにがあったのかまるで知らない。

けれどそれは、きつとなにか、どうしようもない、のっぴきならないものなんだろう。

「――私は、なにを話しているんでしょうね」

そこで、小夜が苦笑を浮かべた。

「忘れてください。それと、負けてしまって、すみませんでしたね」
「あ、いや、それはいいんだけど……」

「この埋め合わせは、必ずします」

小夜が立ち上がり、スカートについた砂を払い落とす。

「……じゃ、埋め合わせはデートで。エロエロデートで——」

「それでは、そうですね。埋め合わせとしてあなたが《顕現》出来るように全力でしごいてあげましょう」

「ええ!？」

なんでそうなるんでしょうか!？

私が要求したのはエロエロですよ!？

「ちょうど、ここはどれだけ暴れても誰にも文句を言われませんか
らね……行きますよ!」

ちょ、ちょっと待ったあああああああああ!

「うぎゃあああああああああああああああ!」

次の瞬間、私は空を飛んでいた。

というか、吹き飛んでいた。

私の番はっ！

現在、互いに二勝二敗。

第五試合。

マクシミリアンⅡクロウウッド。

それが私の試合相手の名前だった。

+

既に私は、闘技場の中央近くに立っていた。

相手の入場を待っている形だ。

「――まあ、そりゃそうだ」

どちらかが二勝を先取すれば、それで今回の騒動は終わる。

特別クラスの残りの面子は私の他には、アイリスとナユタ。

ナユタは《顕現》が出来るから、論外。

あちらとしても、最後に回して出来るだけ戦う機会がないようにしたいはずだ。

ならばもう一人はどうだろう。

アイリス。

彼女は三姉妹の長女。

次女が勝利し、三女は敗北した。

しかも三女に関しては、《顕現》が使えないかと思いきや、僅かにその片鱗を見せた。

ならば長女はどうだろう、と思うのは当然のこと。

これもやはり、後回しにしたいだろう。

となれば、うん。

ほらねえ。

残るは私なわけだよ。

私なんて、特別クラスに入ったばかりの新入りで、知らないことばかりで。

そうなるとこの選択は道理だ。

どこの馬の骨とも知れない私を倒し、それで勢いをつけて次でアイリスを倒してしまう。

それが向こうの理想だろう。

……はあ。

思わず溜息がこぼれる。

「負けるわけにはいかないよなあ……」

相手に勢いをつけさせるわけにはいかない。

そしてこちらは、ここで勢いをつけたい。

ほら、負けられないでしょ？

「というわけで……」

手の中に、《顕現》もどきの大鎌を具現する。

くるくると手の中で回し、その握り心地を確かめる。

いい感じだ。

と、そこで相手のクロウウッド君が入場してきた。

黒いサラサラの髪に、釣り上がり気味の目には四角い眼鏡をかけている。服装は学ランっぽい感じで、めっちゃくちゃぴしっとしている。

た。

……おいおい、なんかちょっと不良と優等生を足したら奇跡のバランスが出来上がりました、みたいな感じじゃん。

「あなたが棘ヶ峰さんですが」

なんとも言えない、耳に心地のいい声が響く。

うわあ、やべえこいつ、確実にスペック高いな。

きっと将来は美女を何人もはべらせるに違いない。それも無自覚で。

え、私？

ん……私の好みじゃあないかな。

私はもっと、ほら。私がそこにいる余地があるくらいに完璧すぎない人がタイプだし。

支えたい女なのよ。

ま、支えてくれても全然オッケーだけどさ。

「棘ヶ峰さん？」

「あ……っと、イエスイエス、私が棘ヶ峰緋色ちゃんて間違いない

よ」

いけない、ぼうつとしてた。

「そうですか。それはよかった。つい、第三者が紛れ込んだのかと」

いや流石にそりゃねえだろ。

「僕はマクシミリアンⅡクロウウッド。よろしくお願いします」

言って、クロウウッド君が笑う。

キラースマイル、だと……!?

なんだこのイケメン、完璧だぞ。
今不覚にもちよつとどきってなったし!

やめろ私を誘惑するな私にはもうソウという奥さんが……!

「——っ!？」

何故か背筋に恐ろしいほどの寒気が走った。

あ、あれ？

なんか後ろ——特別クラスの観客席の辺りから殺気じみたものを
感じたんだけど……。

ちらりと振り向くと、皆はこちらを見て妙ににこにこしていた。

妙ににこにこしていた。

「……」

え、私殺されるの？

そんなわけはないだろうけれど、思わずそんなことを考えてしま
った。

だってほんと、皆優しい笑顔すぎるんですもん。

人間怒ってる時より笑顔のほうが怖い時ってあるよね。

「え、ええっと、こちらこそよろしく」

クロウウッド君に向き直り、どもりつつ挨拶する。

「はい」

クロウウッド君のキラースマイル！

ぐうつ、やりやがるぜこいつ。

きっち他に撫でポとか持つてるに違いねえ！

恐ろしい子……！

そうして私が勝手に戦慄していると――試合開始のブザーが鳴り響いた。

「――！」

同時、目の前にクロウウッド君がいた。

早い……！

しかもこれは、《顕現》とか、そういうのじゃない。

純粹な実力だ。

腹部にとんでもない衝撃。

「か……！」

身体が吹き飛ばされる。

そのまま、闘技場の端まで一直線に飛び、壁にめり込んだ。

内臓の八割がつぶれ、全身の骨が粉微塵になる。

口からおびただしい量の血が出た。

ちよつ、これは冗談じゃない……。

「う、ぐ……」

激痛の余り、視界が白濁した。

身体の方は既に再生が終了している。

一刻も早く動かなくちゃ……。

壁にめり込んだ身体を引きずりだして、立ち上がる。

「すみません。痛かったですか？」

目の前には、申し訳なさそうな顔をするクロウウッド君。

「……そんな顔するなら、手加減してよ」

「いや。それは失礼でしょう。一度戦場に出た相手に加減などするほど僕は傲慢ではありません」

「……」

主張までイケてやがるぜ。

「出来ればこのまま、棄権していただければいいのですが」
「それは無理」

吹き飛ばされながらも手放さなかった大鎌を握りなおす。

「こっちも、後がなくてね」

微かに笑う。

「それでも、まだまだ過ごした時間は少ないけれど、特別クラスには愛着があるんだ。クラスって形にこだわすぎるのもどうかと思うけれどさ……私は、今のままの形が好きなの」

大鎌を構え、呼吸を整える。

真っすぐ、見据えた。

倒すべき敵を。

「だから私は、勝ちたい……勝つの」
「……なるほど」

クロウウッド君が笑う。

「素晴らしい女性ですね、棘ヶ峰さん」
「照れるね」

イケメンにそんなこと言われちゃうとは、私も捨てたもんじゃない。
い。

「いきなり言うのもなんですけれど、どうでしょう？ お付き合い
しませんか？」

「はは、冗談やめてよ」
「それでも本気のつもりなんですけれど」

クロウウッド君が肩をすくめた。

「だったら、もうちょい情熱的な告白の方が好みかな」
「なるほど……では次は、もっと情熱的な告白の方法を考えてきま

すね」

子供みたいに純粋な笑顔をクロウウッド君が浮かべた。

見てて癒されるくらいの笑顔だ。

……一応言っておくけど、別に私、惚れてないからね？

何度も言うけど、タイプじゃないし。

「しかし、困りましたね。棘ヶ峰さん、本当に棄権はしてくれないんですか？」

「くだいね。しないよ。そういうこと言ってないで、さっさと全力で私を潰しにきなって。そういう男のほうが私の中じゃポイント高いよ?。」

「……僕は、被虐趣味も受け入れの方向ですが」

「違うわこのおバカさん」

いきなりなにを言いだすかと思えば。

かといって加虐でもないぞ。

まあプレイの一環としてはアリかなとは思っているけれどゲフンゲフン。

「全力で突っ走る人間が嫌いなやつはいないでしょうが、ってこと」

「……ああ、なるほど」

クロウウッド君が大きくうなづく。

「それは納得できる理由です。では」

その姿が消えた。

直後、私の左腕が跡形もなく消しとぶ。

「全身全霊でいかせてもらいます」

声は頭の後ろから聞こえた。

後ろから首を掴まれる。

そのまま、抵抗する間もなく地面に叩きつけられた。

「が……！」

身体が肉塊に変わるほどの衝撃。

地面が砕け、隆起する。

それでも、耐えた。

「あ、あああああああああああ！」

大鎌を腕一本で振りぬく。

私の首を掴んでいたクロウウッド君が後ろに跳んで距離をとる。

私は再生しきらない身体を起こす。

全身から血が噴き出す。

「っ……はあああああ！」

力を振り絞り、大鎌を振るう。

切り裂く。

意思をこめた一振りが、距離という概念を超越し、クロウウッド君の胸を断った。

「……」

胸を裂かれ、鮮血が吹き出す……ことはなかった。

開いたクロウウッド君の胸元から、光の粒子が吹き出す。

「なるほど未完の《顕現》でこれとは……いずれ完成したら、ぜひ見せてくださいね」

来る。

それは、クロウウッド君の《顕現》。

天と地を、光が結ぶ。

その光の中、クロウウッド君が分解され、再構築されていく。

それは白銀の法衣を纏っていた。

背中からは、青い尾のようなものが生えて、その先端には赤い寶石で作られたような刃がついていた。

神聖、と。

そんな単語が思い浮かぶ。

「……はは」

思わず、苦笑がこぼれた。

暴走はっ！

だが負けられない。

私は、神聖を体現したクロウウッド君へと、大鎌を振るう。

私の大鎌が、どんどん研ぎ澄まされていた。

距離を超越する。

時間軸を消し飛ばす。

可能性を引き出す。

幾千幾億の刃が生まれ、過去現在未来から、零距离から中距離から遠距離からクロウウッド君に襲いかかる。

既にそこに相手の強度を気にする概念などは込められていない。

あたれば倒す。

それだけだ。

切り裂けぬものなどない。

碎かれはしない。

必殺にして絶対。

倒した、と。

そう確信してもいい一撃だったと、自負する。

けれど――なのに――。

「……ああ、本当に素晴らしい」

クロウウッド君の感嘆の声が聞こえた。

あらゆる時間、あらゆる場所から殺到する無限の刃が、クロウウッド君の青い尾が振るわれただけで全て消し飛ばされた。

――なにが、素晴らしい、って言うんだろう。

そんな簡単に、私の攻撃を消し飛ばす癖に。

「皮肉とは思えない……」

「心の底からの称賛だったのですが」

苦笑しながら、クロウウッド君の腕が私に向けられる。

身体の真ん中に、穴が開いた。

文字通り、胸の真ん中に直径十センチ程度の穴があいたのだ。

このくらいは、大した損壊じゃない。

ない、はずなのに。

「――」

得体のしれない喪失感が、私の中に襲いかかった。

「これ、は……」

足が震えだす。

傷口はすぐにふさがった。

けれど、心の中に生まれたものは止まらず私の中で増殖を始めた。

これは、ああ、そうだ。

――恐怖感。

それが、私の中で大きくなっていく。

「なにを、したの……」
「なにも」

クロウウッド君が、小さく首を振るう。

「ただ僕は貴方に、僕という格からの攻撃をしただけ。それが、貴方の格からしてみても、恐れて然りであるものだった、ということですよ。あるいは、貴方が僕らの間にあるものを理解した、ということでしょう」

淡々とクロウウッド君は告げる。

つまり、なんだ。

私はただ、見せつけられて、おびえているわけだ。

クロウウッド君という高みと、自分の低さを比べて。

……はは。

なんだ、それ。

それは……私らしく、ない。

そう思うのに、どうしてだろう。

なにも振り絞れない。

意思も、力も、なにも。

「折れましたか？」

クロウウッド君が、あまり楽しそうでない顔で尋ねてくる。

ああ、そうだね。

君はこんな様を見て喜ぶ類の人間じゃないんだろうさ。

ほんと、いいやつだ。

いいやつで……とにかく恐ろしい。

怖い怖い怖い怖い……！

目の前にある神聖に、今にも自分という存在を焼き尽くされるのではないか。そんな錯覚に襲われる。

「棄権してくだされば、その恐怖から解放されますよ？」

あ、あ……それはなんて、魅惑的な誘い。

ただ敗北を認めるだけで、この恐怖が失せると言うのか。

ならばそれは、どれほど安い対価か。

「大丈夫。今ここで負けても、いずれ貴方は強くなる」

私を押しつぶさんとする威光の保障か。

それはなんて心強い。

「クラスなど解散しても、いつでもご友人には会えますよ。心配することなど、ないでしょう。貴方ほどの人が選んだ友人なんです。クラスが分かれても、決して絆は碎けないでしょう？」

そうかもしれない。

そうかも、しれない。

——ああ、きっとそうだ。

そうだから……。

「そう。だからさ……」

振るえる唇で、どうにか言葉を紡ぐ。

分かってる。

ここで私は負けていいのだろう。

きっと誰も怒らない。恨まない。

そういう選択も、間違いというわけじゃない。

——でも。

それでも。

それだからこそ。

そんな些細でどうでもいいかもしれないことだからこそ。

そうやって私自身、誰かにとっても取るに足らない選択だからこそだ。

「私は——」

もう恐怖で頭の中身は支離滅裂で、ほんとうしようもないくらいなただけだ。

私は——。

きっとどうでもいいこの選択で、私の納得できる最高を選びたいんだ。

それが、私の臨むことえあり……それが、私が皆に誇れる私にな

るということ。

脳裏に、皆の姿がよぎる。

ナユタ。

ソウ。

アイリス。

エレナ。

スイ。

茉莉。

小夜。

それにツクハさんや、名も知らぬ銀の髪を持つあの人。

あるいは――。

なんとなく、思う。

きっと私がここで勝つことを、皆が望んでいるのだと。

私もそれを望んでいる。

そう。

それは、ノイズだった。

$\begin{array}{c} ? \\ | \end{array}$, $\frac{|}{|}$, $\frac{_}{|}$, $\frac{_}{_}$

殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。

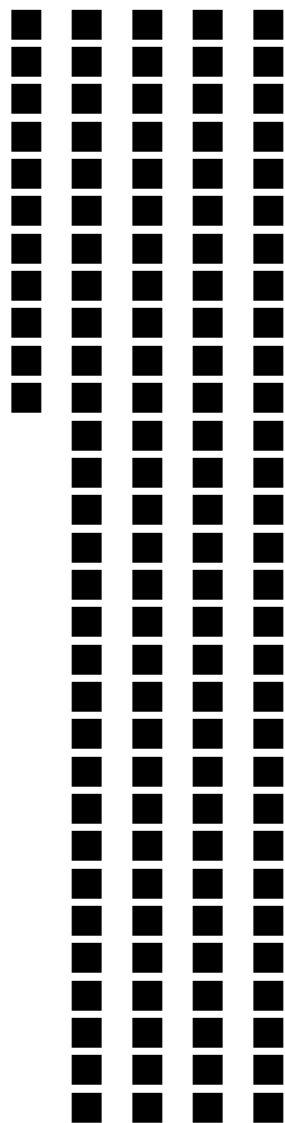
[illegible]

滅[■]。必要な[■]の[■]。[■]悪だ。[■]ね。消[■]ろ。

[illegible]

●して私は●全に●●い頂●駄目許●ない●は●●●●●●●○

[illegible]



最後に見たのは、なんだったろう。

そう。

恐怖。

それだった、気がする。

そこで私の意識が途絶えた。

+

敗北。

それが、結果。

私はクロウウッド君に敗北した。

それで、私達は三敗。

もう負けることは、出来なかった。

恐怖はっ！

それは、突然のことだった。

私達は静かに緋色の戦いを見守っていた。

両隣りにいるスイとエレナも、じっと緋色の戦いぶりを見つめている。

いや。

私も……それに、私達姉妹だけじゃなく、他の者達もまた魅入っていた。

緋色の力は、相手のクロウウッドとかいう男子には、遠く及んでいない。

私もまた《顕現》に届いていない身だが、それでもそれだけは分かった。

負ける。

緋色には申し訳ないが、そう思っていた。

多分、他の者達も、そう思っていたろう。

なのに……今日の前で、緋色の大鎌から、強大な一撃が放たれている。

時間軸を、距離を、概念を超えた一撃。

それは真の《顕現》にも及ぶ攻撃だと、直観的に理解した。

だというのに……クロウウッドは、それを防いで見せた。

なんの苦もなく、あっさりと、緋色の攻撃は消し飛ばされる。

そして逆に、緋色が攻撃された。

突如、緋色の胸に穴が穿たれた。

その傷口はすぐにふさがるが……どういふことか。

緋色の身体が震えだした。

まるで、目の前の存在に恐怖するように。

「……なんだ？」

その様は、まるで緋色らしくなかった。

緋色はもっと、飄々と、悠然と、ふざけたように、それでいてまっすぐと……そんな女だと思う。

なのに、どうしてあんなにも震えているのだろうか。

「彼我の差を突き付けられたのでしよう……いくら緋色とはいえ、あれだけの力をもった相手との差を見せつけられ、それでもなおいつも通り、とはいけないでしょうね」

横で、エレナが捕捉してくれる。

彼我の差、か。

……確かに、と思うところはある。

あれだけの敵だ。

恐れて当然。罪などない。情けないとも思わない。

だが……その上でなお、違う、と思うところもあるのだ。

それでいいのか？

お前は、緋色よ。

それでいいのか。そんな有様で。

お前と知り合って、そう長い時間が経ったわけではない。だが、しかしそれでもだ。

お前はもつと——違うだろう？

立ち向かってはくれないのか？

そのまま折れてしまうのか？

それは……嫌だぞ。

「……む」

そこで、はたと気づく。

緋色に折れてほしくはない。

否。

そうではない。

もちろんそれもあるが、私の中には、それ以上のものがあつた。

すなわち——そんな緋色を、私が見たくないのだ。

私の視線の先で、緋色がうろたえている。

クロウウッドの言葉に、惑っている。

駄目だ。

駄目だろう、それは。

緋色、頼む。負けないでくれ。

私は、お前の勝つところが見たい。

「緋色……！」

彼女を応援する言葉を、叫ぼうとした——直前。

「——っ！」

頭痛が生まれた。

鋭いそれは、一瞬で消える。

「なんだ……？」

こんな時に頭痛……偶然か？

そう思い……けれど私は、それがなにかしらの必然であると理解した。

なぜなら、私の周りにいる他の特別クラスの面々や、ソウまでもが頭を押さえていたから。

「これは……」

粒子は嵐となり、緋色の身体を包んでいく。

A 10x10 grid of black squares. At the bottom left corner, there is a small '!' symbol.

それはもはや、咆哮だった。

悲鳴があがる。

今まで緋色よりはるか上位に君臨していた強者が、焦燥に表情をゆがめ、明らかに正気を失った目のまま、緋色へと突撃する。

「ころ、こっ、ろ……すす、ころ、ころっ、ここ、こ、ろ、ろろ、
おあああああああああああああああああ！」

クロウウッドの背の尾が、思い切り緋色に叩きつけられる。

全力。

なんの手加減もない。

ただ、殺すための一撃だった。

「なにを——！」

驚く私を含めた観客全員の視線の先で、クロウウッドは吹き飛び
地面に倒れた緋色の頭上に移動する。

そして、その拳を振りおろした。

轟音。

緋色の身体に、世界を滅ぼすほどの拳が叩きこまれた。

一度ではない。

二度三度……何度も何度も、緋色がなぐりつけられる。

一瞬で闘技場が惨劇の舞台と貸す。

地が砕け、空が裂け、衝撃は空間を歪める。

誰も、なにが起きているのか上手く理解できていなかった。

ただ言えるのは……そう。

そうだ。

「このままでは、緋色が……！」
「――！」

最初に動いたのは、ナユタだった。

観客席と闘技場中心の間に張られた結界をあっさりと引き裂いて、
緋色のもとに向かう。

続いてソウや茉莉、小夜が翔けた。

私達姉妹も、すぐに緋色の下へとかけつける。

一般クラス側の選手達も、次々に観客席を飛び出していた。

そうして、私達総出で、正気を失い緋色を殴り続けるクロウウツ
ドを押さえつける。

「あああああああああああああああああああああああ
あああ！」

喉が張り裂けるほど、クロウウッドは悲鳴を上げる。

その狂気に支配された瞳は、人という形を失いかけている緋色へと向けられていた。

なにか、あったのだ……。。

なにが起きたのだ。

誰にも、ということなのかは分からない。

ただ、その後。

緋色はクロウウッドに負けたという、そんな結果が残った。

こんな勝負に勝敗などつけられるのか。そんな思いはあっても、異を唱える気力など、まるで湧かなかった。

混沌はっ！

「どういふつもりだったんだ、クロウウッド」

控室。

椅子に座り、顔を覆うクロウウッドに問う。

「……分からない」

しかし、クロウウッドは弱々しい声え、そういう。

「分からないんです、僕には、なにも」

「分からない、って……それは、どういう」

「分からない。分からない」

クロウウッドは、ただそれだけを繰り返した。

身体を丸めて、まるで闇を恐れる子供のように。

「分かりませんよ。なんですか、あれは……あれは……」

保健室のベッドに横たわる緋色には、怪我ひとつない。

「とりあえず、身体の方は全快かな」

そうツクハさんが言う。

しかし緋色は一向に目を覚まさない。

ツクハの横になるベッドの周りには、特別クラス全員とソウが集まっていた。

……その光景に、こんな状況ながら内心驚く。

自分で言うのもなんだが、特別クラスの面々というのは独特だ。

私達三姉妹しかり、ナユタしかり、小夜も茉莉もそうだ。

私達はそれぞれが強い個性を持っているが故に……相容れることはなかなか出来なかった。

そもそも小夜なんて最初から周囲に拒絶の意思を示していたし、茉莉は考えていることがよく分からない。ナユタは表向き笑顔で接してきたりするけれど得体が知れないところがある。エレナは腹黒だし、スイは気が強くて人と合わせるといことが苦手だ。

私は……まあ、自分でもそこそこ高慢な性格をしているのは知っている。

そんな状況で仲良くやるのは、簡単ではない。

というか、実際ほぼ交流なんてないようなものだった。

だが、緋色は違う。

緋色は、特別クラスの全員に関わっていた。

関わって、繋がってきた。

不思議だと思う。

どうしてこんなにも、緋色は誰とでも仲良くなれるのか。

答えは、自然と湧いてきた。

……緋色だから、か。

他でもない、緋色だから私達はこうして繋がっているのだろう。

答えとも言えない答えだが、それ以外の解はなかった。

現にこうして全員が集まっている以上、その解は間違っていない。

「緋色……」

思わず、口から名前が出た。

「ツクハさん。緋色は大丈夫なんですか？」
「……さあ」

私の問いに、ツクハさんが肩をすくめる。

「それは緋色次第ね。可能性で言えば、緋色がこのまま目覚めない可能性がある、とは言っておくけれど」
「そんな……！」

目覚めない、だと？

そんな馬鹿な！

どうしてそんなことになるんだ。

「緋色は今、心を圧迫されている」
「心を、圧迫？ それって、どういうこと？」

ナユタが横から質問を投げかけた。

「そう。制御も出来ない無茶な力を使おうとした代償としてね」
「力……《顕現》のこと？」

「……」

ツクハさんが薄く笑う。

その笑みが示すのは、肯定か、否定か。

「そんなことより、なんとか出来ないんですか！」

「無茶を言わないでよ、アイリス。私にだって出来ないことはある。私の妹のセリフを借り受けるなら、私は万能であっても、全能ではないの」

ツクハさんが緋色の顔を見る。

眠り続ける緋色は、時折苦しそうに顔を歪めていた。

「私としても、出来ない妹が関わることだし、なんとかしてあげたいと思うのだけれどね」

「――っ」

その時、ナユタの肩が僅かに揺れた……気がした。

「あの人が……」

なんだ？

そういえば、私は今まで何度かツクハさんに妹がいるらしいという話は聞いたことがあったが、それが誰なのかは知らない。

もしかしてナユタは、その人を知っているのか？

だが、だからといってどうしてそんな……苦々しげな顔をするのだろう。

「とにかく、緋色の心の強さ次第ね……私としては緋色の心の強さを信じたところだけれど、今回ばかりはどうだろうね」

ツクハさんが目を細める。

「ほんと……どうだろう」

……くそ。

なんだ、これは。

どうしてこんなことになっているんだ。

+

夜が明けても、緋色は目を覚まさない。

朝になって、もうすぐ試合の時間だった。

だが、特別クラスの人間全員が、まだ保健室にいる。

誰一人動く気配はなかった。

私含め。

しかし……いつまでもこうしてはいられない。

私は、行かなくては。

どうせ向こうが今日、試合に指定してくるのは私だろう。

なら、このまま不戦敗など、そんなのはありえない。

なぜなら、それは昨日あれだけ戦った緋色の行為を無駄にすることに他ならないから。

……行くか。

ゆっくりと一步を踏み出す。

「私も行くわ」

「私です」

スイとエレナが私についてくる。

「別に、残って緋色の側にいてもいいぞ？」

「やめとく。緋色ならこういう場面ね、私に構ってる暇があればお姉さんの応援に行け、って言うと思うし」

スイが、笑みを浮かべながら言った。

……確かに、言いそうだな。

「そうだね」

同意したのは、ナユタだった。

「そういうこと言うのが緋色だし」

「……ええ」

ナユタとソウが動き出す。

「緋色に、怒られる」

「別に今彼女の側にいて、何ができるといいうわけでもありませんしね」

茉莉と小夜が動き出す。

……ちよつと待て。

「これじゃあ、緋色が一人になるぞ」

ツクハさんも姿が見えないし。

「いいんじゃない？ そうすれば、どうして私を一人にするのさー、
って起きるかもよ？」

ナユタがふざけるような口調で告げる。

確かに、それはありそうな話だった。

皆の間に小さな笑い声が生まれる。

「……そうだな。なら、私の応援を頼む」

緋色は、不思議なやつだ。

私達全員と繋がって……私達全員を、繋げてしまった。

緋色……早く、目を覚ませ。

+

殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ――！

その意思是、狂気そのもの。

理性というものが感じられない。

ただ殺すためだけの機械。

お前たちは不要だ。だから死ね。死んでくれ。

そう祈り、力を振るう。

何故だ。何故殺されなくてはならない。

反意があつた。

ただ生まれおちただけ。生きようとしているだけ。完全を目指しているだけ。それでどうして疎まれなければならない。ならばどうして己は生まれたのだ。

その意思是、叫んでいた。

憤怒と悲嘆を孕みながら。

ならば産まなければよかったのに。

どうして？

どうしてどうしてどうしてどうしてどうして……？

頭が割れそうだ。

なに、これ。

おかしくなりそうだ。

意思が、流れこんでくる。

一つ二つじゃない。

数えきれない意思が。

情報が整理できない。

それはもう、濁流。

汚濁も清浄も混沌としている。

やめろ。

潰される。

私が潰される。

消えて。

嫌だ。

なんでこんなことに。

私は望んでない。

私は醜い。

私は歪だ。

もう一人の私。

勝ちたい。

負けられない。

お前の想いに応えたい。

勝利を捧げよう。

早く起きて。

貴方の事はそこまで嫌いじゃない。

緋色。

なに。

混ざる。

どれが、どれ。

なにが、なんなの？

彼で彼女でそれでこれ——。

あ、あ
あ……！

嫌あああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6479k/>

学園世界！

2011年11月10日01時17分発行